

山口大学創基200周年記念

熟議 in やまぐち  
報告書

熟議  
キャラバン  
2012

風

土





## 目次

### 発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場 山口大学

「氣」が交差する知の広場	丸本 卓也	1
知の広場から実りある知の循環へ	服部 幸夫	2
熟議キャラバンinやまぐち	富平 美波	4
地域と大学が織りなす風土	辰己佳寿子・辻 多聞	5

### ひとと・ひとが・らくらくと・かよう心の・わがふるさと 平川（山口市）

平川地区からのご挨拶	米倉 一夫	9
平川地区の紹介	粟畑 豊	11
平川地区と山口大学との交流	藪 達己	14
熟議キャラバンin 平川「安心・安全」	瀧本 浩一・山崎 隆弘	19
まちあるき in ひらかわ	鍋山 祥子・佐古 裕也	23
熟議キャラバンin 平川「まちづくり」	鍋山 祥子・佐古 裕也	26

### ホッとするね 阿武町

阿武町からのご挨拶	中村 秀明	39
阿武町の紹介	小田 慎也	40
熟議キャラバンin 阿武町・奈古「グローバルなまちづくり」		45
グローバルな取組・事例報告	中野 貴夫	69
宇生賀地域からのご挨拶	山本 勉生	73
うもれ木の郷からのご挨拶	田中 敏雄	74
四つ葉サークルからのご挨拶	原 スミ子	75
実践キャラバンin阿武町・宇生賀「草引き交流」	辻 多聞	76
熟議キャラバンin阿武町・宇生賀「農村の再生」	辻 多聞・坂井 伸伍	82

### ひと・まち☆キラリ 周防大島町

周防大島町からのご挨拶	椎木 巧	89
周防大島町の紹介	中尾 豊樹	90
熟議キャラバンin 周防大島町・浮島「漁村の再生」		93
浮島住民代表からのご挨拶	平野 和生	94
浮島小学校からのご挨拶	河島 洋光	95
グループ①子供の教育	辻 多聞	97
グループ②漁の魅力と悩み	清水谷 卓	99
グループ③高齢者福祉	辰己佳寿子	101
参加学生の感想	寺本 明広	104
もう一つの熟議キャラバンin浮島	辻 多聞	106

### 熟議キャラバン in やまぐちの舞台裏

熟議の背景	原田 道雄	112
熟議の黒子たち	辰己佳寿子	113

山口大学キャラクター「ヤマミイ」

「自由さ」「好奇心」「柔軟性」を持った  
ネコをモチーフとしたキャラクターで、幅広く愛されることを目指しています。



## 「氣」が交差する知の広場

～発見し はぐぐみ かたちにする 知の広場 山口大学～

丸本 卓哉  
Marumoto, Takuya  
(山口大学 学長)

2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」におきまして、私は、実行委員会より「熟議 in やまぐち」を通じて感じたことを一文字で書いてほしいと言われました。その時に書いた一文字が「氣」です。元気に、活気があって、熱気であふれていた雰囲気に通じる「氣」という文字を選びました。

山口大学の基本理念には、「発見し・はぐぐみ・かたちにする 知の広場」の創造がございます。山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐぐみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出すことを掲げております。「知の広場」といえば、大学のキャンパスと思われるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。場所や建物が重要なのではなく、志ある人々が集まって「知の広場」を創造することこそが重要なのです。

2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」は、山口大学の吉田キャンパス内で開催しました。多くの方々にお集まりいただいた一大イベントでしたが、あくまでも「はじまり」でした。その後は、教職員や学生がキャンパスを飛び出し、地域の方々を中心とする「知の広場」を創造することを目指し「熟議キャラバン」を展開させてきました。

それぞれのテーマで熟議を続けて深めていくことこそが、21世紀の多様な課題に接近するための実りある知の循環をつくりだすことにつながると思います。即座に問題解決に至らないこともございますが、コツコツと継続していくことが大切ではないでしょうか。地域と山口大学が協働する熟議を通して生まれた「氣」が交差し、渦となって、この過程を通じて人々が成長し、大きなうねりが生まれる日も遠くはないと思っております。

最後になりますが、熟議キャラバンを通して、様々なかたちで連携していただきました山口市平川地区、阿武町、周防大島町の皆様方に御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



丸本 卓哉 (まるもと たくや)

山口大学 学長

出身：福岡県、1942年4月生まれ

1973年九州大学大学院農学研究科博士課程修了後、山口大学農学部に着任。農学部長、副学長、大学教育機構長を歴任後、2006年から現職。専門は土壌微生物学。2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」では、グループ⑧「安心・安全」に参加。最後の講評の際には、1日の熟議を「氣」という一文字で表現。この「氣」が山口大学の熟議のコンセプトとなっている。

## 知の広場から実りある知の循環へ

～場の創造とつくられていく循環～

服部 幸夫  
Hattori, Yukio

(山口大学 国際・社会連携担当副学長)

2012年3月17日、山口大学吉田キャンパスの食堂は、熱気のある「知の広場」と化しました。この日の「熟議 in やまぐち」では、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場～実りある知の循環をつくりだすために～」をテーマに掲げ、一般市民、行政、企業、大学教職員、学生など約160人が集まり、熟議を行いました。

この時は、本学の活動の三本柱である「(A)研究(究める)」「(B)教育(育てる)」「(C)社会連携(つながる)」を大きな枠組みとしました。(A)大学が研究する意義を検討するにあたっては、①最先端研究、②地域連携型研究、③文学・人間をキーワードとして掲げ、(B)社会を元気にする人材育成を検討するために、④基礎学力、⑤コミュニティスクール、⑥就職をキーワードといたしました。そして、(C)地域づくりのためのつながりを検討する際には、⑦健康、⑧安心・安全、⑨農村の再生、⑩まちづくりというキーワードを掲げ、個別のテーマごとに「熟慮」や「議論」を深めるアプローチをとりました。

当然ながら、1日の「熟議」では刹那的なイベントで終わってしまいます。浮き彫りになってきたそれぞれの課題をさらに深めるために、熟議を継続していく必要があります。2012年度は「熟議キャラバン2012」を地域で開催して参りました。熟議キャラバンは「まちづくり」「農山漁村の再生」「安心・安全」などの地域特有のテーマに絞り込み、少人数制で顔の見える会とし、様々な形態で取り組みました。参加する学生の割合も徐々に増えつつあります。

熟議キャラバンは、学生、教職員、地域の方々が互いに成長し合う過程であるともいえ、「(B)教育(育てる)」という人材育成が大きくかかわっており、教育学、社会学、農学、防災工学等の「(A)研究(究める)」に裏付けられています。

ご覧のとおり、この報告書は、地域の皆様のご協力によってつくられたものです。2012年度の活動として歴史の1ページにすぎないかもしれませんが、コツコツと記録に残していくことも必要なのではないでしょうか。ひとつひとつの実を、大事に大事に信念を込めて育むことこそが、山口大学の地域連携のかたちであると考えています。

知の広場は、主体的に創造していくものですが、実りある知の循環は自ずとつくられていくものかもしれません。「継続は力なり」をモットーに進めていけば、知の循環もつくられてくるのではないのでしょうか。

このような姿勢で、これからも山口大学は地域と共に歩んでいきたいと思っております。





服部 幸夫 (はっとり ゆきお)

山口大学 副学長 (国際・社会連携担当)・医学系研究科 教授

出身：熊本県

熊本高校卒。山口大学の医学部、医学系研究科(PhD)を経て、同附属病院(助手)、同臨床検査医学講座(医学科：助教授)、同病態検査医学講座(保健学科：教授)に所属して勤務。社会貢献としては、日常診療の他、血液学的疾患に特化した診断を行っている。研究テーマは「血色素異常症 (特にサラセミア)」で、全国および海外からの症例の分析・研究を行っている。海外との交流は、米国、韓国、中国、インドネシア、インド、UAE、サウジアラビア、フランスなどで、当地でのワークショップや講演などを、院生も含めたグループでこなしている。限られた分野ではあるが、臨床医学を支えるために、自治医大、川崎医大、東京女子医大、山口大からなる4大学で「日本溶血性疾患センター」(福山臨床kk主導の一般財団法人)設立を企画し、臨床医および社会に貢献すべく活動中である。



## 熟議キャラバン in やまぐち

～学外に広がる知の広場～

富平 美波

Tomihira, Miwa

(山口大学 エクステンションセンター センター長)

この度は、山口市平川地区、阿武町、周防大島町浮島において、「熟議」を開催させていただき、ご在住の皆様にはたいへんお世話になり、心より感謝申し上げます。私どもといたしましては、住民の皆様の日々の交流の中に、当日は大学もちょっと入れていただいたのだと感じております。「熟議」は、今後大学が、生涯学習社会における知の＝知識と知恵とのネットワークの拠点のひとつとなることを目的に実施されています。

山口大学では、2012年3月17日に大学を会場とした「熟議 in やまぐち」を開催しました。この時は、山口県という地域社会が抱えている課題とその解決の方法、それに対して大学はどんなことができるかに関して、10のテーマを設定し、公務員・企業や地域の方々・教員や学生がグループで熟議をいたしました。山口大学は、教育学部を中心に学校の先生を養成してもおりますし、附属病院もありますし、科学技術の研究開発もしております。それ以外に、社会学、社会心理学、犯罪心理学、経済学、民俗学、防災研究などの専門家がおりまして、日頃からお役所の政策作りのお手伝いなどもしているのです。3月の熟議でもそのあたりの特徴を反映したテーマ設定となりました。

山口大学は地域にある大学として、教育・研究・社会貢献を3本の柱としてこれからも励んでいく覚悟です。その社会貢献の面においては、公開講

座や授業の出前といった教育事業だけでなく、上記のスタッフをいかして、地域づくりに役立つ活動もできるのではないかと、そのありかたを模索しているところです。今回もその試みのひとつとして、日頃からお付き合いをさせていただいている皆様のご協力によって実現したものでありまして、私どもは、例えば山口のどこかの地域、或いは全体が将来の視野に入っている解決すべき課題があるとして、別の地域にそれを解決に導くようなお知恵、或いはモデルといったものがあるとしたら、大学の教職員、お役所の方々が伝達役となつて、その課題と知恵をお互いにつなぐ、そういう鎖の輪というか、むしろよく動く歯車のような役割が果たせないかと考えている次第です。熟議を開催させていただいた各地域の現状は、おそらく、県内の他の地域が今まさに悩んでいることに対し、驚くような解決のカギをひそめている可能性があると思います。皆様とご一緒に熟議することで、その中から、勉強になる点をできるだけ吸収させていただきたいと願っております。その上で、私どもの企画がいささかでも、各地域の課題の発見と、解決の道筋をつけるお役に立てたのであれば、この上もない幸いです。今回の熟議キャラバン in やまぐちが、ご参加の皆様にとって実り多かつ楽しいものであったことを祈ります。



富平 美波 (とみひら みわ)

山口大学エクステンションセンター センター長・人文学部 教授

出身：東京都

専門：中国の音韻学の歴史

2011年度よりエクステンションセンター長(4代目)。2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」では、実行委員会副委員長として中核的な役割を担った。グループ⑨の「農村の再生」に参加。2012年度は「熟議キャラバン in やまぐち」への展開を主導してきた。



## 地域と大学が織りなす風土

～熟議と実践のスパイラル in やまぐち～

辰己 佳寿子

Tatsumi, Kazuko

(山口大学 エクステンションセンター 准教授)

辻 多聞

Tsuji, Tamon

(山口大学 学生支援センター 講師)

### 1. 「氣」を絶やさないために…

2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」では、山口大学の地域連携のコンセプトとなるべき、一文字が掲げられた。「氣」という文字である。「氣」は不可視的なものであるが、あの場にいた誰もが、そこに「氣」があったことを実感したはずである。ある空間にさまざまな人々の氣が交差する、そして、時間軸と共に「氣」が渦になる場合もあるだろうし、一時的なものとして消え去ってしまうこともあるだろう。私たちは、ここで生まれた「氣」をどうすべきなのか…。山口大学の地域連携のスタンスが、ひとつひとつの実を、大事に大事に信念を込めてはぐくむことであるならば、この「氣」をはぐくんでいくことこそが、次なる使命なのではないか。「熟議 in やまぐち」を終えてホッとする間もなく、次に進むべき道を模索するための熟議が始まっていた。

「熟議 in やまぐち」には、平川コミュニティ推進協議会から米倉一夫会長と加藤美和子さんが参加しており、周防大島町からは中尾豊樹さんが参加していた。サッカーの試合に準えるならば、彼らにとって、山口大学の吉田キャンパス(山口市)での熟議は、「アウェイ (away)」・相手の本拠地の試合として位置づけられ、かゆいところに手が届きそうで届かない、よそいきの顔での議論であったと思われる。「ホーム (home)」・自身の本拠地で熟議を開催すれば、より地域の課題に焦点を絞った、素顔で本音ベースの熟議ができるのではないかと、という共通認識が互いに生まれていた。

平川地区においては、これまでの連携活動の延

長線上に、熟議キャラバンを位置づけることができた。阿武町においては、「熟議 in やまぐち」には参加した人はいなかったが、平川地区同様、これまでの連携活動を踏まえて、地域がうまく熟議キャラバンを組み込んでくれた。周防大島町においては、「熟議 in やまぐち」で浮上した担い手問題を中尾さんが強く受け止め、中尾さんから「Uターンがあたり前の現象で起こっている浮島があり、その現象を分析すればこの問題解決の糸口になるのではないか」という提案があり、浮島での開催がとんとん拍子に進んでいった。

### 2. それぞれの地域の特性

これらの3つの地域はそれぞれの地域の特性をもっている。詳しい地域の特性は、各章の説明に委ねるとして、ここでは簡単に概要を説明しておくこととする。

山口大学は、宇部市の小串キャンパス(医学部)、常盤キャンパス(工学部)、山口市吉田キャンパス(事務局、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、農学部、共同獣医学部)の3つのキャンパスに分かれている。山口市平川地区は、山口大学の吉田キャンパスが移転した地域である。まさに、多くの学生、教職員が当事者として暮らしている地域であり、混住化が進んでいる地域である。阿武町は農山漁村を含む町であるが、特に剣道部がお世話になった宇生賀地域は農村地域といえる。周防大島町の浮島は漁村地域である。

表1のように、平川地区は山口市の平均に比べると高齢化率は低い、世帯あたりの人数が低い。



図1. 3地域の位置

表1. 3地域の人口、世帯数、高齢化率

	山口市 (平成25年2月28日現在)	平川地区 (平成25年2月28日現在)	阿武町 (平成25年2月28日現在)	宇生賀 中央自治会 (平成25年2月28日現在)	周防大島町 (平成25年3月1日現在)	浮島 (平成25年3月1日現在)
人口	195,465	15,939	3,756	142	18,854	230
世帯数	85,504	7,619	1,696	59	10,139	100
世帯あたり 人数 (人口/世帯数)	2.29	2.09	2.21	2.41	1.86	2.30
高齢化率	25.08%	16.87%	44.22%	47.89%	48.21%	42.17%

阿武町全体で見ると高齢化率は44.22%と高い方ではあるが、さらに宇生賀中央自治会レベルに絞り込むと高齢化率（47.89%）が高くなっている。周防大島は高齢化率の高い島として有名であり、全体の高齢化率が48.21%であり、世帯あたりの人数は2人を切っている。一方、浮島となると様子が異なり、高齢化率は42.17%なのである。

平川地区（混住地域）、宇生賀地域（農村地域）、浮島（漁村地域）においては、過疎化、少子高齢化、担い手問題等の共通する課題とそれぞれの地域の特性によって異なる課題が存在する。これらの条件を加味して熟議キャラバンは進められた。

### 3. すでに熟議は始まっていた

明確な違いがみられる3地域で熟議キャラバンを開催したが、地域選択においては、統計的な条件から選択したというよりも、人と人とのつながりのなかから企画が進んだというのが正直なところである。

熟議とは、『多くの当事者（保護者、教員、地域

住民等）が集まって、課題について学習・熟慮し、議論をすることにより、互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、解決策が洗練され、施策が決定されたり、個々人が納得して自分の役割を果たすようになる』ことを意味する（文部科学省）。文部科学省は、2010年6月より全国150ヶ所以上で熟議の取り組みを行ってきた。

「熟議」という言葉がした登場は、従来のワークショップ等とは異なる点が強調されていると考えられるが、山口県には、熟議のような、実りあるワークショップを行い、地域の取り組みに反映してきた地域がある。

たとえば、山口大学大学院理工学研究科の瀧本浩一准教授が平川地区をはじめ、各地で実施している防災ワークショップはまさに熟議であるといえる（p19-22 参照）。山口県の農林事務所が中心になって取り組んできた「集落点検」も類似的な手法である。集落点検とは、住民自らが集落を歩いて、集落の現況を把握し、集落をそのまま放置しておいたら10年後にはどうなるかという予測を、各世帯の聞き取りをもとに作成し、そのうえで集落が10年後どうありたいかという構想を立て実行に起こす。まさに、現代版の「熟議」であり、みんなと議論をして問題を発見し、その解決に向けて取り組んでいく過程を重視している。

### 4. 熟議と実践のスパイラル

当然のことながら、熟議で、個々の役割や解決策が明確になっても、机上の空論では意味がない。現場に出て、何ができるかを考え、誰かと行動を起こす「実践」が必要となる。もちろん、「熟議」も「実践」も一過性のものでは何の効果もない。熟議キャラバンを通して、我々が発見したことは、地域住民が主体となって、熟議と実践のスパイラルをつくりだしていくこと、このスパイラルに学生や教職員がかかわっていく構図が実りある連携をもたらすのではないかということである。

阿武町の宇生賀地域の例をあげてみよう（図2参照）。宇生賀地域は、かつては湿田であり、農業の条件がよいとはいえなかった。そこで、1990年に「明日の宇生賀を考える会」を発足し、地域の農業についての議論が始まった。1991年に圃場整備事業の話があり、300回以上の話し合いの末、圃場整備を実施した。その後、受け手や各償還金、農家の高齢化の問題等を組織的に対応しようと、

1996年、「宇生賀農事生産組合」を設立した。法人化に向けて、各戸の水権利と所有機械の放棄の問題について、また、数百回の話し合いが行われ、1997年に「うもれ木の郷」という農事組合法人を設立した。法人設立により農作業の省力化・効率化がすすみ、女性たちにも時間的、肉体的、精神的なゆとりがみられるようになったため、同年、「四つ葉サークル」という女性組織を結成。四つ葉サークルは1999年～2001年に集落点検を実施し、地域資源を示した「お宝マップ」と地域全体の将来構想「夢マップ」を作成し、現在では、その夢のほとんどが達成されている。2010年3月、「農業を守るだけでは、農村は守れない」とのことから、4つの集落がひとつとなる宇生賀中央自治会が発足した。2010年10月には山口大学の公開講座「生活視点から地域づくりを考える」にてワークショップを行った。2012年6月には、山口大学剣道部との草引き交流事業という実践が行われ、2013年3月の熟議キャラバンに展開していったのである。まさに宇生賀地域は、国や県、町、JAや民間団体、大学などの外部の力を適材適所で活用しながら、熟議と実践を繰り返してきたむらづくりの経験をもっている。

### 5. 地域と大学が織りなす風土

地元学には、「土の人」「風の人」という表現がある。地域で暮らしている当事者が「土の人」であるのに対して、地域の外から働きかける人が「風の人」となる。たとえば、行政関係者、NPO、ボランティア、観光客、新規定住者、大学教職員・学生などがあげられる。単純にいうと、風の人と土の人が交わることで風土が生まれるとよく言われるが、厳密にいうと、意識的か否かは別として、「土の人」が風を取り入れることによって風土が生まれるのではないだろうか。風は、さまざまだから拒否をされる場合もある。ただ通り抜けるだけの風かもしれない。気付かないくらいの静かな風かもしれない。土を掘り起こすような風かもしれない。土を流してしまう風雨かもしれない。

大学は、まさに「風の人」であるが、どんな風になればよいだろうか。そこには、マニュアルはない。なぜなら、地域にはそれぞれの特性があり、土の人々は多様であるからである。よって、土の人々の匂いをかぎ分けることが必要であろう。土の人々が熟議と実践の繰り返しのスパイラルを通

して織りなしてきた風土づくりのプロセスに、少し参入させていただいて、新しい風を吹かせることができればと思う。風の人といっても、ただの風ではなく、「土の匂いのわかる風」になりたいものだ。そして、「土の匂いをまた別のところに運ぶ風」となって、地域を他地域にアピールできるところまでいけたらよいと思う。土の人は、知の広場の主となり、風の方は常に実りある知を循環させていく役割を担うことができるはずである。

今は、山口大学の地域連携が試行錯誤の段階であるため、風は一定していないし、風土をつくりだすだけの貢献はできていないかもしれない。今後、継続的に、熟議をはじめとし、研究や教育を背景としたさまざまな交流や連携を通じた知の広場の創造と実りある知の循環を経て、地域と大学が織りなす風土が生まれてくる可能性はある。風土は、人間が主体的につくりだす側面と、出会い、交流、融和の過程で、つくりだされる側面とがあると思う。剣道部の学生が「即効的な等価交換として地域に give and take ができていない」といったときに、「そんなことは期待しておらん(笑)。また来てね。待つとるよ。」とさらっと言った土の人。彼らの風土が垣間見えた一瞬であった。

それぞれがもっている「氣」をつなぎ続けてかたちにしたのが、「熟議キャラバン 2012 in やまぐち」である。地域の風土によって、その形態も、その雰囲気も、その風景も、全く異なるが、「氣」が交差している知の広場とは、固定された枠組みのないものであり、アメイバーみたいなものではないかとさえ思える。「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」(『わたしと小鳥と鈴と』)といった金子みすずの詩を思い出しながら、みえないものの存在価値を考えながら、熟議と実践を繰り返していきたいものである。

### 参考文献

- 金子みすず、2011、『金子みすず名詩集』彩図社。  
 辰己佳寿子・辻多聞、2012、『熟議 in やまぐち 報告書』山口大学エクステンションセンター。  
 辻多聞・辰己佳寿子、2013、『知恩 うもれ木の郷と山口大学剣道部の交流活動報告書』山口大学エクステンションセンター  
 西川芳昭・木全洋一郎・辰己佳寿子編、2012、『国境をこえた地域づくり』新評論。  
 吉本哲郎、2008、『地元学をはじめよう』岩波書店。

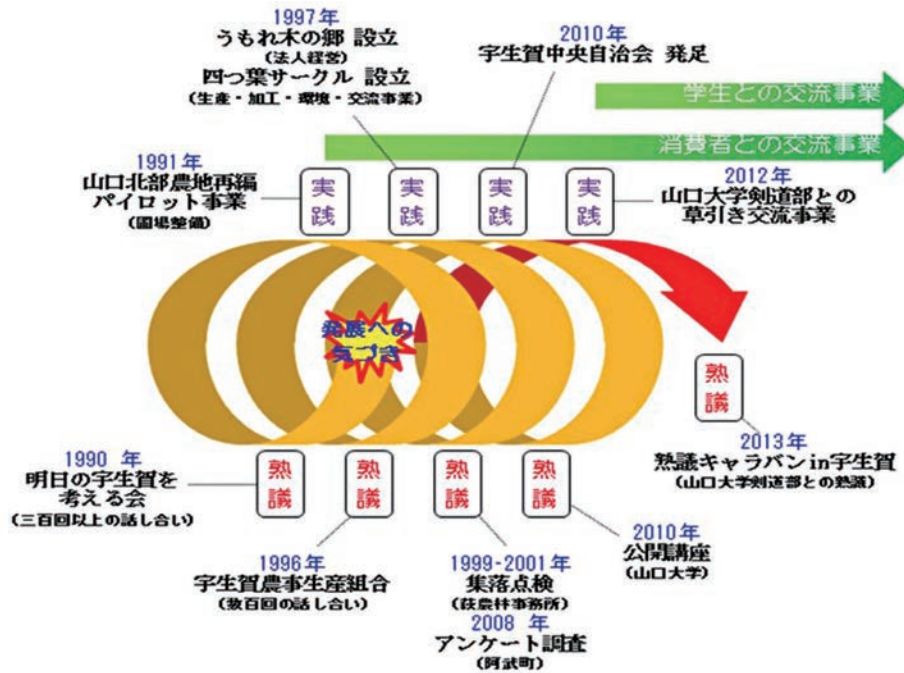


図2. 熟議と実践のスパイラル (阿武町・宇生賀地域を事例に)



辰己 佳寿子 (たつみ かずこ)

山口大学エクステンションセンター 准教授

出身： 広島県広島市

2003年に山口大学赴任。10年間、エクステンションセンターとともに歩む。やまぐちの方々と出会わなかったら今の自分はないというほど、地域にお世話になっている。お世話になりっぱなしで、いつか地域にお返しがしたいと思っ  
ていても、いつもいただいてばかりでジレンマに陥ることもあり、やまぐちの  
懐の深さを痛感する今日この頃である。2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」  
では事業コーディネーターを担当。



辻 多聞 (つじ たもん)

山口大学教育機構学生支援センター 講師、山口大学剣道部 部長、

出身： 京都府京都市出身、1971年5月生まれ

学歴： 鳥取大学大学院連合農学研究科にて博士（農学）取得

家族： 独身落武者（貴族というほど収入もなく）

座右の銘は「ハートはトゥウエンティ（気持ちは20代）」です。小学校の低学  
年、意味もなく運動場で奇声をあげて友達と走りまわり、それがただひたすら  
に楽しかった、そんな気持ちを忘れずにいたいと思っています。ん？これだと  
ティーンエイジャー（10代）より下かも？（笑）。

2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」では、(B)育てる（教育）のオーガニ  
ザイザーを担当しただけでなく、舞台裏で大活躍。2012年度の「熟議キャラバ  
ン」では影のプロデューサーとして頭角を現し、一部からはドクター YJ（※）  
と呼ばれている。（※）山大熟議（Yamadai Jukugi）の略らしい。

## 平川地区からのご挨拶

～夢と希望のある地域づくりにむけて～

米倉 一夫

Yonekura, Kazuo

(平川コミュニティ推進協議会 会長・平川自治連合会 会長)

皆さん、こんにちは。山口市平川地区の振興発展のために、常日頃からご支援ご協力いただきまして、誠にありがとうございます。

現在、私たちを取り巻く社会環境が、少子・高齢化の進展や人口減少社会の到来、経済環境の変化、社会の成熟化に伴う意識の変化と生活様式の多様化など様々な面で変化を続けています。山口市でも多くの社会的な課題や地域課題に直面し、またわれわれのニーズ（要望）も多様化しています。そうした中で、私たちと行政、または市民である私たち同士がパートナーとして、公共的な課題の解決に向けて共に考え、協力し合い、住み良い豊かな地域社会をつくるために、“協働によるまちづくり”として、市内 21 の地域で、それぞれの地域の特色を生かしながら、より良い地域づくりに取り組んでいます。平川コミュニティ推進協議会は、平川自治連合会・平川地区社会福祉協議会・平川地域交流センター運営協議会等、地区内 23 の団体と学識経験者を構成員として、平成 22 年 6 月に発足し、第 1 次 5 ヶ年計画として、30 数項目の事業に取り組んでいます。特に、その中でも、いま最重点課題として、取り組んでいるのが、次のような事業であります。

まず、第一に次期第 2 次 5 ヶ年計画の策定にあたって、平川地区の住民が「ゆめ」と「希望」を持って、誰もが安全で安心して暮らせる「まち」を目指して、平川地区の特色や課題を洗い出し、平川地区の将来像を展望した、新たな目標に向かっていくための指針であります「平川のまちづくりビジョン」の作成のため、地域住民と共に山口大学の教授や学生さん達のご協力とご指導のもとに進めています。

次に、自主防災組織の取り組みです、近年、全国各地で地震や豪雨・風水害等、大きな災害が頻

発しています。災害が発生したときに、地域に住んでいる私たち一人ひとりが、対応することになります。そのため、万が一の時に備えて、平川地区全域を対象とした、自主防災組織の確立に取り組んでいます。この、自主防災組織の取り組みも、山口大学のお知恵をお借りして、年度内か 25 年度早々には、出来上がる見通しができました。今後は、非常時に対応できるよう、この組織の維持管理と防災訓練を積み重ね、地区民の生命、財産を守っていきたいと思います。

最後に、平川地区史の編纂の取り組みですが、山口市内のほとんどの地区には、立派な「地区史」が完成しています。しかし、この平川地区には、平川公民館創立 25 周年記念出版として、昭和 47 年初版の著者「石川卓美」、発行者「山口市平川公民館」の「平川文化散歩」がありますが、本格的な「地区史」が存在しません。昔の平川を知る人々も、亡くなられたり、高齢化が進んできたりで、数年前から構想はありましたが、今この事業に取り組まなければ、先がありません。そこで先日「平川地区史」編纂に向けての会合を持ち、近いうちに、「平川地区史編集委員会」の立ち上げが出来ることになりました。この事業も専門的な知識を必要としますが、平川地区内には、地区の歴史を研究する「平川史談会」や個人的に資料を集めたり、専門分野の研究をしたりしている方が数人おられますので、これらの皆さん方のご協力をいただき、25 年度以降この事業を進めていきます。

以上、平川地区にはまだまだ、沢山の課題がありますが、より良い平川を目指し、平川地域が夢と希望のある地域づくりに向けて地区民一体となって、全力で取り組んでいます。

今後とも、関係者の皆様のご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。



米倉 一夫 (よねくら かずお)

平川コミュニティ推進協議会 会長・平川自治連合会 会長

出身： 車えび養殖発祥の地、山口市秋穂、1940年5月生まれ

今年、山口市きらら浜で、第16回日本ジャンボリーが開催されます。私も30年近く隊長として、スカウトの指導にあたってきましたが、いまは団副委員長として山口第3団の運営のお手伝いをしています。加齢と共に、体力・思考力等身体機能の衰えをつくづく感じるこの頃です。



平川中学校から見た平川



ひととひとが  
らくらくと  
かよう心の  
わがふるさと平川

平川最大のイベント「平川まつり」

## 平川地区の紹介

～ひとと・ひとが・らくらくと・かよう心の・わがふるさと平川～

栗畑 豊  
Awahata, Yutaka

(平川コミュニティ推進協議会 事務局長)

### 1. 平川地区の概要

わが町平川は、山口盆地を貫流する樫野川の東側に位置し、樫野川を挟んだ反対側には、山口の中心街が展開しています。平川地区は、その昔樫野川が豪雨のたびに氾濫していたことや、対岸との交流が不便であったことから、陸の孤島といわれていたようです。しかしながら、昭和 41 年の山口大学統合移転を転機として、学都山口の一中心として、現在では 2 万人弱の人口を抱える町に発展してきました。

- ・ 面積： 19,610m<sup>2</sup> (市総数の 2%程度)
- ・ 人口： 19,317 人 (市総数の 10%程度、住民登録数 15,983 人)

平川地区の特徴的なところを一部紹介します。

### 2. 県下草分けの公民館

戦後の復興を念じて、昭和 21 年 4 月に平川青年団が再結成されましたが、団活動の拠点となる適当な集会所がありませんでした。そこで、青年



平成 4 年にリニューアルした交流センター

団所有山林の木材を売り払い、その経費で公民館を建設しようという運びとなり、青年団の食糧増産のための共同作業場という名目で認可を取り付け、昭和 22 年 5 月に県下草分けの平川公民館が誕生しました。今は、平川地域交流センターと名を変え、地域住民の交流の場として多くの方に利用されています。

### 3. 学園都市平川

平川地区は、昭和 41 年の山口大学移転時点においては、中学校と高等学校が設置されていませんでしたが、昭和 62 年に西京高等学校が新設され、平成 2 年には平川中学校が新設されたことにより、平川地区は、幼稚園から大学まで揃った学園都市として飛躍を遂げています。



県下最大のマンモス校「平川小学校」

### 4. 豊作の神、高倉荒神

平川地区で、「高倉荒神祭」という有名なお祭りがあります。毎年 2 月 28 日に行われるこのお祭りは、その年の豊作を願う農業の神様としてとても有名で、平川地区だけでなく、山口県内外から



露天や植木市でにぎわう神社前の参道

も多くの人々がお参りします。

このお祭りは、「おためし」という特殊神事に特色があります。「おためし」とは、高倉山 8 合目付近に水が湧き出るところがあり、この水を神様の水として、毎年節分の日に水の量を測り、その年の農業用水の状況を占い、お祭りのときに人々に知らせるものです。

参道には、植木や花の種や苗、農業関係の道具等や、たい焼き・たこ焼き等数多くの出店が並び、まさに、農業の盛んな平川を代表するお祭り行事といえます。

## 5. 天然記念物、平川の大杉

山口大学野球場側の南方に位置する、荒神山の山裾に、こんもりとした杉の森のようなものが見



樹幹が奇形な「平川の大杉」

受けられます。これが「平川の大杉」です。

この大杉は、樹齢約 600 年以上の古木で、根元の周りが 10m、高さが 35m もあり、遠くから見ると、この杉がこんもりとした森のように見えます。この木は、長い間、風雨や雪に耐え忍び生き抜いてきたため、幹が変形して何本かの幹が互いにくっつき、1 本の木のようになっています。

昭和 3 年に天然記念物に指定されたこの大杉は、今は平清水八幡宮の所有となり、平川の名物として大切に保存されています。

## 6. 伝説の姫山

山口大学の後方に優美にそびえる山があり、この山を「姫山」と呼んでいます。呼び名も優美なこの山には、語り継がれてきたこんな話があります。『その昔、山口の城下に、世にも美しい娘がいました。その娘をお殿様が見初め、お城に連れてくるよう家来に命じましたが、娘はお殿様の言うことを聞きませんでした。そこで怒ったお殿様は、娘を蛇が待ち受けている井戸の中に吊り下げるよう家来に命じました。娘は、あまりの悲しさに、「私は、美しく生まれたばかりに、こんなつらい目に合いました。後の世の娘がこんな苦しい目に合わないように、この山の上から見渡せる限りのところには、これから先ずっと美人が生まれませんように。」と言って悲しみもだえ死んだという。』さてこの伝説を信じるか、信じないかは…、あなた次第です。



榎野川から望む伝説の「姫山」





悲劇の青年農兵、藤山佐熊が眠る墓

### 7. 鎧ガ峠の隊中様

次の話は、実際にあった話です。平川から鑄銭司に抜ける鎧ガ峠の8合目あたりの雑木林の中に、人々に信仰されているお墓があります。このお墓は、明治3年に、ここで悲劇的な死を遂げた、農民出身の「藤山佐熊（ふじやまさくま）」という若い兵士のお墓です。佐熊は、明治政府に不満を持つ反乱軍に加わり、鎧ガ峠で政府軍により撃殺されました。佐熊は鎧ガ峠の戦いで、その付近に留まっていた時に、村人の病気を治したりしていました。村人は、親切な佐熊を尊敬し、戦いで敗れた佐熊を鎧ガ峠に丁寧に葬り、お墓をたて供養したということです。人々は、いつしかそのお墓を「隊中様」と呼ぶようになり、そのお墓に参ると病気が治り、願い事が叶うという噂が広まり、遠

くからもお参りする人が多くなりました。

「隊中様」は、過去にNHK総合テレビ「そのとき歴史は動いた」で取り上げられたことがあり、25年4月には、NHKBSプレミアムで、全景が全国放送されます。

### 8. おわりに

自然豊かな平川の地に、県内で最大の児童数を抱える山口市立平川小学校があります。この平川小学校の卒業生に、ロンドン五輪で大活躍した、卓球の石川佳純選手がいます。ロンドン五輪での石川選手への応援では、平川地区全体が大いに盛り上がり、地域の連帯感を感じたところでした。4年後のリオ五輪では、石川姉妹によるダブルス戦の応援で再び盛り上がりたところでした。



平川小学校でのロンドン五輪の凱旋報告会にて



### 栗畑 豊（あわはた ゆたか）

平川コミュニティ推進協議会 事務局長

出身：旧美祢郡美東町出身、平川在住

平川に移り住み早35年。平川の住人として、様々な人とお付き合いさせていただき感謝です。3人の子供の内2人が平川に居を構え、孫も平川小学校に入学する予定？楽しみです。

## 平川地区と山口大学との交流

～ひとつひとつの実を大事に大事に信念を込めて育むこと～

藪 達己

Yabu, Tatsumi

(山口大学 地域連携室 室長)

### 1. 山口大学の社会連携・貢献

山口大学は、地域の基幹総合大学として、さらなる教育・研究の発展・充実とともに、地域に根ざした社会連携を進めるため、「教育」、「研究」、「社会貢献」の3つの基本的な目標を掲げ、その目標の実現に向けて進んでいる。中期目標の中の社会貢献活動として、「地域社会との連携・協力を推進し、地域の知の拠点として学術成果情報の発信と支援を行う」こととし、保有資源を還元・活用して、公開講座等の生涯学習活動、産学公連携活動、施設の開放、国際交流事業、学生によるボランティア活動等に取り組んでいる。

山口大学は、宇部市の小串キャンパス(医学部)、常盤キャンパス(工学部)と山口市吉田キャンパス(事務局、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、農学部、共同獣医学部)の3つのキャンパスに分かれており、なかでも、本学の中核的組織が立地している山口市の「平川地区」との連携は、地元との共生という視点から、より良好な相互信頼・協力関係を確立・維持することが重要である。このため、本学と平川地区の関係者が集い、貢献・連携の在り方について意見交換を行う懇談会や交流事業を実施してきた。

本稿では、これらの取り組みを紹介していきたいと思うが、その前に、平川地区への移転の経緯に触れておきたい。

### 2. 平川地区への移転

移転の発端は、昭和27年、下関市長府にあった山口大学農学部の教授会で移転の意向が打ち出されたことであった。移転の話が浮上した原因は、農学科と獣医学科が1キロ離れていたことによる不自由さであった。翌28年には、移転調査委員

会が設置され、防府、山口、宇部の各市が候補として挙げられた。第一候補となったのが、長閑で雲雀が囀る純農村地帯の山口地区の平川であった。地元平川の農業委員会や平川振興会が誘致を積極的に行ってくれたこともあり、昭和37年6月に移転先が平川に決定した。

山口市議会では、学都山口建設を目標にし農学部山口誘致運動を展開した。昭和38年5月に議会は山口大学農学部誘致対策特別委員会を設置し、同年8月に文部省の了解を得ている。昭和39年4月、平川地区の山口大学農学部建設協力委員長が、地区住民の促進同意書を添え誘致の要請を行った。この段階で、文部省から農学部移転候補地調査の際、平川地区に本学を統合移転してはどうかとの意見が出され、農学部移転計画は、一気に、山口市街地に立地していた山口大学の本部、文理、教育、経済各部が平川地区に統合移転する方向となった。昭和39年9月9日の評議会においてこの趣旨が承認され、平川地区への統合移転が決定した。

昭和40年1月16日、山口市に山口大学統合移転対策事務局が設置された。2月19日には、市議会が、山口統合移転対策特別委員会を設置し、山口大学統合移転に賛成の決定をした。3月には移転事業予算を管轄する(財)開発公社を設置し、土地等を立替取得することとなった。4月から、同公社が土地所有者150余名に対して用地買収を開始したが、買収価格が折り合わないこともあったという。担当者の努力の末、9月には統合移転用地第一次買収が完了し、11月13日、山口大学学長は、平川地区移転計画に関する地区民招待懇談会を平川小学校で開催した。

昭和41年1月17日、農学部建設用地の地鎮祭

があり、山口大学移転工事が開始された。4月30日に総合移転買収が完了し、その範囲は、家屋、田畑、山林等を含め総面積70万平方メートルであった。用地買収達成にかかる費用は、4億4千万円で、立ち退き地域として馬木坂本で27戸、公会堂1棟で、その多くが平川地区に住居を求めた。これを機会に昭和41年1月1日山口市大字平井を大字吉田に変更し、平安朝以来の伝統を持つ地名となった。(以上、『ひらかわだより』第494号平成24年11月1日発行「ふるさと平川59号(文：平川史談会 荒瀬安秀氏、編集：同 柳井貞夫氏)」より抜粋。一部加筆)



統合移転準備中の吉田キャンパス

### 3. 平川地区との懇話会と懇談会

以上の経緯から、山口大学は平川地区に移転して、40数年になる。しかしながら、移転決定当時、住民と約束した施設貸与等にかかわる不満、学生の秩序・マナーについてのクレームなど、吉田キャンパスが立地している「いわゆる地元」である平川地区との連携は必ずしも十分とは言い難い状況であった。そこで、丸本卓哉現学長が副学長(教育国際担当副学長)であった平成16年に、自ら平川公民館に向き3回の個別懇話会を開いた。

<第1回懇話会>

日時：平成16年7月20日19時～21時

場所：平川公民館

出席者(大学側)：丸本副学長、岡村企画課長、土田企画課主任、学生2名(体育会・文化会の会長)

<第2回懇話会>

日時：平成16年9月27日19:20分～20:40

場所：平川公民館

出席者(大学側)：丸本副学長、岡村企画課長、土田企画課主任、学生2名(体育会・文化会の会長)

<第3回懇話会>

日時：平成16年12月16日19時～20時半

場所：平川公民館

出席者(大学側)：岡村企画課長、岡崎国際企画課長、石橋留学生課長、郡司学生支援課補佐、石黒学生支援課専門職員、土田企画課主任

これらの懇話会では、大学行事と地域の行事を擦り合わせる事、学生や留学生と平川地域との交流・連携について検討すること、継続的な会合を行うための「場作り」などが協議された。さらに、平川地区との連携活動は、「山口市との協議会」へも議題提出しており、単なる「ご近所づきあい」ではなく、大学が組織として取り組むべき重要な課題であることが明確となった。その結果、年に一度、懇話会を開くことが決定された。

以上の経緯を辿り、平川地区と山口大学の関係者が集い、貢献・連携の在り方について意見交換を行うための「平川地区と山口大学の懇談会」を平成20年から継続的に開催している。なお、山口大学は、平成20年度に学長の直轄組織として「総合企画部」を新設(現学長戦略部)し、その支援組織として「総合企画支援室」を傘下に置き、再雇用職員を活用して、広報、地域連携事業の一部を所掌した。平成21年度には、「地域連携・環境安全室」(担当、本田正春、金子孝志、小室和輝)に名称変更し、特に、平川地域との連携活動を推進する体制を整え、2年間の地道な活動を展開したが、事務組織再編により、一旦、事務局社会連携係にその業務を託すこととなった。平成24年度には、これまで築いてきた絆と基盤を活用し、持続可能な地域連携事業へ発展させるために、「地域連携室」(担当、藪達己・小室和輝)として復活した。



平川地区と山口大学との懇談会(平成24年7月)

<第1回懇談会>

日時：平成20年5月20日18時～19時

場所：山口大学事務局 特別小会議室

出席者：17名（平川9名、山口大学8名）

主な協議事項

- (1)留学生の支援に関する大学側の支援、協力の要請
- (2)「平川地区クリーン作戦」への参加要請
- (3)平川地域の学生アパート等の有効活用方策
- (4)大学のグラウンド等の施設使用の柔軟化
- (5)留学生対象の地域の安全・安心面の対策

<第2回懇談会>

日時：平成21年7月22日18時～19時20分

場所：山口大学事務局 特別小会議室

出席者：29名（平川19名、山口大学10名）

主な協議事項；

- (1)知的財産の提供（まちづくり、防災の助言や生涯学習講座開設等）
- (2)地域と山口大学の窓口の一本化
- (3)自転車のマナーアップ
- (4)グラウンド等の大学施設利用
- (5)高齢者に対する災害時の支援活動
- (6)平川の行事への参加
- (7)公共交通のアクセスの問題
- (8)留学生の生活支援等

<第3回懇談会>

日時：平成22年7月6日（火）18時～19時

場所：山口大学事務局特別大会議室

出席者：32名（平川19名、山口大学13名）

主な協議事項；

- (1)交通安全への配慮
- (2)平川ウォーキングマップづくりへの協力
- (3)地元のアパート利用の学生への斡旋

<第4回懇談会>

日時：平成23年7月7日18時～19時

場所：山口大学事務局特別大会議室

出席者 32名（平川20名、山口大学12名）

主な協議事項；

- (1)平川地区の防災を考える研修会への協賛・参加（P19～22参照）
- (2)平川地区が取り組む山口国体県民運動「花いっぱい運動」への参加
- (3)大学の環境整備事業紹介・交流会への参加
- (4)地域の「まちづくりビジョン」プロジェクトへの参画

(5)地域と山大とのふれあい講座実施

<第5回懇談会>

日時：平成24年7月10日 18時～19時

場所：山口大学事務局特別大会議室

出席者 29名（平川16名、山口大学13名）

主な協議事項；

- (1)大学施設等の開放（学内施設探訪、里山探検等）
- (2)地域の小学校の校外学習への協力
- (3)「平川自主防災計画」、「まちづくりビジョン」、「地域と山大とのふれあい講座」への協力
- (4)「国際交流ひらかわの風の会」等との留学生を通じた国際協力・交流の促進
- (5)大学と地域の情報受入・発信の窓口一元化
- (6)地域の情報紙への大学情報の投稿・掲載

#### 4. 身近な交流

上記のように回を重ねる毎に地域からの声もクレーム的なものから発展的なものへと変化しており、少しずつではあるが、本来の連携事業の体をなしてきたことがうかがえる。これは、懇談会終了後に必ず開催される学長も出席するごつくばらんな懇親会、あるいは、学長主催の春の桜見会、夏の手鑑賞会など大学のトップ自らが地域に溶け込みFace to Faceの交流があることである。また、平川地区行事への積極的な参加、山口大学情報の平川地区民への見える化などによる効果の現れと相互の信頼関係の形成の結果でもあると信じている。



4月には「桜見会」7月には「手鑑賞会」…



「平川地区ふれあいクリーン作戦」  
(山口大学の環境整備作業の一環としての九田川の清掃)

### 5. 交流から熟議へ

文部科学省が「熟議」という取り組みを行う前から、山口大学大学院理工学研究科の瀧本浩一准教授（「熟議 in やまぐち」ではグループ⑧「安心・安全」を担当）は、「安心・安全」をテーマに防災ワークショップ、いわゆる「熟議」を開催してきた。平川地区では、平成 22 年に 3 回に分けてこれらを実施している。

また、平成 24 年 3 月 17 日には、文部科学省との共催事業で「熟議 in やまぐち」が吉田キャンパスで開催された。このときのテーマは「発見し、

はぐくみ、かたちにする知の広場～実りある知の循環をつくり出すために～」であり、本学の活動の三本柱である「究める(研究)」「育てる(教育)」「社会連携(つながる)」の視点から、地域の課題解決への糸口を探るために、一般参加者および学生や教職員など約 160 人が集まった。

午後からのグループ熟議のキーワードは、①最先端研究、②地域連携型研究、③文学・人間、④基礎学力、⑤コミュニティスクール、⑥就職、⑦健康、⑧安心・安全、⑨農村の再生、⑩まちづくりであった。

平川地区からは、平川コミュニティ推進協議会の米倉一夫会長と加藤美和子さんが参加した。米倉会長は、グループ⑧の「安心・安全」に参加し、加藤さんは、グループ⑩の「まちづくり」に学外ファシリテーターとして参加した。

これがきっかけとなり、平成 24 年度、グループ⑩の学内ファシリテーターであった経済学部の鍋山祥子教授とゼミ生を中心に、平川地区での「まちあるき」と「熟議キャラバン(まちづくり)」が展開されることとなる。詳細は、次章以降を参照されたい。

やぐらの上で挨拶をする丸本学長





### 藪 達己 (やぶ たつみ)

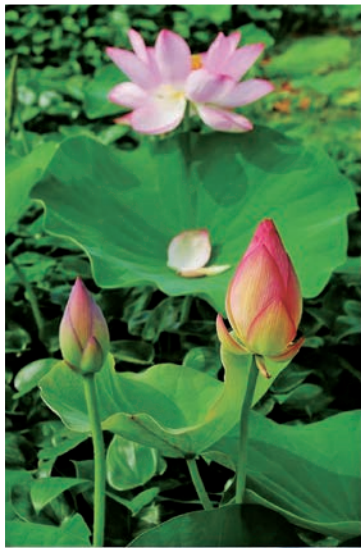
山口大学地域連携室 室長

出身：山口県山口市（旧佐波郡徳地町）昭和26年10月生まれ

地域連携活動の業務に関わってまもなく1年を過ぎようとしているが、これらの連携活動は決して一朝一夕にできあがるものではない。トップのリーダーシップとそれを支えるサポート部隊の強い「想い」があつてこそ実現するものであることを強く実感している。

本編に掲げた活動はほんの一例に過ぎないが、トップ自らが地域に飛び込み膝と膝をつき合わせた懇談、そのリーダーの「想い」を遂げようとするサポート部隊の熱い心と行動力にほかならない。これら先人達が培い、脈々と受け継がれてきた心を決して絶やしてはならない。まさに「継続は力なり」とは、地域連携活動そのものであろう。

ひとつひとつ、繊細に、時には大胆に種を蒔く。熱い心で植え付けられたその実は、見事に熟し、さらに周りの実と一体となってやがて大きなクラスターとなることを願ってやまない。ひとつひとつの実を大事に大事に信念を込めて育むことこそ、地域連携業務に携わる我々の使命と感じている。



小さなつぼみも やがて大きな花を咲かせ  
人々の心のオアシスとなる



## 熟議キャラバン in 平川「安心・安全」

～すでに熟議は始まっていた～

瀧本 浩一

Takimoto, Koichi

(山口大学大学院理工学研究科 准教授)

山崎 隆弘

Yamasaki, Takahiro

(NPO ぼうぼうネット 事務局長)

### 1. 住民主体の防災を…

現在、地域社会を脅かす自然災害や犯罪など多くの“災い”が発生している。これまでの地域の安全・安心にかかわる活動においては、行政や防災の専門家が主体であったため、活動の継続性や人材育成などの課題が浮上しており、住民主体、地域主体の防災のあり方を考える必要がある。

2005年に、山口大学の瀧本浩一が中心となり、防府市で「防災ネットワーク推進会議」を立ち上げた。「まちづくり知恵袋」と「学の玉手箱」が地域というフィールド、そこで活動する市民団体に防災というメニューを広める活動を行った。この理念を引き継ぎ、2009年には、NPO法人ぼうぼうネットを設立し、川づくりやまちづくりでの“遊び”、“学び”を通して、防災・防犯力の素となる地域力を高めていく活動をすすめている。

2009年7月、山口県は豪雨災害に見舞われた(中国・九州北部豪雨)。平川地区でも水浸しになった家屋が多数あり、一時期は断水となり、長いところでは1週間も続いた。この時、山口大学吉田キャンパスは、一般家庭と水道経路が異なっていたため断水を逃れたので、学内に臨時給水所を設け、地域の給水支援を行った。

この経験は、災害時における平川地区と山口大学の連携を再確認する契機となり、平川自治連合会から山口大学エクステンションセンターに要請があり、大学院理工学研究科准教授でありエクステンションセンター主事でもある瀧本浩一を中心に2010年に地域防災を考える研修会を開催することとなった。2回の調整会議と3回の研修会(講演会とワークショップ)を行い、研修会には、平川地区から約100人が参加した。

### 2. 地域防災を考える研修会と調整会議

#### 2.1 第1回地域防災を考える研修会の調整会議

日時：2010年7月30日

場所：平川地域交流センター

平川地区と山口大学にて調整会議を2回開催し、研修会の意義、役割分担等の打ち合わせを行った。



#### 2.2 第2回地域防災を考える研修会の調整会議

日時：2010年9月2日

場所：山口大学エクステンションセンター



### 2.3 第1回地域防災を考える研修会

日時：2010年9月2日

場所：山口大学経済学部第一講義室

第1回目の研修会では、山口大学吉田キャンパスの大講義室において、瀧本浩一の講演会「災いを知って、防ぐを考える」を開催した。地域防災では、地域における風水害時の危険箇所、避難経路等を把握することが重要であり、そのためには地域防災マップの作成が必要であること、またそのマップを基に風水害時における行動について時間を追って考える必要があることなどについて共通認識をもつ場となった。



### 2.4 第2回地域防災を考える研修会

日時：2010年10月5日

場所：山口大学事務局第二会議室

第2回目の研修会は、「防災ワークショップ 演習Ⅰ：地域防災図上訓練 T-DIG (Disaster Imagination Game)」と称して、参加者が、地図を囲んで、書き込みをしながら議論することで、自身の地区に起こりうる災害像を具体的にイメージする手法を実施した。



各グループに分かれて、それぞれの地区の状況や実際に災害が起こった際の特に危険な場所を確認しながら、最悪の状況になる前に、どのように対処すべきかを議論した。また、自身の地区の強いところと弱いところを箇条書きにして、地区の特徴についての知識を深めたる場となった。

### 2.5 第3回地域防災を考える研修会

日時：2010年11月4日

場所：平川地域交流センター

第3回目の研修会は、「防災ワークショップ 演習Ⅱ 自主防災組織で非難対応」であった。平川地区にある21の地域を10グループに分けて、豪雨災害が起こったと仮定をして、「自主防災活動のシミュレーションを行った。災害発生からの時間軸にそって、「自助」「共助」、組織での避難対応について活発な意見交換が行われた。



### 3. 住民主体のまちづくりへ

この研修を踏まえて、平川地区では、いろいろな研修会社視察を行いながら、自主防災会を立ち上げる方向で動いている。

防災の活動は、まちづくりのひとつである。ま



ちづくりが住民主体で実施されないところでは、すばらしい計画が立案されても、どんな研修会を行っても現実的な活動としては根付かない。研修会等は外部からの一時的な働きかけにすぎわけであるから、重要なのは、それぞれの契機を地域でどのように展開していくかであり、それを担っていけるのはそこで暮らしている住民のみである。

我々は外部からどのような支援ができるのかを模索してきた。その結果、地域防災を指導できる人材を育て、地域の安心・安全に関わる機関、組織を側面から支援する個々の集団（コロニー）を地域に形成し、縦糸の行政主導の自主防災組織をつなげ、支える横糸を地域に張り巡らせることを目標に掲げた。人材育成は即効的な効果はないか

もしれないが、山口大学の理念にあるように、「はぐくむ」という地道な活動が重要であり、ここに大学としての役割があると考えている。

これらのことは防災だけでなく、全体のまちづくりにもいえることである。平川地区では、「山口大学と平川地域とのふれあい講座」と称して、生涯学習に関する連携講座を開始している。第1回の講座は、エクステンションセンターの富平美波教授が講師となった。平川地区と山口大学の連携は、互いの役割を確認し合いながら、防災や生涯学習を含めたまちづくりへと展開し、2012年度の経済学部鍋山祥子教授による「まちあるき」「熟議キャラバン in 平川 “まちづくり”」につながっていったのである。



### 瀧本 浩一 (たきもと こういち)

山口大学大学院理工学研究科安全環境学分野

出身：福岡県田川市（！）

専門：地域防災マイスター（新潟の方が命名）、地域防災プランナー（自称）

趣味：家庭菜園、豆腐づくり、カメラ、流離の絵描き

口癖：「そのうち、きますからね！」

小学校3年のころに見た映画「日本沈没」を見て、触発！映画中で東京大地震で燃え上がる東京を見つめ首相（丹波哲郎役）が自問自答した。「国民の生命、財産を守るとは、一体どういうことなんだに！？」に答えるべく、その時から防災へのめりこむ。「熟議 in やまぐち」ではグループ⑧の「安全・安心」の学内ファシリテーターをつとめる。「熟議」が市民権を得る前から、熟議的な防災ワークショップを各地で実施してきた。



### 山崎 隆弘 (やまさき たかひろ)

NPO 法人ぼうぼうネット事務局長

出身：山口県防府市

徳山大学経済学部経済学科卒、家族 爺婆妻子（長男1長女1）の6人

1994年に地域づくりの手法である「ワークショップ」とめぐり合い、地域住民が主役のまちづくり活動を支援するまちづくりグループ（黒子型）を立上げ、山口県内を中心に「地域活性化・元気づくり」の活動（アクション型）を積極的に進める。「熟議 in やまぐち」ではグループ⑧の「安全・安心」の学外ファシリテーターをつとめる。瀧本先生とのコンビで各地の防災ワークショップを手掛けている。

平成22年山口市自主防災活動促進事業

山口市平川地区



# 地域防災を考える研修会

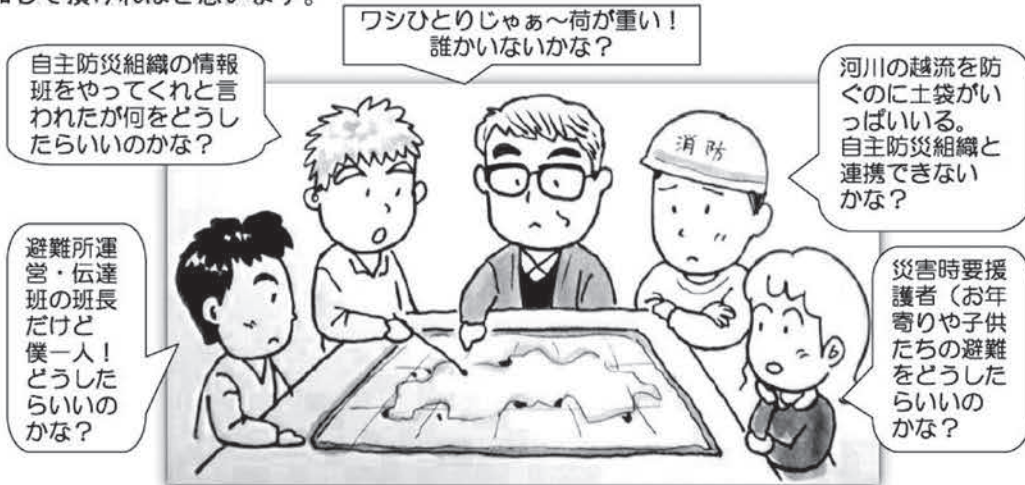
## ～災いを知って、防ぐを考える～

近年、想定を超える自然災害が各地で発生し、想像を絶する被害を引き起こしています。このことから平川自治連合会では、“災いを知って、防ぐを考える”をテーマにして、地域の防災力向上を目指した研修会を開催することに致しました。

第1回は、講演〈講師 山口大学大学院 瀧本 浩一准教授〉で「地域防災の進め方」を学び、第2回は、地域防災ワークショップ・演習Ⅰ〈地域防災図上訓練T-DIG〉で地図を用いて地域で起きる災害を探り、第3回は、演習Ⅱ〈自主防災組織で避難対応〉で時間軸にそって、地域が行なう避難対応を抽出する。の3回シリーズで開催することになっています。

この研修会の講演と災害図上訓練DIGの指導は、山口大学工学部 瀧本 浩一准教授とNPO法人ぼうぼうネット・DIG指導員の方々に支援して頂きます。

下記の内容で開催しますので、お忙しいと思いますが、お隣さん、ご近所さんを誘って参加して頂ければと思います。



**第1回 日時 平成22年9月24日(金)**

**19時～21時**

**場所 山口大学経済学部 第1大講義室**

**第2回 平成22年10月5日(火) 19時～21時**  
**場所 山口大学2号館4階 第3会議室**

**第3回の日程及び会場は、未定です。**  
**決まり次第、広報します。**

問い合わせ 平川コミュニティ推進協議会 083-922-0523

## まちあるき in ひらかわ

監修 鍋山 祥子

Nabeyama, Shoko

(山口大学 経済学部 教授)

報告 佐古 裕也

Sako, Yuya

(山口大学 経済学部 4年生)

### 1. 第1回 ぐるっとひらかわ ひらウォーク

平川地区のまちあるきと、それに続く住民参加による熟議は、平川コミュニティ推進協議会と山口大学経済学部鍋山ゼミの協働によっておこなわれている平川まちづくりのための活動である。平川まちづくりの具体的な到達点は、2014年度内に完成予定の2015～2019年の5年間の『まちづくり計画』の策定である。



よって立てられた。そして、計画だけでなく、必要な地図などの準備も合わせて学生がおこなった。

その計画というのは、平川地区を地図上で8等分し、その8等分したラインに近い道を探してルートを作成する。さらに、学生からリーダーを1人選び、平川地域交流センターの職員の方と、学生のリーダーをそれぞれのルートに1人ずつ配置し、残りのメンバーをだいたい1班4～5人となるように割り振った。当日は、ただ、その決めたルートを散歩するだけでは面白くないので、それぞれのルートを歩きながら、「平川の宝・ウリ・面白いと思ったもの」を写真に撮っていく、ということにした。そして、ゴールをした後に、その写真の披露会をおこない、平川地域交流センターの職員の方に審査員になってもらい、フォトコンテストを行った。

#### 1.1 第1回のまちあるきの目的

まちづくりに携わるにあたって、そもそも大学生自身が、あまりにも地域を知らなすぎるのではないのか、という意見が出た。そこで、まずは平川という地域を知ることが目的として、学生が参加する「第1回まちあるき」が企画された。第1回目は3月7日に行い、学生20人と平川地域交流センターの職員の方10人の、合わせて30人が参加した。

#### 1.2 第1回のまちあるきの内容

まずは、まちあるきの計画自体も学生の手に



ために、平川地区のまちあるきを積極的に企画するというのも、大学と地域の交流の第一歩として、有効なのではないだろうか。



### 1.3 第1回の感想

まちあるきの道中は、コミュニティの方から平川の歴史を聞いたり、道を教えてもらうことによって、普段、気づくことのできない地域の成り立ちや情報を知ることができた。それにより、自分たちが住み、学んでいる地域をより身近に感じることができるようになった。

また、いつもは気に留める事のない景色や、看板や、史跡等も、フォトコンテストのために探しながら歩いた結果、地域をよく知っているはずの交流センターの職員さんからも、「こんな景色、知らなかった」という意見が出され、地域の再発見のきっかけになった。

フォトコンテストでは、「子どもこそ、平川の宝」、ということで、子どもが土手で遊ぶ写真を撮った班が優勝した。

このように、大学生自らが企画し、遊び心を取り入れたまちあるきは、今回参加しなかった学生たちにも好評で、機会があれば是非参加したい、という意見も聞かれた。

大学の主催により、大学構内のツアーは何度も開催されているが、今後は、大学生が地域を知る

## 2. 第2回 ひらウォーク

with 平川の住民みなさん

第1回目のまちあるきは、大学生が自分たちの住む平川地区を知り、平川地区のお宝発見!!を目的に行ったが、第2回目のまちあるきは、大学生と平川地区の住民の方が一緒にまちを歩いた。



### 2.1 第2回のまちあるきの目的

子どもたちと一緒に平川地区を歩きたいというコンセプトを立て、夏休み期間中の8月25日の早朝から行った。前回同様、平川という地域を知るということを目的としている。平川地域交流センターの職員の方に住民の方の参加を呼びかけてもらい、平川地区に住む、子どもから高齢者までの参加を得ることができた。人数規模は、前回よりも多く、学生と地域の方を合わせて、50人超となった。

前回と同様の地域分けをおこない、各グループに学生リーダーを配置して、住民の方と学生がだいたいバランス良くなるようにくじでグループ分けをした。



## 2.2 まちあるきの内容

今回は、熱中症が心配な夏場の開催であり、また、子どもたちの参加も期待して、学生の発案により、まちあるきのゴール地点に、かき氷を用意した。まちあるき自体の企画としては、基本は前回と同様のルートを生いてもらうのだが、前回撮影したそれぞれのコース毎の写真をあらかじめグループに5枚提示し、その写真の場所を探しながら歩いてもらうというクイズ形式のまちあるきを楽しんでもらった。参加者は、写真の場所を見つけて撮影し、ゴールの地点で答え合わせをして、正解した数に応じて景品のお菓子がもらえるというルールにした。

これにより、平川地区の住民同士である子どもや大人も、学生も、みんなで協力しながらまちあるきができ、コミュニケーションも積極的にとることができた。住民の方も、自分たちの住んでいる、よく知っているはずの地域に、新たな発見をすることができて楽しんでいただけたようだった。

## 3. おわりに

このまちあるきを通して、学生と地域住民とが協力し合って、地域のお宝を改めて発見するという、地域の住民の方と学生との協力関係の芽を生むことができたのではないだろうか。

これら2回にわたるまちあるきを実施した後に、次からの地域住民と学生とが協力しながらまちの課題を発見し、将来展望を探っていくというまちづくり協議に入っていく。



鍋山 祥子 (なべやま しょうこ)

山口大学 経済学部 教授

出身：福岡県北九州市

専門：福祉社会学、地域福祉、高齢者福祉、ワーク・ライフ・バランス

大学卒業後、4年間のサラリーマン生活を経て、大学院で再び社会学を学び直す。近年の研究では、遠距離介護とワーク・ライフ・バランスの関連について考察している。2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」では、グループ⑩の「まちづくり」を担当。その時の学外ファシリテーターは平川コミュニティ推進協議会の加藤美和子さんであった。加藤さんの強いサポートのもと、平川での「まちあるき」「熟議」の活動が展開されている。

## 熟議キャラバン in 平川「まちづくり」

監修 鍋山 祥子

Nabeyama, Shoko

(山口大学 経済学部 教授)

報告 佐古 裕也

Sako, Yuya

(山口大学 経済学部 4年生)

### 1. 第1回「平川のいいところ、悪いところ」

平川地区における、第1回目のまちづくり熟議を2012年11月10日に行った。

テーマは、平川のまちづくりを行うにあたって、「平川のいいところ、悪いところ」と設定して、今現在の平川を住民がどのように評価しているのかというありのままの平川地区の状況を知ることが目的とした。

平川地域交流センターの職員の方による広報での呼びかけや、福祉やPTAなどまちづくりに関係のある役割を担っている方々への声かけなどによって、子ども3人を含む大学生と地域住民とを合わせて、50人に集まってもらった。

だいたい1テーブルに大学生1人と地域の方を交えた計6~7人で、7テーブルが埋まった。設定したテーマは、①平川の安心・安全、②地域振興、③環境づくり、④地域個性創出、⑤地域福祉の5つに加え、平川の個性のひとつでもある、⑥大学生との共生と、⑦子どもの目線を見た平川、というユニークなものも合わせた7つである。約90分にわたって、それぞれの分野での平川の現状を話し合ってもらった。



### 1.1 第1回熟議の内容

第1回目は、平川の現状を知るという事を目的にしていたため、各テーマ・テーブルごとに、日頃、平川地区に住みながら感じていること、思っていることを自由に出してもらった。以下に、それぞれのテーマごとに出された主な現状や課題をまとめた。

#### (1) 平川の安心安全

- ・ 環境面では、大学まで教育機関がそろっていて、スーパーや病院もあって暮らしやすい
- ・ 交通面では、道路が良くなったが、自転車や車の交通量が多く危険なところもある
- ・ 安全面では、見守り隊や警察署が近くにあり安心できる

#### (2) 地域振興

- ・ 地域交流の面では住民の交流があまりなく、特に大学生とは接点も少ない
- ・ 施設面では、大型ショッピングモールなどがなく、規模が中途半端
- ・ イベント面では、地域のスポーツ活動が活発

#### (3) 環境づくり

- ・ 自然の面では、水害が起こりやすいなどの危険はあるが、緑が豊かで自然が豊富
- ・ 娯楽の面では公園が少なかったり、小さかったりする
- ・ ゴミの面では、ポイ捨てや、分別のマナーが悪い

#### (4) 地域個性創出

- ・ 地域行事の面では、行事の数は多く学校と連携したりもしている
- ・ 教育面では、大学まで揃っており、若者が多

- い
- ・ 環境の面では、まちの人が優しく住みやすい
  - ・ マナーの面では、山大生の自転車のマナーが悪い
- (5) 地域福祉
- ・ 子どもの面では、子育て支援が活発で、子どもが多く、県下 No. 1 の児童数をほこる
  - ・ 担い手の面では、・ 地区社協の活動が充実しており福祉員が多い
  - ・ 高齢者の面では、高齢者が気軽に通える場所が少ない
- (6) 大学生との共生
- ・ 施設面では、駅が近く便利だが、遊ぶところが少ない
- (7) 子どもの目線
- ・ 小学校のクラブで地域の人と交流ができる
  - ・ 祭りがたくさんある
  - ・ ゴミや犬のフンなどがたくさん落ちている
  - ・ 車が多い
- このように、様々な意見が出揃った。これらの意見を、似たものや分野をまとめたのが以下の表である。

表 1 第 1 回熟議における様々な意見（環境について）

		良い	悪い
環境	住環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 皆さん親切である</li> <li>・ 学園都市である</li> <li>・ 若者が多い（大学生、子ども）</li> <li>・ 知的財産である山大や高校がある</li> <li>・ 人口移動が多い</li> <li>・ 住みよ→増加によって活性化</li> </ul>	
	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自然が豊か</li> <li>・ 空気がきれい</li> <li>・ 平地が多い</li> <li>・ 山や川の豊富な自然が多い</li> <li>・ 九田と榎野川に囲まれた水の豊かな自然がある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雨が多く降ると河川が溢れる</li> <li>・ 小さな河川があるが草が繁茂している</li> <li>・ 休耕田が多くもったいない</li> </ul>

表 2 第 1 回熟議における様々な意見（施設について）

		良い	悪い
施設	生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スーパーが多いので、買い物が便利</li> <li>・ スーパーが近い</li> <li>・ コンビニなど深夜遅くまでやっているお店が多い</li> <li>・ 駅が近い</li> <li>・ 湯田温泉が近くで location が良い</li> <li>・ アルクが 24 時間で便利</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どんな人が住んでいるのかわかりにくい</li> <li>・ 気軽に行けるお店が少ない</li> <li>・ メインになる施設がない</li> <li>・ 外で安心して遊べる場所がない（公園）</li> <li>・ 近くに大きい都市がない</li> <li>・ 買い物するところが少ない</li> </ul>
	娯楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 温泉施設が近い</li> <li>・ 飲み屋が近い</li> <li>・ おしゃれなお店が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サバイバルパークに入れない</li> <li>・ 公園が少ない（子ども）</li> <li>・ 遊べる場所が少ない（おとな）</li> <li>・ ゲーセンが遠い</li> <li>・ 遊ぶところが少ない</li> <li>・ カフェが欲しい</li> </ul>
	教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼・保・小・中・高・大がそろっている</li> <li>・ 子どもが多い→活気がある</li> <li>・ 小学校がマンモス校である</li> </ul>	
	商業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 美・美容院が多い</li> <li>・ 大型店が多い→店が多い（商業施設に人が集まる）</li> <li>・ 郊外店が多い</li> </ul>	

表3 第1回熟議における様々な意見（生活について）

		良い	悪い
生活	交通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい道路が開通して、大内、山口へと便利になった</li> <li>・道路が良くなった</li> <li>・歩道が広い</li> <li>・街灯が LED になって夜間明るくなった</li> <li>・高速道路が通っている</li> <li>・公共交通（バス・鉄道）が機能している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・街灯が少ない</li> <li>・幹線道路以外、防犯灯が少ない</li> <li>・交通量が多い</li> <li>・新しい道路が開通したが、園児、生徒、学生の交通事故が心配</li> <li>・自転車が多い（特に通学ラッシュ時）</li> <li>・せっかく自転車道ができたのに、歩道に自転車が多い</li> <li>・山大通りの歩道と自転車道の区別がつかない</li> <li>・バスが少ない</li> <li>・車がないと生活が非常に不便</li> <li>・定期バスの運行本数が少なすぎる</li> <li>・コミュニティーバスが通らない</li> <li>・小さい路が多過ぎる</li> <li>・幹線道路が少ない</li> <li>・矢原駅が自転車置き場でわりにくい</li> <li>・交通の便がない地域が多く、外出が困る（高齢者）</li> <li>・交通マナーが悪く大変困っている（無灯火、傘さし、ヘッドフォン）</li> </ul>
	安全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見守り隊がいる、活動的</li> <li>・危険箇所点検を実施し、学校にフィードバックしている</li> <li>・警察署が近いので安心できる</li> <li>・警察が夜に見張っている</li> </ul>	
	防災		<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災につなげる健康作りが重要</li> <li>・全体的に低地である</li> <li>・水害に弱い</li> </ul>
	ゴミ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみのポイ捨てがある</li> <li>・ごみの分別の仕方が悪い</li> <li>・ゴミステーションの設置場所が少ない or 遠い</li> </ul>
	農業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年五米を地域で販売</li> <li>・農業（米・野菜）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休耕地が増加→宅地に変わってきているが、できれば田んぼを残したい</li> </ul>
	子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て支援が活発（ひらひらなど）</li> <li>・子どもが多い、県下 No. 1 の児童数をはかる</li> </ul>	
	高齢者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老人ホームがきれい</li> <li>・男性中心のサロンがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サロンの数が高齢者の割合に対して少ない</li> <li>・高齢者が気軽に通える場が少ない</li> <li>・高齢化してきた</li> <li>・休耕地ができた</li> <li>・廃屋も増えた</li> </ul>
	人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意外と3世代家族が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無縁化、希薄化</li> <li>・祭り参加不足</li> <li>・会員の減少</li> <li>・アパートが多く人間関係が希薄</li> <li>・学生アパートに高齢者が転居し、地域交流がない、情報が得にくい</li> </ul>



表4 第1回熟議における様々な意見（地域について）

		良い	悪い
地域	平川の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 九田川が中心を通る</li> <li>・ 広い河原公園がある→自然が豊か、文化歴史もたくさんある</li> <li>・ 昔からの農家と新興住宅が共存している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個性が少ない（学生は除く）</li> </ul>
	地域行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石川佳純で盛り上がった</li> <li>・ 地域のスポーツ活動が多い</li> <li>・ 平川祭りが盛大</li> <li>・ クリーン作戦にも多くの参加</li> <li>・ 平川祭り</li> <li>・ 地域と学校のつながりが大きい（イベント行事など）→住民同士仲がよく、連携が取りやすい</li> <li>・ 地域行事が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1人暮らしの方は参加しづらい</li> </ul>
	地域交流		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 住民の交流があまりない（大学生も）</li> <li>・ 大学生の人たちと住民の交流を気軽にしたい</li> <li>・ 隣人に対しての関心が徐々に薄れている</li> <li>・ 昔から住んでいる人と新しく移り住む若い世代との交流が少ない</li> <li>・ 挨拶ができない（大人も子どもも）</li> <li>・ 大学を有意義に活用できるようにしてほしい</li> <li>・ 自治会をもっと分かりやすく、皆が協力できるようにしたい</li> <li>・ 老人が楽しめる行事が少ない</li> </ul>
	活気	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 若やいだ</li> <li>・ 街がにぎやかになった</li> <li>・ 外国人がいて国際的</li> <li>・ 留学生と関わって大変楽しく国際人になっていった</li> <li>・ 地方都市だけど平川にたくさん若者がいていい</li> <li>・ 風の会で留学生や一般学生も入って学生部会ができ、若返る</li> <li>・ 人口が多くなった</li> </ul>	

表5 第1回熟議における様々な意見（子どもたちの意見）

	良い	悪い
子どもの目線	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人がたくさんいて楽しい</li> <li>・ 祭りがたくさんある</li> <li>・ 小学校のクラブで地域の人と交流ができる</li> <li>・ 平川でつくったものが食べられる</li> <li>・ 公園がたくさんある</li> <li>・ 学校のクラスに1つずつ花壇がある</li> <li>・ 自然が多い</li> <li>・ 小学校でお米をつくる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゴミや犬のフンなどがたくさん落ちている</li> <li>・ 運動会では人が多過ぎて迷子になってしまう</li> <li>・ 車が多い</li> <li>・ 広くて大きな公園がない</li> </ul>

## 1.2 第1回熟議のまとめ

この結果を見るに、環境においては前向きに捉えられており、学園都市でありながら美しい自然と共存しているという自己評価がなされている。生活面では、交通において、公共交通は今のままでも不便はなく、むしろちょうどいいくらいに感じている人もいれば、不便だから改善してほしいと思っている人もいた。この感じ方の差は、住んでいる場所よっての差であると思われる。

また、問題点としてあげられたのが、交通マナーや安全面である。中学、高校、大学などの学生が多い分、自転車のマナーについて多くの指摘がなされた。この自転車マナーについては、大学側でも学生に対して注意喚起を積極的におこなったり、校門前に立ってチェックしていたり、警察が雨の日に立って注意をしたりという対策が既になされている。安全面では、小学生の登校時の見守り隊が組織されていたり、近くに交番があるため、生活するには安心できているようだが、一方、街灯が少なく夜道が怖い、狭い道が多く、危険を感じて通りたくないという指摘もあった。

この他にも、高齢者の増加に伴って、休耕田が増えたり、廃屋ができていて対策に困るという意見や、別の用途で活かすことを考えたら良いというような、意見も出された。

平川地区は平川小学校というマンモス校を抱えていることもあり、子どもの数が多く、それに比例して子育て支援が活発なようだ。

施設の面では、普通に生活するには事足りているようだが、大学生などの若者の目線で見るときには、いざ遊ぶとなると、遊べる場所がなく、都市部に出かけて行くにも遠く、そこがネックになっているという世代によって異なる意見も出さ



れた。

地域の交流としては、行事が多いものの、人々が積極的に行事を利用して交流しているかという点もそうとも言えず、今後の行事のあり方に対する課題も抽出された。今後は、行事参加を積極的に呼びかけ、今まで行事に参加していない住民も含めて、地域の交流に行事を役立てたいとする意見が出された。

地域全体の活気については、学園都市であるためにぎやかで、留学生もいるために国際的な面もあると認識されていた。

以上のように、おおむね暮らしやすい場所であると皆が感じているようだが、若者としては刺激が少なく、また、地域内でとどまって遊ぶ場所もなく、外に出かけるにも車が必須であることがネックなようだ。



## 2. 第2回「こうしたい！平川」

第2回目の平川まちづくり熟議を2012年12月22日に行った。前回の熟議で、平川地区の現状と課題を抽出してもらったので、第2回目は、それ

それぞれの分野ごとの将来展望を語り合ってもらった。

第1回目と同様に、平川地域交流センターによる広報での呼びかけや、関連の活動をされている方々への個別の声かけなどによって、子ども5人と大学生と大人を合わせて50人に集まってもらった。1つのテーマで1テーブルを構成し、だいたい1テーブルに大学生1人と地域の方を交えた計6~7人の配置となった。

第2回目は、1回目の結果を分析した結果、似た内容や指摘を統合・再編しなおして、①平川の安心・安全、②地域交流、③環境づくり、④生活、⑤住みやすさの5つに加え、前回と同様に、⑥大学生との共生と、⑦子どもの目線の計7つをテーマに、それぞれの分野における望ましい将来像について夢を描いてもらった。



## 2.1 第2回熟議の内容

参加者は前回と同じメンバーが基本で、新しい方の参加もみられたので、話し合いの素地としては第1回目よりも早い段階で打ち解けることができたように思う。



熟議のやり方についても、経験を経ていく毎にポイントをうまく捉えた話し合いが展開されているように思えた。

### (1) 平川の安心安全

- ・コミュニケーションの面では、大人も子どもも挨拶が出来て若者が積極的に地域に関われるまち
- ・防災面では、防災・安全に大学の知と力(人)を活かす町

### (2) 地域交流

- ・高齢者が多いので隣近所で支えあえる社会
- ・情報交換し緊急時にも支えあえる地域

### (3) 環境づくり

- ・リサイクルできる社会(学生同士で)
- ・ゴミの分別をできる社会

### (4) 生活

- ・生活面では、大学生が楽しめる施設の設置や平川の歴史を知れる資料館のようなもの
- ・農業面では、平川産のものを押す、地産地消を目指す

### (5) 住みやすさ

- ・環境面では、住みたくくなるような美しいまちを目指す
- ・地域交流の面では、隣近所の声かけ、顔の見えるまち

### (6) 大学生との共生

- ・大学生の第2の故郷となれるようなまち
- ・地域の行事にもっと学生の参加を

### (7) 子どもの目線

- ・スピードを出す車がいなくなって欲しい
  - ・子どもの行事への参加率を上げて欲しい
- これらの意見を、まとめたのが以下の表である。



表6 第2回熟議における様々な意見（環境について）

		理想	改善点
環境	住環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リサイクルできる社会（学生同士で）</li> <li>・ 住みたくなる美しいまち</li> <li>・ 町中がバリアフリー</li> <li>・ 安心して生活できる</li> <li>・ 健康管理が地域でできる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゴミの分別をする</li> <li>・ 生活文化の教育をしっかりする</li> <li>・ 子どもたちが安心して遊べる公園などの設置</li> <li>・ 通学路の安全確保</li> </ul>
	自然		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 空家の活用</li> <li>・ 日常生活で自然にかかわる機会をもっと増やす</li> </ul>
	農業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平川特産のものがある地域</li> <li>・ 自然の残る風景</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キャラクターの作成</li> <li>・ 地産地消を目指す</li> <li>・ イチゴ狩りができたらうれしい</li> <li>・ 慶庄土公園の整備</li> </ul>
	施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもは遊べ、大人はゆっくりできる場所</li> <li>・ 平川の歴史を知れる（平川の歴史を知るための資料館等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域交流館に平川の歴史や特徴の写真、説明を置く</li> <li>・ 平川に住んでいる人の数の割に交流センターが小さいから大きくしてほしい</li> <li>・ 大学生が楽しめる娯楽施設（ちょっとしたカフェ、ラウンドワンなどの大型施設）</li> </ul>

表7 第2回熟議における様々な意見（暮らしについて）

		理想	改善点
暮らし	交通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家にこもりがちの方が出ていきやすい街</li> <li>・ 公共機関で外出しやすい地域づくり（バスなど）</li> <li>・ 交通面で見通しの良い町</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 夜のウォーキング時の安全のために街灯を多く</li> <li>・ 公共交通の便を増やし、渋滞を減らす</li> <li>・ 平川地区内だけのバス・乗り物等の交通手段の設置</li> <li>・ グループタクシーを周知徹底して、高齢者の方の外出が容易になるようにする</li> <li>・ 歩行者道と自転車道をわかりやすく区分</li> <li>・ 道路の幅を広く</li> <li>・ 交通信号や標識の充実</li> <li>・ 県道、歩道の路面が良くないので整備</li> <li>・ 御堀平井線のさらなる延長</li> </ul>
	防災	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 防災・安全に大学の知と力（人）を活かす町</li> <li>・ ご近所さんと仲が良い→災害時等に助け合えるまち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 低地が多くて水害に弱いので対策を</li> <li>・ 休耕田の有効利用</li> <li>・ 要援護者の救助対策の確立</li> <li>・ 初期対応の災害物資の整備</li> <li>・ 災害時の避難場所を高齢者に周知</li> <li>・ 自主避難場所を確保</li> <li>・ 通学路を住民に知らせ、防犯に努める</li> <li>・ 各自治会内で会員の名前を把握</li> </ul>
	情報		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自治会の充実（自治会員を増やす）</li> <li>・ 緊急情報の伝達方法の確保</li> <li>・ 住民連絡網の2系統による整備</li> <li>・ 緊急情報の伝達を早く、確実に</li> <li>・ 独居老人と学生（留学生）が共に住む</li> </ul>

表 8 第 2 回熟議における様々な意見（地域について）

		理想	改善点
地域	地域交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 隣近所の声かけ、顔の見える関係作り</li> <li>・ 近所のつながりが強い街</li> <li>・ 3 世代仲良く手をつないでいるまち</li> <li>・ 人とかかわりを持ち続けられる地域</li> <li>・ 子どもはみんなで育てるまち（自分の子どもと同じように）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者には思いやり、子どもには愛情。地域の者がみんなでかかわる</li> <li>・ 子どもと高齢者が一緒に集える交流の施設を増やす</li> <li>・ 保護者による子どもたちの見守り</li> <li>・ 挨拶の推進（大人から子どもへも積極的に）</li> <li>・ 子どもと高齢者との交流がもっとできるといい</li> <li>・ 地域（大学生も含め）が子どもたちを見守る</li> <li>・ 山口大学の学生のボランティア活動に期待</li> <li>・ 自治会内でのまつり開催</li> <li>・ 若者が地域に積極的に関わる</li> <li>・ 町内単位での交流</li> </ul>
	大学との共生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定期的に交流の場を設けてスポーツ部門、文化部門においてお互いを高め合えるまち</li> <li>・ 学生の第 2 の故郷になるまち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 春秋のクリーン作戦にたくさんの学生部隊がほしい</li> <li>・ 平川祭りにもっと学生の参加を</li> <li>・ てくてくツアーの PR を強化</li> <li>・ 学食を利用する。</li> <li>・ 山大ブランドの PR（長州学舎）</li> <li>・ 大学内での花見等のイベント</li> <li>・ 共育の丘に桜樹を平川住民に募集（赤ちゃんの生誕記念など）</li> <li>・ 学生と地域と一緒に防犯活動</li> <li>・ 平川小、中学生への為に山大の教授による講演会</li> <li>・ 大学生と地域の方が参加する大学内でのお祭り</li> <li>・ 公共交通機関の充実</li> </ul>
	高齢者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話し相手が多い、集まる機会が多い、参加しやすい行事があるまち</li> <li>・ 高齢になっても自分の楽しみを持ち続けられるまち</li> <li>・ 認知症になっても在宅生活を送れる地域づくり</li> <li>・ 年金内で生活できる施設づくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者の方が集まれるサロンを作る</li> <li>・ 高齢者の憩いの場、趣味の場</li> <li>・ 老人クラブの加入、活動が盛んに</li> <li>・ 元気で長生きを目指して、できるだけ予防をする</li> <li>・ 高齢者の相談機関が身近にあるので活用してほしい</li> </ul>
	子ども（子育て）		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小、中学校のグラウンドを大きくしてほしい</li> <li>・ 平川幼稚園の年少組を作る（3 年保育）</li> <li>・ 子育て支援広場を増やす</li> <li>・ 子育て広場をもっとみんなに知ってもらおう</li> <li>・ 子どもを気軽に預けられるファミサポ登録者の増加</li> <li>・ 子どもが淋しくない環境づくり</li> </ul>
	教育		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当たり前前に農業に触れられる環境づくり</li> <li>・ 平川小・中の情報を提供</li> <li>・ 公会堂の活用</li> </ul>

表9 第2回熟議における様々な意見（子ども班による意見）

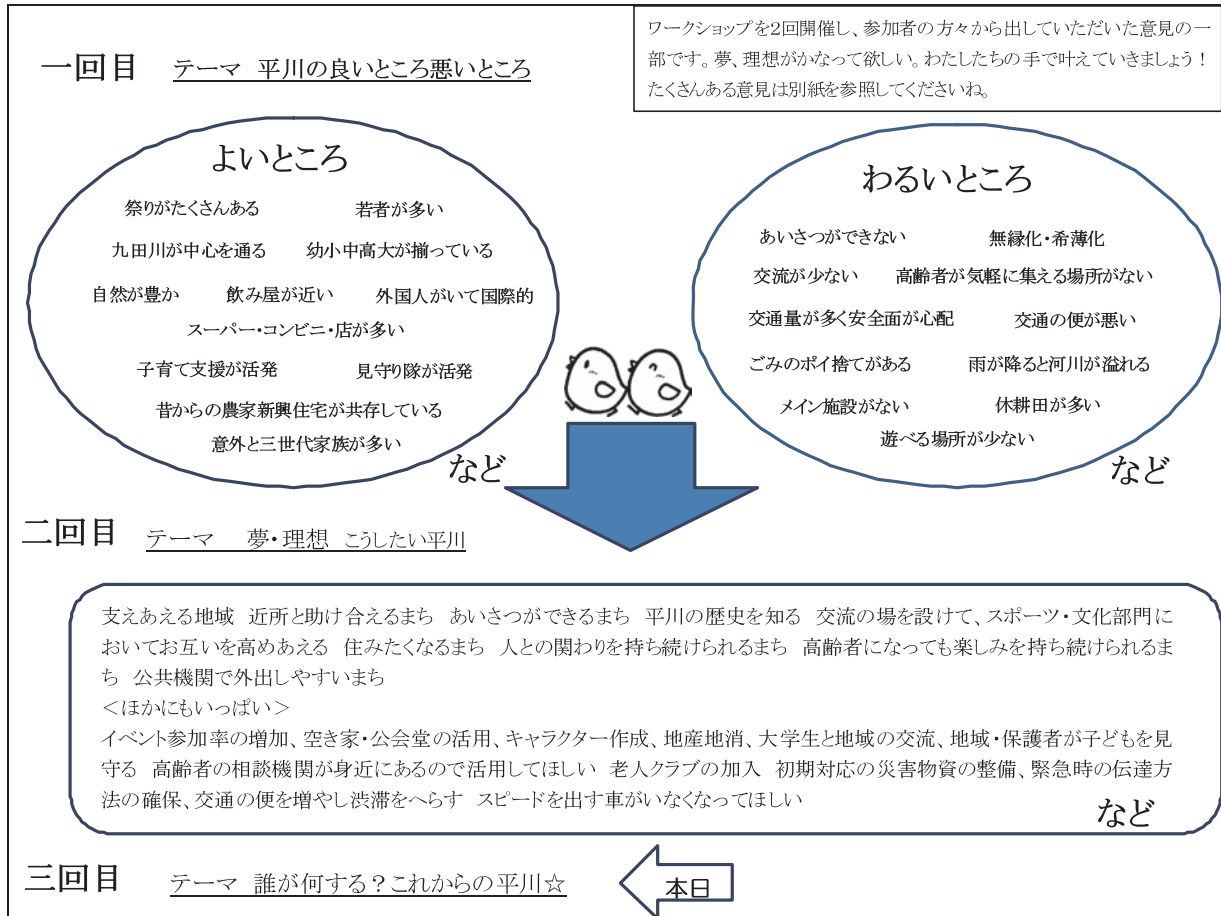
	良い点	改善点
安全		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スピードを出す車がいなくなっほしい</li> <li>・ 曲がり角にカーブミラーをつけてほしい</li> <li>・ 街灯がほしい</li> <li>・ 通学路や道を広くしてほしい、歩道がほしい</li> <li>・ 道をきれいにしてほしい</li> <li>・ 道や九田川にゴミが落ちていないようにしてほしい</li> </ul>
施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 食べるところが充実している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ トイレを増やしてほしい</li> <li>・ 大きい公園がほしい</li> <li>・ サバイバルパークのようなものがほしい</li> <li>・ ラウンドワンがほしい</li> </ul>
行事		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ お祭りをもっと増やしてほしい</li> <li>・ お祭りでタダで何か食べたい</li> <li>・ お祭り以外の行事が少ない</li> <li>・ お祭りの宣伝を子どもたちにもしてほしい</li> <li>・ 子どもの地域行事への参加率を上げてほしい</li> </ul>
その他		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高校はたくさんあっているいろいろ選べるのはいいところだと思う（中学生からの意見）</li> </ul>

## 2.2 第2回熟議のまとめ

この結果をみるに、住民たちが求めている「理想の平川」とは、環境の面においては、純粋に暮らしやすいまちである。つまり、まち全体がバリアフリーのようになっていて動きやすかったり、最低限の利便性が確保された安心して暮らせるまちである。施設面では、やはり若者が遊べる娯楽施設を望む声が出たが、その他に、平川の歴史を残していける資料館があるといいというような郷土愛を育てるという視点もみられた。暮らしの面では、上記表の高齢者の欄にも出ているが、高齢者になったときに暮らしやすいようにバスの路線の充実やグループタクシーの周知などの意見もあり、地域の高齢化や自分の将来を見越している意見もみられた。山口大学に対しては、災害・安全の面で、大学の知恵をまちの防災に役立てたり、学生の行事の参加率の増加など、さらなる大学と地域との交流が期待されていることが明らかになった。地域交流の面でも、大学生との関わりを活発にしたいという意見が多く、地域と大学生とがお互いを知ることによって、ゴミの問題や自転

車のマナーなど、様々な問題を解決するための糸口になるのではないかという意見が出された。この先、住民が平川地区で高齢になっていくときの暮らしやすさを視野に入れた意見も多く出され、高齢者になってからの楽しみや、高齢者向けの憩いの場や趣味の場が求められていた。毎日通学をしている子どもからは、交通安全を確保するためのマナーやカーブミラーの設置を望む声が出された。他にも、子どもらしい願望や遊び場の要望などが議論されていた。





### 3. 第3回「誰がどうやる？これからの平川」

第3回平川まちづくりの熟議を3月9日に行った。これまでの熟議の内容を踏まえ、住民の方たちの思う理想の平川を、一体、誰が、どうやって実現していくのか、ということを確認していくという事を目的にしていた。平川地域交流センターの方たちが広報での呼びかけや、関係ある仕事をされている方々への声かけなどによって、子ども5人と大人合わせて50人程度集まってもらい、だいたい1テーブルに大学生1人と地域の方を交えた計6~7人で、7テーブルを全て埋めることができた。第3回目の中身は、①安全・防災 ②環境 ③地域交流 ④子育て ⑤高齢者 の5つに加え、平川の個性のひとつでもある⑥大学生と⑦子どもの目線で見た平川として子どもたちの意見も取り入れた計7つをテーマにそれぞれの分野での理想の平川を実現するために、「住民の私たちには何ができるのか？」というポイントを意識して、話し合ってもらった。



#### 3.1 第3回熟議の内容

第3回は、理想を実現するためにどうすればいいのか？という難しい議題の為に、話し合いの方向がなかなか定まらないグループもあった。話し合いの進め方として、まずは将来の理想や目標をいくつか定めた後に、その理想を実現するために

は、私たち住民に何ができるのか？ということを考えてもらうようにした。

(1) 安全・防災

- ・ 近所で仲が良い社会：町内会、自治会での交流をもっとはかる
- ・ 要援護者の救助：民生委員や福祉員での情報把握
- ・ 灯りのあるまち：街灯の設置（市などに要請）
- ・ 緊急連絡網：各自治体、班ごとに連絡網をつくる



皆、真剣に資料に目を通している

(2) 環境

- ・ 遊べる公園、散歩コース
- ・ リサイクルできる社会：学生と地域住民が主体で行う
- ・ 住みたくなる美しいまち：地域と山大で実行委員会を設ける
- ・ まち中がバリアフリー：コミュニティの部会行政に申請する

(3) 地域交流

- ・ 住民が交流できる社会：新しく来た人と仲良くする（受け入れる）
- ・ 学生の第2の故郷：地域交流サークルが、大学生に情報を出す

(4) 子育て

- ・ 挨拶：コミュニティ推進協議会や大人から行う
- ・ サポート：子育て広場ひらひらの情報をもっと発信していく

(5) 高齢者

- ・ 高齢者の住みよいまちへ：仲間づくりや交流をはかるためのリーダーを養成する

(6) 大学生

- ・ 地域と大学生が関われるまち：ボランティアに大学生の参加を促進する（大学生にも利益を）

(7) 子ども

- ・ 安全：ポスターやちらし、募金をして資金を集める
- ・ 行事：ちらしを配布して呼びかける



発表の様子



子どもたち自身でも発表

3.2 第3回熟議のまとめ

今回は、今まで描いた理想を形にするための話し合いだった為に、短い時間では具体的な回答を導き出すのが難しいテーマもあり、住民が自分たちで何ができるかを探るための試行錯誤が行われた。施設や道路は、住民自身が作り替えることはできないが、きれいなまちづくりや、リサイクルのできる社会のようなすぐ始められる身近なこともあげられた。この先も、具体的な話し合いを続ける中で、行政や住民、大学がそれぞれどのような部分で協力できるのかというつながりも意識しながら、着実なまちづくり計画を進めていきたい。





真剣に発表を聞いている参加者



鍋山先生によるまとめ



熟議キャラバン in 平川への参加者  
 <平川地区からの参加者>

1	米倉 一夫	24	渡邊 智子
2	関矢 鎮雄	25	荒瀬 慎太郎
3	板谷 源治	26	田北 八重子
4	横沼 隆司	27	重枝 恵子
5	長見 正義	28	人見 久美子
6	上野 克裕	29	高場 由起恵
7	山本 善積	30	山本 和久
8	磯本 博子	31	蔵成 幹也
9	荒瀬 直子	32	藤井 良治
10	田中 啓子	33	佐伯さん
11	清水 芳子	34	重本さん
12	大野さん	35	石丸 典子
13	名尾 房子	36	中田さん
14	岡本 しのぶ	37	東さん

15	高木 常夫	38	土田さん
16	清水 俊江	39	山田 眞知子
17	馬田 義子	40	粟畑 豊
18	吾郷 明美	41	秋本 浩生
19	田中 忠通	42	加藤 美和子
20	上野 雅子	43	田中 (小学6年生)
21	村田 尚志	44	岡本 (小学6年生)
22	小杉 文子	45	河野 (小学5年生)
23	金沢さん	46	田中 (小学4年生)

<山口大学からの学生>

1	佐古 裕也	山口大学経済学部4年 (卒論で平川地区のまちづくりを取り上げる)
2	清水 大樹	山口大学経済学部4年 (まちあるきのリーダー)
3	磯貝 理恵	山口大学経済学部4年 (まちあるきの企画)
4	佐々木 秀生	山口大学経済学部4年 (まちあるきの企画)
5	新田 誠敏	山口大学経済学部4年 (まちあるきの企画)
6	上野 愛美	山口大学経済学部4年
7	佐々木 瑞枝	山口大学経済学部2年 (まちづくりのリーダー)
8	藤島 弘祐	山口大学経済学部2年 (まちづくりのリーダー)
9	安部 啓	山口大学経済学部2年 (熟議 in 浮島にも参加)
10	高橋 光彦	山口大学経済学部2年 (まちづくり担当)
11	大久保 理絵	山口大学経済学部2年
12	仙誉 紀子	山口大学経済学部2年 (まちづくり担当)
13	上田 奈津美	山口大学経済学部2年
14	姫野 初美	山口大学経済学部2年
15	塚内 啓紀	山口大学経済学部2年
16	伊東 美佳	山口大学経済学部2年
17	北菌 広樹	山口大学経済学部2年
18	越智 穂奈美	山口大学経済学部2年 (まちづくり担当)

## 阿武町からのご挨拶

～「ホンモノ」との出会い～

中村 秀明

Nakamura, Hideaki

(阿武町 町長)

皆さん、こんにちは。阿武町長の中村秀明です。

このたびは、「熟議キャラバン in やまぐち報告書」の発刊、誠におめでとうございます。

この報告書をご覧の皆さんは阿武町をご存じでしょうか？

阿武町は山口県の北部に位置しており、昭和 30 年 1 月に奈古町、福賀村、宇田郷村の 3 カ町村が合併して発足しました。高齢化率は約 44%で、人口は約 3700 人ですが、面積は 116 平方キロメートルと、山口県内の町では周防大島町に次ぐ広さです。平成の大合併の際にも単独町政の道を選択し、現在に至っています。

基幹産業は農業、漁業、林業等の第 1 次産業であり、特に福賀地区はエコ米をはじめ、米の生産が盛んで山口県の“食糧基地”となっています。

自立の道を歩んでいる本町は、まちづくりの指針となる新たな基本構想・基本計画「元気！あぶ町！5001 プラン」に基づき、「小さくても個性が光る自立したまちづくり」に向けた施策を積極的に展開しています。

町内には、コンサートなどを企画するグループもあり、人口 4000 人を切る小さな町ながらも一流のミュージシャンがこの町を訪れ、ライブ演奏を披露する中で人と人との交流が生まれ、将来を

担う子どもたちにおいても「ホンモノ」との出会いの中で夢と希望が育まれるよう、豊かで住みよい文化のまちづくりにも努めています。

その甲斐あってか、「阿武町はどんなところ？」と聞かれた際に「国で言えばブータンみたいなところ」と回答が返ってくるように、公共交通機関が地方として不便な中山間地域にありながらも、町民の満足度は高いと認識しています。5 年で約 100 人の移住者を受け入れ、定着率が高いのも、阿武町が目指す「交流から定住へ」の施策が実を結んだ成果であるといえます。

また、道の駅阿武町については近々リニューアルを実施し、第 1 次産品の販売拠点となるだけでなく、交流活動の拠点としても期待しています。

この阿武町が国際的な交流や大学生との交流を継続的に実施できるのは、ひとえにファンとして阿武町を支えて下さいます山口大学のエクステンションセンターの辰己先生、学生支援センターの辻先生のご尽力があつてこそであります。ここで交わされる様々なご意見は、この町に住む我々では気がつかない大変示唆に富んだものも数多くあります。行政としてこれらの貴重なご意見を、より良いまちづくりに反映できるように努めて参りたいと考えています。



中村 秀明 (なかむら ひであき)

阿武町 町長

出身：山口県阿武町、昭和 28 年 3 月生まれ

昭和 46 年 5 月阿武町役場に奉職、阿武町役場企画課長、総務課長を経て平成 17 年 5 月より現職。道の駅阿武町駅長などを務める。

## 阿武町の紹介

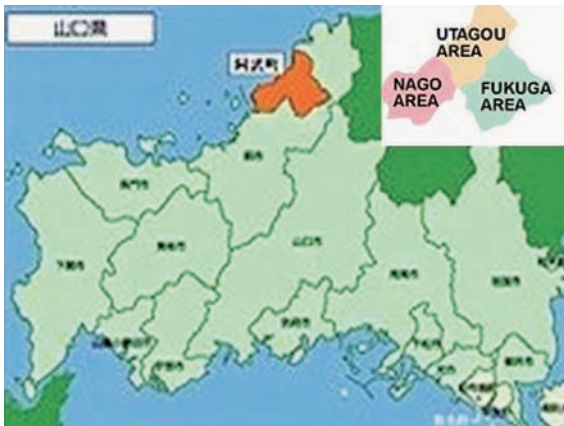
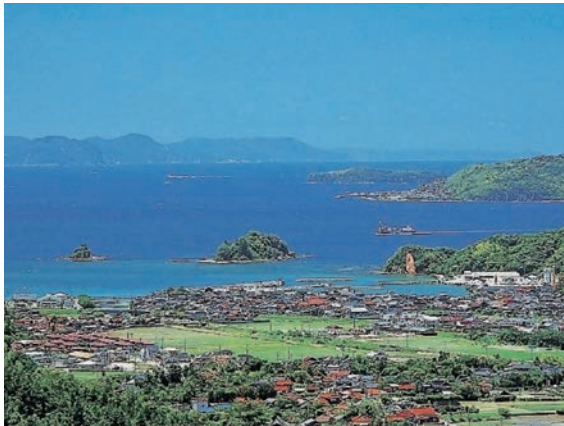
～ホッとするね 阿武町～

小田 慎也  
Oda, Shinya

(阿武町役場 経済課)

### 1. 阿武町の概要

阿武町は山口県の北部に位置し、萩市に囲まれた小さな町です。昭和 30 年に奈古町、福賀村、宇田郷村の 3 カ所が合併して誕生、平成の大合併の波に逆らい単独行政を貫き、町制施行から 50 年以上が経過しました。美しい日本海に面した奈古地区・宇田郷地区と標高約 400m の準高冷地に位置する福賀地区。1 地区それぞれの個性が重なり合い、ひとつの魅力的な町が形成されています。



### 2. 奈古地区

奈古地区は、役場や町民センター、道の駅のほか、スーパーやホームセンターなどが集まる、いわば阿武町の中心。しかし、1 歩裏路地に足を踏み入れると、風情のある造り酒屋や刃物鍛冶の店、白壁の家など昔ながらの町並みに出逢うことができます。また、美しい鳴き砂で名を馳せる清ヶ浜や、戦国大名尼子義久の墓所など、豊かな自然や歴史を体感することができます。



裏路地に 1 歩足を踏み入れば、風情ある、白壁の家並みに出会えます。



桜越しの阿武町道の駅

商業施設はなく、奈古地区と比べ不便さは否めません。が、岩肌が露出したままのトンネルやトトロが出てきそうなバス停、日本海の荒波や夜の漁火、趣のある棚田など、日本の原風景を楽しむことができます。

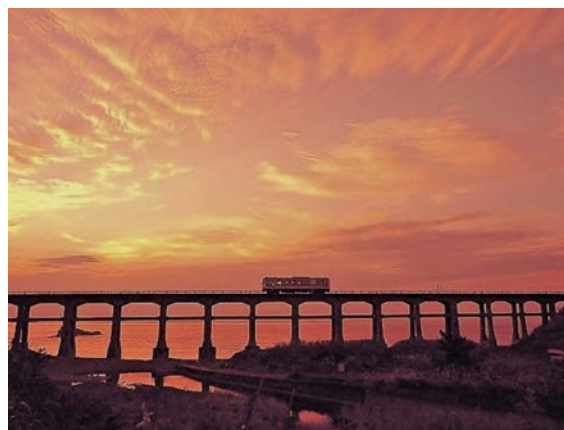


道の駅阿武町

「道の駅発祥の地」として知られており、物産直売所では新鮮な魚介類や農産物をお求めやすい値段で買うことができます。また、食堂や温水プールを併設しており、家族で楽しむことができます。

### 3. 宇田郷地区

宇田郷地区は、奈古から車で約 20 分走ったところにある、半農半漁を営む静かな漁村。大きな



JR 山陰本線の惣郷鉄橋は  
鉄道ファン格好のシャッターポイント



まるでトトロが出てきそうなバス停



神宮山は山口県 100 名山にも数えられる美しい山  
階段数 1467 は全国第 3 位

#### 4. 福賀地区

福賀地区は、奈古から車で約 30 分走ったところにある、小さな農山村です。しかし、農業法人による大規模な農地経営や、女性たちによる地域特産品の開発・販売など先進的な取組が多々行われており、町外からの視察が絶えません。

また、奈良東大寺の大仏建立の際に切り出された木の切り株と伝わる宇生賀の埋もれ木や、宮本武蔵との決闘で敗れた佐々木小次郎の墓などがあり、歴史ロマンを体感できる場所でもあります。



約 100 ヘクタールの広大な農地が広がる  
宇生賀盆地



水稻のほか

スイカ、ナシ、ハウレンソウなどの栽培が盛ん

#### 5. 阿武町のインフラ

阿武町の下水道普及率は 9 割を超え、全戸にケーブルテレビ網が設置されるなどインフラ面での整備が進んでいます。また、町内には 43 の自治会があり、高齢者単身世帯の見守り活動や自治防災活動など、住民互助が浸透しています。



無角和牛

阿武町で飼育されている無角和牛は、脂が少なくヘルシーで、さっぱりした味わいが特徴。200 頭を切った稀少な品種で、毎月 2~3 頭しか出荷されません。

#### 6. 元気！あぶ町！5001 プラン

阿武町の人口は 4000 人を切り、高齢化率は 40%を超えるなど、高齢化・過疎化の波は確実に押し寄せています。そこで町では町制施行 50 周年を迎えた平成 17 年に「元気！あぶ町！5001 プラン」を制定しました。これは、当時の人口約 4000 人を維持し、更に 1000 人のサポート町民を作ることが目的としたものです。また、“5001”の“1”には「私」そして「あなた」という意味があり、町を発展させる原動力は町民一人ひとりにかかっている、という思いが込められています。

サポート町民は、交流などの施策により阿武町を訪れる阿武町ファンや、「広報あぶ」「阿武町カレンダー」を有料で購読している町外在住者などを指します。サポート町民をいずれは定住人口へと繋げること、これが阿武町の戦略です。



## 7. 阿武町の取り組みについて

阿武町では、先進的な取組を他の自治体に先駆けて行っております。今回はその一部を紹介します。

### 7.1 体験交流の町、阿武町

そのひとつが体験交流の積極的な受け入れです。例えば、平成 19 年からスタートした JICA 研修では現在までに延べ 70 人以上を受け入れています。農業制度が未発達な国から来日する研修生が大半で、研修生が農業法人の経営形態など学ぶ一方で、研修生が語る阿武町の良さについて、そんな視点があったのか！と私たちが驚かされることも多々あります。

他にも、子ども農山漁村交流プロジェクトや企業研修など様々な体験交流を受け入れています。



JICA 研修の様子

「研修生を教えるだけでなく、研修生からも学ぼう」が阿武町スタイルです。

### 7.2 コンサートの町、阿武町

コンサートも頻繁に行われています。例えば、平成 17 年から毎年実施されているジャズコンサートがあげられます。

ルイス・ナッシュや日野皓正など、著名なミュージシャンによるジャズ演奏を、ここ阿武町で楽しむことができます。ジャズ好きな町民たちが熱心にラブコールを送り続けていることで、このコンサートが実現しているのです。

他にも、町民ホールでは定期的にコンサートが行われています。



富士通ジャズフェスティバルの様子

### 7.3 環境の町、阿武町

阿武町は環境に関する取り組みも盛んです。例えば、北長門海岸国定公園内にある清ヶ浜は踏みしめるとキュッキュッと鳴く、鳴き砂の浜として有名だったのですが、1980 年代後半から 1990 年代にかけて漂着する大量のゴミが浜を汚し、砂が鳴かなくなってしまいました。これに危機感を覚えた町民たちは、平成 15 年にボランティア団体「鳴き砂復活隊」を結成。毎月 1 回、最終日曜日に、自主的な清掃活動を行っています。

「鳴き砂復活隊」はメンバーが固定されておらず、集まった人が隊員という参加自由の組織です。「海は誰のものでもない」をモットーに、毎回 20 人程度が活動に参加しています。その成果が現れて少しずつ砂が鳴くようになってきました。行政としても機械の導入による活動支援を行い、町と町民の協働事業として進めています。

他にも、森林間伐の際に出された木くずなどをチップ化して燃料とするバイオマスチップボイラーを設置し、道の駅温水プールの熱源として利



鳴き砂復活隊の活動風景

学校の授業の一環として、企業の環境活動の一環として、ときにはサークル活動の一環として、様々な人々が参加しています。

選んでいただくか。そのひとつの方法としてあげられるのが、平成 18 年にスタートした「空き家バンク」制度です。町民から提供された空き家情報をインターネットで公開し、移住希望者とのマッチングを行うこの制度。UJI ターン者からなる定住アドバイザーの熱心なサポートもあり、5年間で約 100 人の定住を実現しています。また、都市部との交流を進めるために平成 18 年から始めた「田舎暮らし体験ツアー」では農家民宿や漁家民宿で移住経験者との交流や阿武町での生活を体験でき、定住促進に一役買っています。



毎年開催される田舎暮らし体験ツアーの様子。バーチャルとリアルの両面から定住促進を行っています。

用するなど、環境に関する取組を積極的に行っております。

#### 7.4 定住の町、阿武町

田舎暮らしにあこがれる方は年々増えています。数ある田舎の中で、どのようにして阿武町を

#### 8. おわりに

阿武町ではこれらの取組以外にも、様々な取組を行っております。阿武町のホームページ (<http://www.town.abu.lg.jp/>) にて随時、情報を発信しておりますのでぜひご覧ください。



#### 小田 慎也 (おだ しんや)

阿武町役場 経済課

出身：奈良県生駒市、昭和 56 年 9 月生まれ

大学卒業後、コンピュータ関係の仕事に従事していたが、自然と共に過ごす暮らしに憧れ、両親の出身地である阿武町の役場職員に転職。現在、田舎体験交流（グリーンツーリズム）を担当している。猟友会にも所属し箱罾でイノシシを狙うが、未だに成果は無い。



## 笑顔いっぱい 幸福の“もと”を考える国際セミナー

～ “むら”の幸せってなんかねえ～

### <開会挨拶>

阿武町 町長  
中村 秀明

### <話題提供者>

- 多文化サークル事務局 局長  
①笑顔で暮らせる豊かな農村をめざして 山田 禎夫
- JICA タンザニア事務所 次長  
②甲良町でグローバルな絆が生まれた瞬間(とき) 木全 洋一郎
- 多文化サークル コーディネーター  
③すてきに多文化 私の伝え Thaiこと タッサニーヤーサエリー

### <コメンテーター>

山口大学 特別顧問  
畠中 篤

### <司会進行>

山口大学 エクステンションセンター 准教授  
辰己 佳寿子

### 1. 開催概要

「むら」にこそ、「自然との共生や食の原点、人と人の絆などの生きる本質があるにもかかわらず、今、過疎化・少子高齢化で存続が危うい状態です。この問題は日本だけでなくアジア全体の問題になりつつあります。「むら」で豊かに生きることはどうということなのか、「むら」のしあわせとはなんでしょう。

このような問題意識のもと、阿武町にて、『むら』の幸せってなんかねえ? シリーズ、第1弾、第2弾と称して、2011年8月、ブータン、ミャンマー、ラオス、バングラデシュ、高知県や京都府の方々と国際会議、2012年4月には、ネパールの方々と国際セミナーを開催してきました。

第3弾は、タイをイメージしながら、幸福の“もと”をみなさんで考えたいと思います。「もと」に

は、「素」「基」「元」…などがあります。私たちが笑顔でいられるのはどうしてなのでしょう。今一度、原点に立ち返って一緒に考えてみませんか。

このたびは、合併に至らなかった甲良町(滋賀県)で役場職員として20年以上、まちづくりにかかわってきた山田禎夫さんをお招きして話題提供をしてもらいます。山田さんは、住民主体で人権尊重のまちづくりを掲げた総合計画を推進し、JICAの研修を通してタイとのつながりをまちづくりのひとつの手段として組みこみ「多文化共生」という新たな課題に取り組んでいらっしゃいます。「自らの地域は自らの手で」という基本理念のもとに、これまでどのように画策してきたのか、どのような問題を乗り越えてきたのか、そして将来にむけてどんな取り組みをしているのかなど本音ベースで話していただきます。

また、JICA 研修を通して甲良町の方々の熱い思いに魅了された甲良町のサポート町民である JICA の木全洋一郎さんと甲良町のタイとの交流事業の懸け橋となったタッサニーヤーさんには、地域づくりで素朴に感じていることや熱い想いを語っていただきます。最後に、山口大学の畠中篤特別顧問（元 JICA 副理事長）から、場所や条件は異なっても共通するグローバルな絆がもたらすものについてコメントをいただきます。

<開催日時>

2012年5月31日（木曜日）10:00～12:00

<場所>

阿武町役場（山口県阿武郡阿武町奈古）

<プログラム>

1. 開会挨拶
2. 話題提供
3. コメンテーターによるコメント
4. ディスカッション

<主催>

山口大学エクステンションセンター

<後援>

阿武町

阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会

## 2. はじめに

辰己：みなさん、おはようございます。本日のセミナーの司会進行を務めさせていただきます。山口大学の辰己佳寿子と申します。どうぞよろしく願いいたします。思い起こせば、阿武町に初めて来たのは 2003 年。その時の自己紹介のことを思い出します。「山口大学の辰己佳寿子」と言って、阿武町のみなさんからブーイングを受けました。「おまえは何者なんだ」と。「山口大学なんて、所詮、所属先であって、本人を語っていない。俺たちは辰己佳寿子が知りたいんだ」と言われました。このとき、阿武町の方々は、ただ者ではないと思いました。あれから、早いもので 10 年にもなります。阿武町は、なにか違う、と思い、惚れぬいてきて、今日にいたっております。

さて、今日のセミナーは、「むらの幸せってなんかねえ〜」というシリーズの第 3 弾になります。今日のテーマは、「笑顔いっぱい幸福の“もと”を考える国際セミナー in 阿武町」です。「もと」というものを考えたときに、原点であったり、味の素だったり、だしの根本的なものであったり、な

にかルーツみたいなものをイメージすることはないでしょうか。ですから、我々が笑顔でいられる「もと」とは何なんだろうかを考えるセミナーでございます。予定としましては 2 時間です。お付き合いいただきたいと思います。

このセミナーを開催する発端は素朴な疑問です。笑顔でいられるのはなぜなのでしょう。やはり、人と人との関わりだと思います。当たり前のことなのですが、そのあたり前のことを、改めて問い直すことが今回の趣旨でございます。2011 年の 8 月に、阿武町に、ブータン、ミャンマー、ラオス、バングラデシュの方々が訪問し、阿武町福賀地区で「むらの幸せ」について考える国際会議を行いました。まさに、ブータンというのは、経済発展の指標とは異なる独自の幸福指標を出しているところですね。人々の満足度が基準と言うような指標です。さらに、2012 年 4 月 11 日には、ネパールの方々が阿武町を訪問しました。「途上国と呼ばれ、遅れていると言われるんだけど、俺たちもネパール人も幸せなんだよ」「俺たちの幸せも、阿武町の幸せも、まったく違うものじゃないよね」という議論がなされました。

そして、今日です。第 3 弾になりますけれども、今日は、タイからタッサニーヤーさんに来ていただきました。タッサニーヤーさんは滋賀県甲良町在住です。滋賀県甲良町は、平成の合併をしなかったところですよ。ですから、甲良町とは何か、甲良町のアイデンティティーとは何か、を考えながら、地域づくりをしていらっしゃる山田禎夫さんに来ていただきました。山田さんは、甲良町役場の職員でいらっしゃいますが、今日は役場職員というよりも、「山田禎夫」で、ここへ来て本音で話したいという気持ちから、NPO 多文化サークルの事務局長という肩書で来ていただいております。それから、私が阿武町と出会って衝撃を受けたのと同じように、甲良町と出会って衝撃を受けられた木全洋一郎さんという JICA 職員の方にも来ていただいております。木全さんも JICA の職員というよりも、「木全洋一郎」として、甲良町と長いお付き合いをしていらっしゃいます。山田さんと木全さんとの出会いが、タイをむすび、タイと甲良町の出会いの橋渡しをしたタッサニーヤーさん。3 人の熱い想いを語っていただきたいと思います。

3 人のお話の後に、阿武町、もしくは自分たちの幸せとは何かということの後半でディスカッ

ションをしていきたいと思います。それから、山口大学の畠中篤顧問にも来ていただきまして、大きな視野からコメントをいただきます。それからみなさんにひとつお願いがあります。紙を配りますので、ひととおりの話を聞いて感じたことをひと言で表現してください。そのあなたの言葉のもとに、自己紹介もしていただきたいと思います。

前置きが長くなりましたけれども、楽しく笑顔でみんなが歯を見せながら議論が出来るようなセミナーにしたいと思います。最初に、阿武町の中村秀明町長からご挨拶の言葉をいただきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



**中村：**みなさん、おはようございます。ご紹介いただきました、阿武町長の中村でございます。開会にあたりまして地元町長としてご挨拶を申し上げます。本日は、「笑顔いっぱい幸福のもとを考える国際セミナー第3弾」を阿武町で開催していただきますことを感謝申し上げます。また、遠いところご来町いただきました方には心からご歓迎申し上げます。

昨年は8月に阿武町の福賀地区で「むらの幸せってなんかねえ」というテーマの国際会議が開催されまして、私も出席し、コメントをしました。今日は奈古地区で開催ということです。笑顔がテーマということを辰己先生から言われましたが、タイは、まさに微笑み国というイメージをもっております。

今、むらの状況を考えたときに、阿武町だけではありませんが、本当に過疎化、そして少子高齢化が進んでいます。中山間地域を中心に、日本全国でほとんどの地方公共団体がそういった姿であろうと思います。東京に一極集中し、まだ元気が

あるのは地方の中心都市のみということで、ほとんどのところは大変厳しい状況にあります。

そうした中で、幸せを考えたとき、住んでいらっしゃる方々の「しあわせ度」を何で測るかということが重要になってきます。昨年、ブータンから国王ご夫妻が来日されまして、テレビで大きく報じられました。その直後のエピソードをお話しましょう。この阿武町というところは人口的にも小さい町です。山口県でも瀬戸内側と日本海側両方あり、北と南ではかなり距離がありますので、阿武町を知らない人も多いのです。ある時、町外の方から「阿武町ってどんなところ？」と聞かれたそうです。阿武町にお住まいのある方は「国で言えばブータンみたいなおとこ」と答えたいのです。非常にうまい例えだと思えます。やはり、最終的にはここに住んでいる方が、日常生活のなかで幸せを噛みしめていただくことが大事だろうと思います。平和な時間が流れていくなかで、そういったことが忘れがちになってしまうとは思いますが、やはりそこで生活ができていくということを考えたときに、行政ができることは、やるべきことはしなければならぬと思っております。

私はいつも自助、共助と言っていますが、まずできることは、住民の方々が自らしなくては行けない。そして個人でできないことはお互いが助け合ってすることが大事です。これこそが共助でございます。ひとつのコミュニティの基礎を自治会というふうに私はいつも言っておりますが、そこで皆が助け合う。共助でできないことは、公が担うということだろうと思っております。しかし、その幸せ度や満足度を指数で表すというのはなかなか難しいわけですが、今、むらを取り巻く状況は本当に厳しく、人口の減少、そして少子高齢化という問題が現実にあるわけでございます。

滋賀県甲良町のたいへんよくできた基本計画のダイジェスト版を見させていただきました。人口が減ってきているということは、共通事項ではありますが、高齢化率が26%というのは、まだまだ恵まれているというふうに思いました。阿武町の高齢化率は44%です。平成22年の国勢調査では、4104人の人口が、今、3743人になりました。減少率が8.7%、人数でいいますと358人の減少。山口県では、減少率が3番目に高く、高齢化率も同じく山口県で3番目に高いということです。そして面積は116km<sup>2</sup>と、そこそこあります

から、地図上ではかなり存在感はありますけれども、人口密度で見たときは 34 人/km<sup>2</sup> ということで、山口県では一番低い人口密度となります。そうなりますと、行政効率がどうしても悪くなってしまふというのは否めない事実ではございます。そうした中で、100 年後はどうなるかわかりませんが、ある程度、長期的な視点に立った地域づくりをしていくことが重要であると思っています。そういう意味では、今日の国際セミナーを阿武町で開いていただくわけですから、しっかり勉強させていただきたいと思っておりますし、やはりこれから互いが知恵を出し合う時代であろうと思っております。本日のこのセミナーを契機に、これからもご指導ご鞭撻をお願いしたいと思えます。歓迎の挨拶を兼ねての言葉とさせていただきますと思えます。どうぞ、よろしく願いいたします。

**辰己:** 中村町長、どうもありがとうございました。「阿武町ってどんなところ？」と聞かれたときに「ブータンみたいなところ」という表現は本当にすごいなあという風に思いました。中村町長が言われたように「過疎化」とか、この「化ける」というのが実は一番問題になっていて、かつてむらの幸せというのは近代化とか産業化とか都市化とかそういうことを言っていたんですね。でも今となっては、過疎化、高齢化、少子化という「化」が不幸の象徴みたいになっています。私たちは変わり続ける存在なので「化」はあたり前の現象なのですが、問題なのは、そのスピードがあまりにも速いことなのです。

今、私たちは足元を見直して、どう生きればいいのかというのが問われていると思えます。そのヒントを見つけ出せないでしょうか。公助、共助という町内の助け合いもありますけれども、今日は町外の人との交流で我々が何かが得られたらよいと思えます。それでは、山田さんから、笑顔で暮らせる豊かな農村を目指して「思いはいつも 100 年の計」というタイトルで、報告をいただきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

### 3. 話題提供—滋賀県甲良町からの報告—

#### 3.1 笑顔で暮らせる豊かな農村をめざして

～思いはいつも 100 年の計～

**山田:** それでは、改めましてこんにちは。任意団体多文化サークル事務局長の山田禎夫と申します。

勤務先は甲良町の役場で企画監理課というところに勤めております。今回、阿武町に来るにあたっては、辰己先生にいろんな資料を送っていただき、拝見させていただきました。最初に町長さんの子どもたちと一緒に写っている写真を見て、なんて笑顔が素敵な町長さんなんだろうと思いました。今ご挨拶をおうかがいしていたら、非常に町のことを分析されていて、素晴らしいリーダーシップを発揮されているんだろうなと思いました。

阿武町に来て感動いたしました。以前から存じ上げていましたが、阿武町は道の駅発祥の地だったんですね。甲良町にも実はつい最近、滋賀県下 16 番目の道の駅ができました。阿武町の道の駅で感動したのは、蒸気船まんじゅう！です。思わず買ってしまいました。もうご存知ですよね。とてもおいしかったです。甘さも程よく、もっちりとしていました。

さて、ここで問題です。この蒸気船まんじゅうは何年前からやっておられるでしょうか？ 1 番 50 年前、2 番 100 年前、3 番 150 年前。1 番の方、手を挙げてください、2 番…、3 番…さすが阿武町さんですね、そうなんです、正解は 2 番です、100 年前。なぜかという、まんじゅうを焼いていらっしゃる八代のおばあちゃんに聞いたんです。おばあちゃんが、「私の知りあいで 103 歳の方がいて、小さいころ食べてたと言ってたから、100 年前にはあったんじゃないかなあ」とおっしゃってたんですよ。素敵なおばあちゃんだなあと思いました。このおばあちゃんと蒸気まんじゅうで非常に元気になりました。



パリッとおいしい蒸気船まんじゅうを焼く  
八代さん（阿武町道の駅）

次に、電車です。これも、尾無漁港を見下ろす駐車場で見ました。電車はめったに通らないからラッキーじゃないと見れない、と辰己先生がおっしゃっていたので、どうかなと思いつつ、記念写真を撮っていたら、なんと電車が通過したのです。「ああ、電車！」といきなりシャッターを押しました。阿武町に来てラッキーな瞬間でした。

白菜畑もありました。阿武町は海も山もあるんですよ。ここでまた感動したのは、防風林があって、風除けをするんですけども、やはり野菜にとって太陽の光というのは大事じゃないですか。太陽の光にちゃんと邪魔にならない方で木が植わってる、という説明を受けたときに、やっぱり百姓の知恵はすごいと改めて思いました。

それでは、甲良町の説明に入ります。甲良町のまちづくりって、10年、20年のスパンでやってきたのではなくて、それこそ1000年、あるいは400年とか、昔からの潜在的な力を最近の20数年くらいのまちづくりでもう一度回復させたのかなと思っています。キーワードは、惣村、水社会、五人組、隣組などで、昔ながらのものです。それらに、新しい要素として、自分たちで立ちあがろうとか、解き放そうとか、民主的に物事を進めていこうということが、この20年間のまちづくりで加わって、もともとあった協力し合う力を回復させたのではないかなと思っています。

甲良町の歴史というのは水と米作りの歴史、それから被差別の歴史。部落問題をご存知でしょうか。甲良町には、人口の44%くらいがいわゆる部

落問題によって差別されていた地域があって、人口率では非常に高いところなんです。そういう土地柄ですから、非常に差別に対して先駆的に取り組む動きが住民運動としてあるわけです。この住民運動を受けて行政を変えなければいけない。

例えば、行政を動かすための議員さんや職員さんを輩出する仕組みをつくることに力を入れたことがあげられます。ですから、特徴は、水と米作りの歴史と被差別の歴史かなと思います。

阿武町と甲良町の接点がもうひとつございました。パンフレットを見ていただきますと、尼子義久のお墓があるんです。甲良町は尼子一族のルーツとなる佐々木道誉が過ごしたところです。甲良町の13集落の中にも尼子という集落があるんです。甲良町の尼子という集落には、島根県の広瀬町（合併により現安来市）と交流があったりして阿武町ともこういった先人の中で繋がっているんだなと思っています。

甲良町からは琵琶湖が見えます。ほとんど平地にありまして、甲良町はこのようなところにあります。10万人の彦根市、豊郷町、愛荘町、多賀町の1市3町に囲まれております。愛荘町を除く、1市3町で平成の合併の議論をしていたんです。先ほど辰己先生は合併をしなかった町とおっしゃいましたが、実は「合併ができなかった町」なんです。町としては合併しようとしていたんですが、諸般の事情で、合併ができなかった町なんです。今どうしているかというと、1市4町で彦根市を中心にしながらか域連携で定住自立圏の取り組みを行っています。この取り組みで、何が一番良いかということ、僕が役場に入ったころは、まさしくこの1市4町の中で各担当者の連携がありました。ところが最近では連携がなくなってきたんです。ほとんどそれぞれの自治体でやってしまっただけで情報交換がなくなってきました。ところが定住自立圏の中で、各担当者レベルで、1市4町の担当者が一心に各テーマに基づいて議論ができるようになりました。連携できるようになって、絆、つながりがまた戻ってきたような感じなんです。これは定住自立圏の非常に良いところだと思います。

航空写真を見ると、北側に犬上川というのが流れていて、赤くちょっと塗ってあるのが集落です。甲良町は13の集落から成り立っています。35戸が一番小さくて、一番大きな集落は600戸、あと200戸とか50戸です。こういった集落が13カ所





あり、甲良町の端から端まで車で 1~2 分もかからない、距離感が狭いのです。今から 50 年前の航空写真の集落の形をご覧いただきたいと思います。こちら側が上流ですが、扇の形になっているのが犬上川の扇状地でここから水路が生活用水として樹枝状にめぐっているんです。今は飲み水としては使っていませんけれども、その昔は飲み水でした。昔といっても、たかが 40 年前くらいです。その樹枝状の水路上に家が建っているのです。このように扇の形になっています。これらは 50 年前の写真と今の写真です。甲良町はほとんど昔の土地利用と変わっていないんです。この形は、何百年も前からこういう形なので、水と地域の暮らし、水と米作りの暮らしというのが、今も航空写真、地図を見ても昔の形が残っています。青い線が見えますが、これ全部水路網図です。犬上川から水を引き入れた農業用水が集落の中に流れていってその周囲の田んぼに水が流れていく、という水の流れなんです。このように、水路は生活用水として使っています。

甲良町では、僕が 26 歳の時、大きな転機がありました。「山本日出男氏、最年少町長」「甲良町長選、大差で 2 氏破る」「混乱続く、行政危機か」というような甲良町をまさしく 2 分するような町長選挙というのが昭和 60 年、僕が 26 歳ぐらいのときに行われました。やっぱり若い時っていうのは何か一方的な力みたいなものに対して反発するというような、若気の至りみたいなところがあって、僕としては関心の高かった選挙でした。端的

に言えば、よっしゃ、わしにまかしとけというような地域ボス的な方と、閉鎖的な役場運営というのがあり、住民代表の町長を誕生させようという動きがありました。どっちが良い悪いは別問題ですが、いずれにしても住民が「甲良町！これでいいのか？」という雰囲気があって、若いながらにドキドキした選挙でした。結果、住民参加、住民主体、ガラス張りの町政運営をしようということで山本町長が当選されて、5 期 20 年勤められました。

住民主体とか、住民参加のまちづくりとよく耳にしますが、結果として思うのは、きれいな言葉を並べるのではなく、具体的にどうしたらそれができるのかを学んでいったプロセスが甲良町のまちづくりだったのではないかと思います。キーワードは「専門家」「大学の先生」です。それから、大学の先生に導きだしていただいた「暮らしの知恵」「集まり」「再発見」「誰がやるの？という主体性」「住民参加を進めていくための組織やひとづくり」に取り組んできました。甲良町のまちづくりの展開過程で、大きな転換点となったのは町長選だけでなく、そのころ、本格的に進みかけていた圃場整備事業に対する保全と開発との葛藤もその 1 つでした。

1981 年頃でした。圃場整備事業が県の方で計画が決まっていたのですが、先ほどお見せした昔ながらの水路というのがすべて地下パイプラインで田んぼにだけ水が行けばいいというような計画で



手作り水車が水路を演出する

した。この事業でガラッと町の様子が変わることに対して住民から「このまま進めると、今まで流れていた集落内に水が流れなくなってしまうぞ」「本当にこれでいいのか」という声があがったわけです。圃場整備事業も灌漑排水事業も県営ですから県庁のほうで計画はできていたんですけども、1年間、事業実施を遅らせて環境調査をやるんじゃないかということで、計画の一部見直しを行いました。

町民の声があったといいますと、大勢の町民がそう思っていたのかなと思われがちですが、そうではないです。そういったことに問題意識のある一部の方がそういう声をあげたんです。僕は、住民参加・住民主体のまちづくりといわれますが、100人いて、100人の人が同じ考えを持ってガンガンやっていくということはありません。時々、「ガンガン引っ張ってる甲良町はすごいですねえ」と言われますが違うのです。実際、2・3人のリーダーが引っ張っているのです。重要なのは、その3人がどうなのかということです。3人の人が3人だけだったら町全体には広がらないけど、その3人の人がいろんなところで地域の方々と繋がっているからみんな協力し合っていくんです。

この時のキーパーソンとしては、当時の滋賀県の耕地課長さんだっただと思います。甲良町みたいな小さな面積で公共の事業といってもたかがしれていますから、一度計画したらやろうと言って流れてしまうのですが、「計画をもう1回考え直しましょう」と言ってくださったのです。なぜ、当時の県の耕地課長さんがそういう話になったかというと、県も農業農村整備ずっとやってきて便利になりました。蛇口をひねるように水を出したら、水がたくさん出て大きな農地ができました。そこにできた大きな排水路にたまるゴミは誰が掃除するのかという問題が浮上しました。昔は小さなところを皆で共同で掃除していたのが、だんだんできなくなっていく。組織的にもできなくなっていくし、物理的にもできなくなっていく。大きなところは人力ではできない。後から、耕地課長さんは、「果たして滋賀県がやっている農業農村整備事業は本当にこれでいいのか、と立ち止まる時期となった」とおっしゃっていました。

そういったなかで、変化は農水省の「農業水利施設高度事業」にありました。この農水省の事業は、3面張りのコンクリートの水路だけではなく、

そこで憩えるような、親水的な、水と親しめるような空間に対しての事業をつくっていきこうというものでしたが、甲良町は花いっぱい運動とか、集落の川づくりなど、13集落の取り組みを進めていきました。今は環境問題とか景観保護に補助金が出ていますよね。あるいは生態系に配慮するとか、土地改良法という法律を改正してまで取り組むことになっていますよね。住民参加も当然のルールとなっています。しかし、当時はそんなルールなかった時代なんですけど、この水環境事業は画期的でした。

実は、この事業が、甲良町と大学の専門家の先生を結び付けたのです。この事業を進めるために国は委員会を持っているわけですね。委員会の大学の先生が甲良町に来られて、それ以来、お付き合いがあります。最初に何をやったかという、やはり、先生からのお話でした。何をやっていいのか分かりませんでしたから、学ぶということから始めたのです。これは20年前の講演会の写真ですが、町長、総務課長、課長補佐も一緒に座って聞いています。住民参加や住民主体というスローガンを掲げたときに、住民は誰を見ているかというこの人たちなのですね。「ああ言ってるけど町長は本当にやるのかなあ」と。町長は住民と一緒に学習するんです。挨拶だけで終わるのではなく一緒に学ぶ。甲良町みたいなところでは、昔は町長は挨拶が終わったら、ちょっと公務があるから「さようなら」といって帰られていました。住民の方はちゃんと見てますよ。職員は出ないといけないじゃないですか、好む好まず、出ないといけない。これはとても大事な話なんです。出たときに、「お、これは俺にとっていいな」と思うきっかけなんですよ。このときに僕は、住民の方々と一緒にテーブルで一緒に学習する、学ぶことの大切さというのを学ばせていただきました。

大学の先生に導いていただいたのは、公民館で話を聞くだけではなくて、集落に出かけて行って、一緒に集落の点検をしましょうということでした。阿武町でもやってらっしゃると思いますけれど、行政と住民が大学の先生と一緒に点検をしていこうという取り組みを行ってきました。20年経った結果だからそういうふう話しているんであって、当時は、何やっていいかわかんないから、とりあえず先生が言うことをやろうと、何も考えずにただ単に参加をしていたというのが

実際です。

また、これからは地方の時代だということで、1989年（平成元年）から「ふるさと創生事業」がありました。甲良町は13しか集落がないということで、ふるさと創生事業で100万円ずつ交付をし、金額は少し転じましたけれども、今も大体60万円交付をし続けております。それはやっぱり、集落の方たちがいろんなことを自分たちで取り組もうとした時、そのきっかけ、あるいは財源として、長期に続けていったというようなことが良かったと思っております。むらづくり委員会という組織を設置しました。むらづくり委員会は、自分たちの集落をどのようにしようかというような計画作りなんかもやっていたいただきました。これは、ある1つの集落の委員会の実行推進部会ということです。むらづくり委員会のポイントは、具体的な活動が部会名で分かるようにしてある実践組織ということです。さらに、「せせらぎ夢現塾」では、むらづくりの委員会のリーダーを養成しています。これも大学の先生に10年間ぐらい継続的に来ていただいて膝を突き合わせながら学習会活動をやってきました。

甲良町の住民参加は、何を切り口に実施したかという点、公共事業なのです。公共事業といっても大きなものではなくて、集落の中の水路であったり、広場であったり、道路であったりと、実際に集落の方々が日常にお使いになる生活の空間を、行政が計画するのではなくて集落の方に絵を描いてもらって、その絵を実現するために公共事業を進めていったのです。そういうプロセスがあるんです。そのプロセスの中に大学の先生方に入っていただいて、いろんな学習を進めていき



ハレの日の水路はイベントを演出する

ました。僕がいいなと思っているのは、こういった取り組みの過程で、これに関わった職員が、集落のリーダーと一緒に苦労してきた経験だと思います。この間も住民に聞いたら、「最近、甲良の役場も若い職員ばかりになって、つらい。話しぶり、顔がわからんから行きにくい。山田君が企画監理課に帰ってきてくれてほっとした」と言われました。リップサービスも多分にありますが、でもそういうふうに言われると嬉しいものです。

合併をされた地域の方に「合併してどうですか？」と言ったら、「あんまりええことないわあ」というふうに言われました。そのなかで印象的だったのは「今、支所行っても、知ってる顔が誰もいいひん」という言葉です。そんなことを考えたときに、今は若い職員、30代の職員たちが行く機会がないんです。昔は一緒に転作確認行ったりとか、一緒に何かしたりとか、行きたくなくても行かなければいけなかったんですね。行った後は、そこで、懇談会（飲みニュケーション）です。そんな中で、町民と職員の信頼関係ができていきました。

20年くらい前のお話です。行政と集落が共同でパートナーシップといったときに、担当者はどのようにするか。どのように考えるのでしょうか。たとえば、僕の考え方は、甲良町役場と尼子という集落との共同ではなくて、尼子むらづくり委員長の北川勝さんのために僕はこれをやるんです、というものです。北川勝さんは、「こういうところが困っているんだ」と具体的な話をされます。僕は具体的な話を北川勝さんに返して「じゃあこういう制度でこういうふうにいきましょう」というんです。そういうふうには人の顔が見える取り組みというのが、結果的には行政と集落が共同になってやっていくことなんじゃないかなと思います。

住民・行政・専門家の3者の中で地域を良くしよう、学んでいこう、学ぶだけではなく、それぞれの集落の具体的な取り組みに循環していることが大事です。たとえば、花いっぱい運動でも、玄関のところに飾るとか、少ない花でもここに飾ったら効果的だねとか、専門的な大学の先生のアドバイスがあると、なるほどそうか、とってすぐやってしまうんです。そういった地域環境整備の実践と学習というのがうまい具合に循環していったというのが甲良町にとって良かったんだと思



ます。

集落計画は、集落の自治が基本になっていますので、10年間どの場所がどのくらいお金がかかって、いつぐらいからやるのかということが書かれているわけです。90戸の集落で事業総予算額が7,350万、そのうち地元の負担額が3,291万5,000円です。あとは補助金とかいろいろあると思うので。じゃあそれをどう捻出するかということで、貯金とかもあるんですが、足りない場合は、この事業をやるからということで、10年間毎月2,000円ずつ集めたりします。集落内でも見える形で。昔は、むらに住んでいる以上は長老から言われたらわからなくてもお金を払っていましたが、最近は納得しないとお金は払わないんです。むらのリーダーの方がむらを運営していくためには公開的な手続きをきちんとやっていかないとうまくいかないんです。だからこういった計画書がむらでつくられて、むらの中で考えられて実際にやられていっております。計画をつくる時に、行政の役割は、情報提供です。こういう補助制度があって、予算はこれくらい、町だったらこれくらいとか。

こういった取り組みをやっていくなかで元気づけていただいたのが、読売新聞の社説(平成7年)でした。「甲良町みたいところは、自助と連帯によって地域共同の課題を自主的に解決し、地方自治の原点ともいえる行動だ」と書かれていました。当時は、まだ日本でも地方分権の滑り出しの頃でしたから、「地方分権は、霞が関で盛んやけども大事なのは甲良町のように住民自らが行動を起こすことが、住みよいまちづくりにとって何よりも先決である」といったことや、大森彌先生(東京大学名誉教授、自治体行政学、地方自治論などが専門)が書かれたコラム(平成14年)には、「平成の大合併のときに町村合併、地域自治の充実を優先せよ」「合併はだめとか良いとかいうふうにはっていない。ただ、合併をすることによって小さな単位での自治というのが消えてしまうことはいかんだろう」「滋賀県甲良町は、3年後の合併を前に住民自治の基盤を固めておこうと、まちづくり条例を準備し、13集落に100万円を交付し『地域おこし』を奨励している」とありました。甲良町では、合併議論中にもかかわらず、まちづくり条例を準備したんです。なぜ条例を準備したかという、彦根市と合併して、それまで10数年間それぞれの集落が一生懸命頑張っていた取り組み

が消えてしまうのはまずいという危機感からです。合併協議の中で、いくら甲良町がこうやってますよ、と言ったところで何にもならない。だから、議会議決でまちづくり条例というものを制定して「甲良町はこうだ」といえば、甲良町のような小さな単位での自治というものを残していくことはできないだろうか。甲良町の取り組みの良いところは、新しい市において、住民自治の主流としてやっていけないだろうかという、生意気な考えのもと、まちづくり条例というものを制定いたしました。議会の方でもなぜ、2年しかないのにそういう条例をつくるんだという質問を受けたりして、結果的には、全員賛成ではなかったのですが、多数ということで、条例が制定されました。

最後のポイントです。競争から共生へ、幸せとかいう新しい指標…それらは、「日常的な共同」ともいえると思います。甲良町が20年間やってきたことというのは、これまで農村がやっていた共同生活で、協力をして集落の運営を維持していたんですけども、農業から農業以外の仕事に出ていったら、そういった共同活動というものがなくなっていくます。だからこそ、みんなで木を植えたりとか、みんなで道掃除をしたりとか、計画をしたりとか、そういった共同をまちづくり事業で取り組んできたのです。

JICAを通じて、基礎自治体開発計画策定能力プロジェクトを行っているタイの方々もお見えになりました。僕が企画担当者として、JICAの研究をただ単に受け入れているわけではありません。地域に対しても良いことがないとお互いがよくなると継続しないと思っていましたので、そういった仕掛けもやってまいりました。甲良町のまちづくり条例の中で、甲良町の大切なものとして、集落単位の自治の力があるんだ、2つ目は人権というものを大切にすんだ、それから甲良町のまちづくりというのは私たちの誇りなんだ、という宣言をしました。甲良町のまちづくり条例の特徴は第4条につきます。地域学習の原則。「町民および町は共に地域学習を重ねながらまちづくりに関する情報を共有活用し、地域学習の成果に基づきまちづくりの意思決定を行う」というものです。すなわち、行政だけが頭がよくなってもダメ、住民だけが頭良くなってもダメ、皆が頭がよくなっていくことが大事なんだということがこの20年間のまちづくりの中でわかって、原則の中に入れ

ました。それぞれの13集落において、1人暮らしのお年寄りは大丈夫なのかとか、子どもたちの教育はどうかとか、農業や伝統行事とか、いくら町役場が偉そうにいったところで、一番責任を担っているのは集落なんですね。その自治会に対して、どういうふうに自治会活動を支援していくのかという制度化を試みたのが、このまちづくり条例です。

外国の方がお見えになり、タイの研修生も受け入れました。お互いに受け入れたことによって、気付くことがたくさんありました。単なるレクチャーや演習だけではなく、交流会もやりました。北落では、タイの研修生を受け入れながら自らも交流したりしました。この後、お話のあるタッサニーヤーさんもこのプロジェクトをきっかけに、甲良町で国際交流企画委員として頑張ってくれることになりました。

最後になりますが、僕たちは、多文化サークルという団体を立ち上げました。単に外国の研修生を受け入れるだけではなくて、甲良町内にいる数は少ないが外国人の問題をどうするのかについて取り組んできました。この図は、重要度が縦軸で、横が満足度です。このなかで、国際交流や外国人との多文化共生というのは、満足度ではほとんどゼロに近くて、甲良町民はあんまり関心がないということです。だからといって、国際交流とか多文化共生というのが必要ないのかというところではありません。行政として予算を付けていかなければいけませんから、やはり優先順位の高いものはやっていかなければなりません。僕はこれを見たときに、この子（甲良町内のフィリピン人の子ども）のために、何ができるかを考えました。そのなかで、多文化サークルを立ち上げたのです。行政では絶対担えないところを、どういうふうに補完をしていくのかということの大切さを甲良町のまちづくりの中から学ばせていただきました。

ありがとうございました。

**辰己**：山田さん、貴重なお話しどうもありがとうございました。中村町長から一言コメントをいただきたいと思います。

**中村**：山田さん、どうも貴重なお話ありがとうございました。大変勉強になりました。私のひと言は「目的（目標）と手段（戦略）」です。私は、小さくても個性が光る自立したまちづくりということを町長就任以来ずっといってききました。目標、



基本方針を明確につくるだけでは評論家で終わりますから、私どもは当事者として、目的、目標を達成するために、いかなる手段をとっていくか、いかなる戦略を進めていくかが大事になります。しかし、今、人口が3,700人ぐらいになりますと、いろいろなところで人口減少による弊害があります。そのひとつが人材不足です。

各種団体等を見てもみると、団体設立には必ず目的があります。その目的のために、どう取り組んでいくかが必要であります。ややもすると、本来の目的がぶれてくることがあります。手段のひとつを目的と取り違えることがあります。そのことをしっかりと考えていき、阿武町がひとつの団体として何をすべきかということを考えていくということが一番重要であり、また基本だろーと思っています。

甲良町100年の羅針盤というパンフレットを拝見し、さらに、今お話を聞きまして、やはり基本的な考えがしっかりされたうえで、こういった取り組みをなされているなど実感しました。今日のセミナーを契機に、ご指導なりをいただけたらと思います。改めまして、本当に貴重なお話ありがとうございました。

**辰己**：中村町長どうもありがとうございました。山田さんの話を踏まえて、次は、山田さんの取り組みに、ある時点で、よそ者として関わられてきた木全さんのお話をおうかがいしたいと思います。木全さんはJICAという国際協力をしている組織の一職員でいらっしゃるんですが、今日は、木全洋一郎個人としてお話をしてもらいます。先程から山田さんが、所属先ではなく「あなたのために、この人のために」といいわれてきましたので、そのスタンスでお願いいたします。

### 3.2 甲良町でグローバルな絆が生まれた瞬間

木全：みなさん、おはようございます。今ご紹介いただいた木全です。組織で紹介するなどと言われましたが、私が何者か、またなぜここへ来たかということを説明するためには組織で紹介せざるを得ないので少しお話いたします。JICA（国際協力機構）で、甲良町ともいろいろお付き合いをさせていただいており、当時の JICA 研修を担当者していたという経緯でここへ来ました。辰己さんと一緒に『国境を越えた地域づくり～グローバルの絆が生まれた瞬間（とき）～』という本を出版しました。甲良町と阿武町の事例が入っております。

今日は、国際協力、国際交流が地域づくりにどういったメリットがあるのか、目的・目標は地域づくりですけれども、その手段、戦略として国際協力などがどう位置づけられるのかといったヒントを「グローバルな絆が生まれた瞬間」というのが甲良町でどうだったのかということをお話したいと思います。

そもそも、なぜ、甲良町で国際協力なのかということですが、2002年から04年くらいまで甲良町が国際協力にかかわるようになり、私はその時にタイの事務所で勤務をしておりました。タイでは1999年から地方分権化が謳われるようになり、法律をつくらなければならない、国ではなく住民に近い自治体がニーズをくんで計画作りを行っていかなければならない、お金だけではなく環境や人の知恵を含めた地域資源をどう活用するか、といった課題がありました。そういった課題に対応するために、住民参加を促進するための方策、もしくは地域にあるいろいろな情報（数値的なデータだけでなく、人々が持っている知恵を含めて）をうまく使って開発計画を作っていくことを目指して、JICA の方でプロジェクトがつけられたわけです。

甲良町では集落点検をやっており、この手法は情報の宝庫をつくります。我々は、そういったプロセスに着目しました。また、「素敵に笑顔で暮らせる農村」というキャッチフレーズに基づいて計画立案を行うプロセスもすごいと思います。このような経験をタイの方々に学んでもらおうとタイの人々の研修を甲良町に引き受けてもらいました。

研修では、タイの人々が、甲良町の集落をまわって、付箋を地図の上にペタペタはって、集落点検をしました。研修員は、タイに戻って、自分の集



落で点検をしました。実際にそこから見えてくる地域の問題や今まで気づかなかった地域の可能性を皆で話し合いました。たとえば、昔は道にゴミが落ちていた、もしくは、電灯もないので暗くて危ない。もうちょっと安全かつ心地よく使えるような道路にするために彼らがやったことは、甲良町でいうところの「花いっぱい運動」でした。住民が自分たちで花を植え始めたのです。その結果、ほとんどゴミの落ちていないきれいな道路になりました。

山田さんには、研修を受け入れていただくと同時に専門家としてタイにも滞在してもらいました。甲良町とタイで、国内の研修と現地への専門家派遣のサイクルを回すことを通じて、タイの人々は、集落のためにどういった計画をつくっていけばいいのか、お金がない中で優先順位をどう付けていくのかなどを学ぶようになりました。

国際協力やタイでの地域づくりを考える上で、甲良町の経験はどう役に立ったのか。阿武町も JICA 研修を引き受けていらっしゃるのと同様のことがいえると思います。たとえば、地域では当たり前だと思っていることが、外国人の目から見ると地域資源になることもあります。また、山田さんは甲良町役場の職員ですが、大事にしているのは役場内の議論ではなく、むらづくり委員会という住民たちの議論です。タイでも「クム」という五人組みみたいなものがありまして、集落レベルで課題を見つけることが大事だということが見えてきました。つまり、役場の職員が役場で住民の人々を待っているのではなく、自分で出かけて行って話をする、朝の掃除を一緒にする。こうして継続的な関係を築いていくなかで、住民のニーズを把握していくことが大事だと思います。

これらを具体的にどうするか。住民だけではなく、自治体だけでもなく、それぞれがどう信頼関係をつくってそれぞれの役割を担っていったらいいのか。目に見える形で自分たちの課題、もしくは自分たちの可能性を見出した手段のひとつは集落点検です。

今、私はアフリカのタンザニアというところで事務所員として働いていますが、タンザニアでも住民が行政にあれをやってほしい、これをやってほしいとってきていて、自分たちがやることは忘れていたりします。こうして要求ばかりが山積みになっても予算がありませんので、計画してもぜんぜん進まないということになります。そうではなくて、本当に必要だったら、まずは自分たちで何かやってみることが大事ではないでしょうか。それを考えたうえで自治体とパートナーシップを組む、ということ住民の中でも自治体の中でもマインド・セットしていくことが重要であると思います。

ここまではタイで甲良町の経験が役に立っていることを申しましたが、次に甲良町にどのように刺激になったのかをお話したいと思います。甲良町の住民の方がおっしゃったことをいくつか紹介します。まず、甲良町の北落地区の元区長さんの「文化は伝えていくものじゃなくて、学習するものだ」という言葉です。国際協力をする前に、「そもそも甲良町がすごく理想的なことをやってきたか」というとそうではありません。実は閉鎖的で、外部への抵抗感が強かった。何よりも、高齢化が進んで自分たちのやりたい祭りができなくなってきたとき、ここに危機感を感じた、というのです。



ナミビアからの研修員に甲良町を紹介する山田さん

山田さんは地域学習が一番大事だと言われていましたが、そういう意味で、タイの研修員との共同学習が学習プロセスになったのではないかと思います。

阿武町もそうかもしれませんが、自分たち自身が他の先進地域の視察に行ったり、グリーンツーリズムやむらまち交流等で他の方を受け入れたりすることもあったと思います。その延長線上でいくと、JICA 研修で外国人が訪問することは特別ではないかもしれません。大事なことは自分が行く側であろうと来る側であろうと、相手からまちづくりのヒントを得ようとするのだと思います。相手が途上国から来たから、先進国のこちらが何か知識を提供しなければいけないということではなくて、相手がタイ人であろうとアフリカの人であろうと、彼らが持っているものを得ようとするのです。それが「文化は学習する」という意識に通じるのではないかと思います。

甲良町では、そういう意識で協力をしていただいたので、タイから研修員を受け入れた後は、グラウンドワーク甲良という NPO として、住民の方たちが自分たちで積立貯金をしてタイに来て下さりました。その時、「日本人は、何か突っ走ってきたのではないか、タイには我々が見失ったものがあるのではないか、タイを見ることによってもう一度原点に帰ろう」ということをおっしゃっていました。

具体的な事例をご紹介します。朝 8 時にゴミステーションでタイの研修員にゴミの分別を見せる機会がありました。燃えるゴミと燃えないゴミを分けるのですが、あるタイ人の研修員が、ゴミの山から筆箱を手にとって「これはゴミなんですか」「これ、もらってもいいですか」といいました。甲良町の方は「ものすごく恥ずかしかった。まちづくりの良いところを説明したつもりが、すぐ目の前にまだ使える筆箱がゴミになっていて、それがゴミになっていることに何の違和感も感じないでいたことを恥じています。研修員の些細な指摘によって実は見失っていたものがあるかもしれない。」と言われました。そういう気付きと刺激によって本来の地域づくり、もしくはそれによって人材自身も育成されるというような成果が見えてきたのではないかと思います。

このような交流を 3 年ほどさせていただき、JICA のプロジェクトは終わりました。そのあと

でも甲良町は交流を続け、自分たちでタイに行つて、2006年に交流協定を結びました。JICAは何もしていないのですが、協定を結びに行ったときに甲良町のある方は、「今自分がやっていることだけだったら思いでできます。それも大事なことなのですが、それを合意書という形にしたためて、良い意味で自身に負担をかけよう」と言われました。その負担にはもちろん反対意見もありました。集落に100万円ずつ交付金があるという話がありましたが、交付金を、公園を作るのと同じように、子どもたちに使えないか、子どもたちがタイに行つて交流できないかという意見が出ました。実際にタイに行かれたお母さんが「今できたことじゃなくて、これまで自分たちの子どもを地域でみるということがあったからできたのではないか」とおっしゃっていました。

最後に、国際協力それ自身は目的ではありません。阿武町もJICA研修を受け入れていただいています。JICAの私がいふこともなんですが「地域の国際化」は目的だとは思っていません。みなさんがむらづくりをやっていくときに力になれば国際化になればいい。むらづくりは、そこに住んでいらっしゃる外国人と調和的に進めていくことが大事で、国際化自体は目的じゃない。では、目的はなんですか。地域づくりをやっていくために自分たちで考えるということが必要ではないかと思ひます。それは、人材の育成であったり、子どもたちの新しい発見であったり、もしくはむらづくり委員会などの組織を結成する、といったことでしょうか。ひいては、地域をどうしていくかということを考えていくために総合計画のなかに国際協力を新しい形で落とし込まれれば、制度的にも反映するような形になっていくと思ひます。そういうことを考えていくきっかけ・手段として国際協力を使つていってもらえればと思ひます。国際協力ではなくて、あえて国際協働という言葉を使わせていただきました。どっちが上、どっちが下ではなく、進んでいる、遅れているかでもなく、切磋琢磨して一緒になって考える。そして、新しい形、新しい価値を生み出していただけると、こういう仕事に携わっているものとしては非常に幸ひと思ひます。ありがとうございました。

辰己：どうもありがとうございました。今の山田さん、木全さん、それぞれ組織の役割も果たされ

ながら人間としての成長もされてきたのかなと思ひました。次は、タイ出身で現在は甲良町に住んでいらっしゃるタッサニーヤーさんのお話です。タッサニーヤーさんは、タイと日本を行き来しながら人生においてひとつひとつの選択をされてきました。波乱万丈な人生の裏にある思いを聞いてみたいと思ひます。

### 3.3 すてきに多文化 私の伝えThaiこと

タッサニーヤー：タイからまいりました、タッサニーヤーと申します。阿武町に来る前に、秋吉台の地獄台にも行ってきました。すごくびっくりしました。

今日は3つお話ししたいと思ひます。1つ目は阿武町の印象です。すごくきれいな海があつて、また海だけではなくて山もあつて、山のなかもすごく良い気候で気持ち良かったです。畑や田んぼもなんて素晴らしいところなんだろう、地獄だけではなく天国も、ここにはあるのではないかと感じました。道の駅にも行ってきました。阿武町は日本の道の駅の発祥の地ですから、日本で初めてなんです。それだけじゃなくて、世界で初めてなんです。今、タイでも道の駅が広まっています。このような取り組みを日本から発信していただいたこと、タイ人としても感謝しています。

2つ目、甲良町の素晴らしい点です。簡単に言うと、変わっている人がいるということです。変わっているという定義は何なのかというと、ひとつは、地域のことが大好きな人たち。地域のことだったら延々としゃべれるんですよ。一晩でも…。お酒を飲みながら、目をいきいきとさせて「これはこうなんですよ」としゃべれるんです。ふたつ目は、目標を持っている人たちです。これから、





学校で国際理解教育の講師を務める  
タッサニーヤーさん

大好きなまち、大好きなむらはどうしていけばいいかという目的をもっています。小さな目標もあるんです。こうすればいいなあ、ということも、いつも持っていて、しゃべっているんですね。3つ目は大好きな仲間がいるということです。仲間というのは、自分たちだけの仲間ではなくて、辰己先生みたいな外部の人でも仲間になっているんです。甲良町に入ったら絶対離れられない、もう一生の付き合いになってしまうんですよ。私も犠牲者(?)の1人です。みなさん、辰己先生のような素晴らしい人を放してはいけません。

次に話したいことは、甲良町に来て私がしてきたことについてです。甲良町に来る前はタイとの交流は実現しないと思っていたのですが、そうではありませんでした。まず、甲良町に来て、外国人は私ひとりではないということに気が付きました。遠いタイとの国際交流もよいのですが、なぜ身近な在住外国人と国際交流をやらないかという疑問が湧いてきました。大事なのは、自分の周りの人々と、どう結び付くかということなんです。私は、役場の住民課にいき「すみません、外国人が78人いると聞いたんですけども、住所や名前を教えてください」と尋ねました。「それは個人情報だ」ということでダメだったのです。「では、外国人がどの辺に住んでいるのかということだけでも教えていただけますか」と聞いて、その情報を得てアパートに行ってきました。そこでストーカーみたいにじっと待っていて、誰かが通ったら「すみません、外国人がいると聞いたんですけども、どの部屋ですか?」と聞いて、そ

れがわかったとたん「ピンポン」「私はこういう者です」と言いました。知らない人だからドアを開けてくれないと思ったんですよ。でもそれもあきらめず、「ピンポン」といろんな形でやっていくんです。人を探して、人が集まったらどんなことをするかということを考えるんですよ。たとえば、料理をしながら人が集まった時には、自分のストレス発散しようとして話しながら食べながら元気になることを考えていくんですね。

私は髪や目が黒くて外国人っぽくはないんですけども、外国人です。タイでも母国語は英語でなくタイ語ですけども、一応英語を勉強してきましたので英語ができます。英語という言語を、どういう気持ちで、何が困っているか知るためのコミュニケーション手段としてとらえて、英語教室を開きました。

私のまちづくりは、大きいことじゃなくて、簡単なことで、自分に何ができるかを知り、それを積極的にやること。誰も正しいか間違っているかは教えてくれません。そのときに、じーっと待つことよりも、自分が何かできたということが一番大事ではないかと思います。以上です、ありがとうございました。

**辰己:** ありがとうございます。実は昨日から、阿武町に来まして、昨夜白松さんの農家民宿「樵屋」に泊りました。山菜と初物のレタス、地酒をいただきました。そこで、タッサニーヤーさんは、地域大好きな仲間同士で語り合うという状況を目の当たりにされました。その光景はタッサニーヤーさんにとって初めての経験ではなくて、甲良町で経験されてきている。おそらく頑張っている地域ではそれをやっていると思うんですね。タイ



セミナー前夜、農家民「樵屋」にて

でもあると思うんですよ。そこに国境などはないのかなと思います。

以上、3人からのお話を受けて、山口大学の畠中顧問にコメントをいただきたいと思います。JICA 副理事長でいらっしゃったこともあり、世界を股にかけて活躍しておられます。よろしくお願ひします。

**畠中：**ご紹介に預かりました、畠中です。どういうコメントをしたらいいのかわかりませんが、今3人の方からまちづくり、まちづくりの報告を受けましたが、大変感銘を受けました。こういう素晴らしいことがあったのかと。先程、木全さんが紹介された、『国境をこえたまちづくり』、この本も読ませていただきました。甲良町のほかにもいくつかの町が、それぞれ、外国人の研修生を受け入れたり、いろいろなことをしたことによってまちづくりが進んだという事例が書いてあります。辰己先生から今日は本音で話す会議だということをおっしゃっていますので、少し長くなってしまうかもしれませんが、言いたいことを言わせていただきます。

冒頭に、山田さんがきれいな言葉を具体的にどうやって実現させるかが重要ということをおっしゃいました。その通りだと思います。正直言ひまして、成功例を語る時には、成功の秘訣みたいなものを拾って書いてありますから、読み手は感銘を受けますし、うまく書いてあるなあと思います。けれども、現実はそのように簡単ではなかった、いろいろ苦労があったのではないかなと思うのです。私みたいに人が悪いと、他人が「良い」と言うのとどっか悪くないかなと思う癖があって良くないんですけども…。

私は、JICA で4年間、副理事長をつとめ、その前に外務省で40年間仕事した中の半分は経済協力、日本のいわゆるODAに携わってきました。私は現場でまちづくりとかそういったものに取り組んだことはないんですけども、アフリカでもアジアでもいろんなところに行きました。そういうところを回りながら、この援助は本当に役に立つのだろうかと思ひながらやっていた部分もあります。ここに山口大学の学生さんが来ておられますけども、これから国際協力をやりたいと思われる方は是非頑張っしてほしいと思います。ただ、国際協力の現実には美しい話ばかりではなく、実は先進国の途上国に対する影響力をどうやって確保す

るかという競争みたいなどころもあるわけです。

日本はつい最近までODAの量でいうと10年間世界で1位の座にいました。日本は戦後の貧しいころから援助を始めましたが、世界で大変目立った時期があります。そういうときに何が起るかといいますと、欧米の援助先進国が、「日本の援助はおかしい」と言い始めます。例えば、日本の援助は日本のビジネスのためにやっているとか、日本の援助はインフラばかりを作っていると言われてきました。港をつくったり、橋をつくったり、鉄道をつくったり、病院をつくったりするんですけど、インフラ作りは途上国の役に立たない、いわゆるヒューマンベシックニーズ (BHN) という基本的な衛生とか教育とかそういうものにもっとお金を回すべきだ、日本の援助はおかしいと言われてきた時期があります。

いずれにしろ、開発の国際競争の中で、私もそうですけども、日本人は口下手で、日本が延々とやってきた援助の優れた点をうまく世界に発信できていない面があります。日本で開発を勉強する人たちは、イギリスのなんととかアメリカのなんととか世界銀行のなんととかという、開発理論を勉強すると思うのです。日本の援助は彼らから批判されてきましたけれども、また国内でも無駄遣いが多いと言われてきましたけど、実は世界でこれほど成功している援助はないのです。それはなぜかということ、理由は色々ありますが、全部言うとなかなか時間がかかるので1つだけ話します。欧米の援助は、植民地が独立した時の植民地経営の延長線上で考えられた援助だということです。例えば植民地経営をしていた人たちが専門家としてそこに就職して、英語を教えたりして給料をもらっているわけですが、その給料が、援助になるわけです。技術は教えるかもしれないけど、講義するだけです。ところが日本の専門家は何をするかといいますと、途上国の生徒と一緒に田植えをし、ダムをつくらせるといったら自ら長靴を履いて現場でちゃんと教えるわけです。一緒に苦労する。そして彼らの自助努力を促す。そうすると途上国側からの受け取り方がまったく違うわけです。先ほど住民参加と言う話が出ましたけれども、まさにこの蓄積が日本の援助だったんですね。これから開発理論を勉強される方は、欧米の大学者の理論を勉強されることもいいと思いますけれども、その際に、日本がどういう援助をしてきたか、そ

れが受け取り国からどんな評価をされてきたかを是非勉強して、日本に足場を持った開発の勉強を進めてほしいと思います。

今日は、タイからタッサニーヤーさんが来ておられますが、タイにとってどこからの援助が一番良かったかと聞くのは恥ずかしいので聞きませんけれども、日本もタイに対してずいぶん支援をしました。私ども日本はいろいろな国を支援してきましたけれども、もっともうまくいった援助の1つはタイだと思っています。要するに援助をもらった方の人たちがどういう気持ちで援助をもらうかというのがすごく大事です。先ほど少し出ましたけれども、開発理論のなかでは住民参加型の援助が良いんだとよく言います。私に言わせると、「住民参加」ではまだ不十分だと思います。誰かが何かするときに参加させてあげます、意見を聞いてあげますというのではまだ不十分だと思います。タイも日本も欧米に植民地経営をされたことがない。ずーっと自分の国を自分で築きあげてきた国なわけです。ですから、人から学びますけど、参加ということではなくて開発するときに自分のためにやるわけですね。オーナーシップと言いますけれども、開発のオーナーシップというのは、参加じゃなくてそれを超えて、ここの地域の開発は自分たちが担うんだという、そういう意識が重要なんです。外から来た人たちの意見は聞きし利用もさせてもらうけれども、必ずしもそのやり方をその通りやらない。もっとわかり易い話をしますと、私の友達でマラウイから来ていた大使が、日本に5年くらいいましたけど、帰る時に私のところに来て、自分は日本に来る時に日本のことをよく知らなかった、技術的に素晴らしい国だということを知っていたが、なぜ日本がこんなに発展したのかということを知らなかった、と言いました。そして5年して帰るにあたってそれがわかった、だから本を書いた、この本に書いたことを国に帰ったら小学校や中学校で教えるということです。

私たちが当たり前だと思っていることが実は彼らにとって当たり前ではないんですね。長い間の日本の文化であり歴史であり、我々の体内にしみついていることがあるんですね。それは何かといいますと、彼が言ったことは沢山ありますけれども2つほど申し上げますと、ひとつは日本の人は時間を守る。たとえば会合をするというと、日本では5分前には皆来ている。ところがマラウイで

会合をすると、偉い人は30分遅れてくると言うんですね。大統領であれば1時間か2時間遅れてくる。それが自分が偉いんだということを示すやり方なんだと。しかしそうすることによってどれだけの経済ロスがあるかということ、自分は日本に来て初めて分かったということです。それから、山手線の電車は3分おきに走っていますけれども、あんなことはマラウイでは考えられない。それが日本ではできる。もうひとつは、契約を守る、約束を守る、言ったことはやる。ところがアフリカでは、何かしてくれというと、「いいよいいよ」「やっとかやっとか」とその場限りの会話みたいなもので実際にはやらない。我々日本人にとっては、約束は守らなければいけない、時間も守らなければいけない、というのは当たり前ですが、これが日本の経済発展をもたらしたのだということを彼に言われて、そういう面もあるのかもしれないと妙に納得しました。欧米人の専門家からの指示待ちの態度では国は発展しないのです。

私は今日のひと言として、「幸運と頑固な人たち」と書きました。先ほど3人の方たちが甲良町の話を書きましたけれども、そのなかでも、いくつかきっかけになる出来事があって、町づくりが進んだと言われました。ではこういう幸運に恵まれないところは町づくりが難しいのかなあという感じを持ちました。ただ、もうひとつおっしゃったのは、3人一生懸命やる人がいて、その3人が説得してまわったと。3人の頑固な人たちの存在が重要だったのだと思います。先ほど紹介したマラウイの友人によれば「アフリカではあらゆる良いものがヨーロッパから来る。しかし、あらゆる悪いものもヨーロッパから来る。」と言うそうです。良いものも悪いものも全てヨーロッパの





せいにしてしまう。自国の開発にもオーナーシップがないから、欧米の専門家がいなくなれば、それまでやってきたことは跡形もなく消えてしまうと言う訳です。

そういうことを考えますと、むらづくりの基本は、幸運ではなく、やっぱりしつこくやるべきことをやらなきゃいけないんだと思う人たちが諦めずに、頑張らないとできない。いろんな大きな問題がたくさん出てきますからそれを解決するために、いろんな人とよく話をして、くじけずに頑張る人がいないとダメなのだと思います。もうひとつは、これが本当の住民参加というものでしょうけれども、その頑固な人たちが辛抱強く住民たちと話をして、信頼関係を得るということでしょうね。多数決ですぐやっても、そこに信頼関係がない場合には、やっぱり人に言われたからやるのと一緒にです。じっくりいろんな人間関係をつくって話をして、皆がこれをやるのが結局は自分たちの財産になるというか、自分たちが発展して前に進むんだという自覚を持つことがものすごく重要なんじゃないかと、先ほどから話をうかがって思いました。そういうことで、今日の私のひと言は、「幸運？頑固な人たち？」としました。

本来であれば、なんでむらづくり委員会というものがあるのかなあ、と思いました。だって、議会があって、そこに代表が行っているわけでしょう。でも、おそらくそこには信頼関係はないし、しがらみやいろんなものがあって、うまく住民の気持ちを吸い上げる機能が果たされていないのではないかと感じました。それで委員会を議会とは別につくられたんじゃないかと思えますけれども。とにかく必死になって頑張る人がいることと、その人たちと他の人たちとの信頼関係が大事なんじゃないかなあ、今日お話をうかがって思いました。

最後に、もうひとつ言いにくい話ですけども、今日は本音で話すということですから言いますと、これからの村づくり、町づくりは少子高齢化の問題にどう対処するかを考えておかなければならないのではないかとということです。少子高齢化というのは、10年20年すると、今まで担っていた人たちが必ずいなくなる。この問題は日本全体にとってもすごく大きな問題で、1つの村とか町だけでは解決できませんけれども、将来日本が少子高齢化と地方の開発というものをどういうふうにしていくかについて、やはり大きな政治レベルで

考えないと行けない問題だと思います。まあ、2、3年、元気で頑張りましたって言うのはいいのですが、次の世代にどうなるかということは、もう少しいろんな大きな仕掛けをしていかなければいけないのかなあと思いました。

#### 4. 参加者の「今日のひと言」

**辰己：**心に響くコメントをありがとうございました。みなさんも何か思いをお持ちだと思うんですけども、今日のひと言を、みなさま付箋に書いてみてください。そして、それぞれの考えを言葉にしてもらいましょう。では、よろしく願いいたします。

**河原：**阿武地域グリーンツーリズム協議会の事務局長の河原と申します。「動」という字を書きました。田んぼを開墾して柿の木を植えまして、柿8年といますし、私の年齢からしたら間に合うかわかりませんが、やはり成果をあげるためには努力が伴わないと結果は出てきません。今回3人のご意見をお聞きしましてリーダーシップをもって動ける人が数人でもいれば、そのまちが動くという気がいたしました。



**中野（貴）：**阿武町職員の中野と申します。「サグラダファミリア」と書かせていただきました。サグラダファミリアというのは、スペインの何百年にもわたって建設が進められている教会です。幸せのもとを考える国際セミナー。たとえば阿武町で誰が一番幸せなんだろう、平成24年度幸せ大賞決めるとしたら誰だろうと考えているのですが、この質問は、たぶん不毛で決めることはできないだろうなと思います。振り返った時に、多分、みんな幸せなんだろうなと思うからです。サグラダファミリアというのは何かといいますと、教会を作っているんですが、もう何百年もできてい

ないんです。そこに働きに行き、明日も働きに行くところがある。それを応援するためにお金を出す人がいる、それがいつか完成するだろうという夢がある。スペイン人にはそれがあるという誇りがある。そういったことを僕はいつも思うんです。阿武町で振り返ってみると、海があって山があって、お年寄りの方も毎日田んぼに行き、畑を耕したり私たち働く者の世代も、帰るところがあって、いろんな地域活動や地域に携わったりしながら、すごく幸せなんだろうなあと思うんです。この幸せということに気付くということが今必要だと思います。じゃあ、どうするかと考えたときに、加山雄三ではないですけど「阿武町に住んで幸せだなあ〜」と思えるような歌でもつくるかなあというふうに思いました。

**森：**貴重なお話をありがとうございました。山口県の JICA の窓口として国際協力推進員をしております、森友愛と申します。実はタイと同じ東南アジアのマレーシアに青年海外協力隊として派遣されておりました。マレーシアでは、どういった支援がその地域の役に立つのかを考える場面がありました。というのもマレーシアには、日本だけではなく、ヨーロッパの国々からもいろんな支援が入っていました。長続きする支援、途中で終わってしまう支援を見ながら、どんなものが一番よいのかなと考えたときに、国と国、団体と団体よりも、やっぱり人と人の支援が続いていくのだなと感じました。ですから、私は「人と人」と書きました。顔が見える、顔がわかる、その地域が何を求めているのか、自分たちは何がしたいのかを伝えていけるとよいなと思いました。是非、積極的に JICA デスクとしていろんなフィールドに入り、地域の人たちに関わることを続けていきたいなと思いました。

**菅田：**山口大学経済学部国際経済学科 4 年生の菅田奈緒美と申します。私は島根県の奥出雲町というところの出身です。本当に何にもないところです。私の良いところは健康なことだと思っています。小さいころから全然風邪をひくこともありませんでした。奥出雲町は、合併前は仁多町という地名でしたので、仁多牛や仁多米など奥出雲で育ったおいしいものを食べて、それから毎日 4 キロ歩いて山を越えて学校に行っていたから、丈夫に育ったのかなあと思います。ひと言は「話から輪へ、そして和へ」と書きました。こういう話し

合いの場でとても良い意見などがたくさん出るので、これが地域の輪に広がり、みんなで仲良く地域づくりができればいいなと思います。



**河野：**河野と申します。地域活性化プロデューサーの見習い中です。ひと言は、「人材」、「自ら考える力」そして「感動」です。これを書くとは行政的な感じですが行政マンでもあり、県の職員でございます。先週の土日、鹿児島県の地域づくりの講座に行きまいりました。私は実はその出身というか、卒塾生です。そこでは行政に頼らない地域づくりということをやっておられますが、常に感動、感謝です。地域リーダー育成ということですから「人材」ですね。まず、みんなとともに自ら考える、人に言われて動くのではなくて、“自ら”が大事だと思っています。昨日今日とこの近辺をまわっています。やっぱり机の上では感じられないことを自分がそこに行き、自分の目で聞く、感じる、それが大事だと思っています。地域に飛び出す公務員、河野です、よろしく願いいたします。

**藤村：**阿武町役場総務課で、仕事は主に定住促進ということで、町外から阿武町に来ていただく人のつなぎ合わせやお世話をしています。漢字 1 文字で「繫」という文字を書いたんですけども、表にはカタカナで「メンバーとサポーター」と書きました。今日のセミナーでは、みなさん、メンバーであり、一方で阿武町にとってはサポーターでいらっしゃると思います。移住という中で私は、阿武町のメンバーを増やす、メンバーの幸せを向上させるということが仕事と思ってやっています。この言葉はサッカーに置き換えると分かりやすいんですけども、サポーターがあって初め

てまちが強くなるというか、幸せになるのではないかと思います。今日たくさんの方のサポーターの方に来ていただいていますから、これからも阿武町を支えていただきたいと思います。

**斎藤**：阿武町教育委員会の斎藤といいます。私は「連一ネットワーク」と書きました。これは孫の名前で私が付けました。いろんなものと繋がって行ってほしい、いろんな個体が繋がるという意味で付けました。全てこれから始まるんじゃないかなという気がします。顔が広いとよく言われますが、顔が広くなるというのはすごく大事だと思います。私はなぜか縦に長くなってしまいましたが、常に繋がっているようなことが生まれるんじゃないかなと思います。先ほど山田さんが、尼子で旧広瀬町と交流があるというふうに言われました。うちには尼子義久公の墓があるんですが、なかなか交流ができていません。また詳しいことを教えていただければと思います。

**藤田**：4月から民生課になりました。「人と人ー共働・学習・人のペースー」と書きました。仕事だけでなく、他のことも、結局、人と人なのかなあと最近ずっと思っています。地元の人とも信頼関係がないとできないこともあるし、役所なので県とも仕事もしていますけども、県の人とも関係があると仕事もうまくいくことも多いなと思います。仕事以外でも、阿武町農村青年協議会の役員もしています。発足して30年経っているんですけどもなかなかうまくいかない部分もあるんですが、そういったなかで辰己さんとも知り合ったりして、いろんなことを一緒に学ばせていただきながら

やっています。結局、人と人の繋がりで、今の世の中になっていくのかなあとと思います。

**服部**：服部と申します。役場の民生課で仕事をしております。「つながる」と書かせていただきました。仕事が福祉とかで全然違う部署なのですが、今日ここに来たのは、たまたま、昨日、経済課長が「明日誰が来る？」と言われて参加しました。本当に縁というものは大事にしないといけないなと思いました。今日ここにきて、みんなここに来たらいいのかなあと思うほど、たいへん良いお話で、自分も元々そういうふうにつながることから始まると思っています。これも何かの縁です。辰己さんもよう知つとると言われますので、どんな方かなあと思いながら来ました。



**西村**：はじめまして、西村と申します。私は14年度にJICAの村落開発普及員として、パナマに行っておりました。今日はそのつながりで辰己先生に声をかけていただきました。貴重なお話どうもありがとうございました。自分が書いたのは「援助？」と書きました。国際協力やJICAのお話ですとか、自分が現地で活動していた時のことを思い出しました。援助という思いでパナマに行ったんですけども、実際そこに住んでしっかり根をおろしている人たちと、人として交流することができるようになって初めていろんなものが見えてきました。自分を受け入れてくれた人たちがあつての活動だったので、僕が逆に助けられたことの方がむしろ多かったです。また、日本を離れて外

から日本を見たときに、家族の結びつきの強さだとか、自分がもらったものの方が大きかったなあと思いました。それをバネに何かできることがあったらという思いが自分の中にも積み上がってきています。日本は今物質的にはすごく豊かになってきているんですけども、もう一度そういったものを見つめ直すという段階に来ていると思いました。

**國吉**：阿武町役場の住民課で働いております、國吉と申します。阿武町に来て1年になります。以前も白松さんのお宅の方でお話を聞かせていただいたり、今日もいろいろ刺激を与えていただきました。僕の頭は非常に硬いんですが、頭の中が非常に溶ける思いです。ですから「溶く、溶かす、溶ける」と書きました。役場職員の仕事として自分も何かしないとイケない。共同を進めていく上では、仕組みをつくっていく、人と人との間をうまく溶かしていくことが必要だと改めて思いました。自分もまだ阿武町に来て1年で、白松さんたちに教わりたこともいっぱいあるんですけども、そのためには、もっと自分が阿武町に溶け込んでいかないとかなと思っております。お祭りなどに参加させていただきたいなと思います。甲良町のむらづくり委員会などは知らなかったので教えていただきたいなと思います。



**小野（智）**：阿武町の職員をしております、小野といいます。辰己先生とは、何かの会の打ち上げのみ参加させていただいたのがきっかけで知り

合って、面白い方だなあと思いながら、隣が経済課なのでときどきなにかあると声をかけていただいています。私は「個」と書きました。時代の流れが早いと思うので、立ち止まるということも必要なと思ひまして、立ち止まるというのは何かといいますと、周りに流されない、自分の考えを人に言えるような、自分の思いがないと物事は進みませんので、「個」という漢字にさせていただきました。頑固の「固」とかいろいろありますけれども、やっぱりこだわりがあった方が良いのかなと思います。

**中野（克）**：住民課の中野と申します。私は農事組合法人「うもれ木の郷」の組合員でもあります。私は宇田郷支所に勤務していた頃は、よそ者ということもあり、なかなか地域に溶け込むというのは難しい部分もありました。皆さんと一緒に物事を進めるうえで、思いやりをお互いが持つことに努めてまいりました。阿武町では平成21年度自治会制度の話が進みましたが、その後は自治会長とも、お互い飲みながら、話ができるようになりました。地域がひとつにみんなと一緒にあって、地域の要望などの話をお互いしながら進めるためには、やはり人と人との思いやりが大事。そうすることで連携が取れていくとの思いで、「思いやり一人の顔の見える取組」と書かせていただきました。

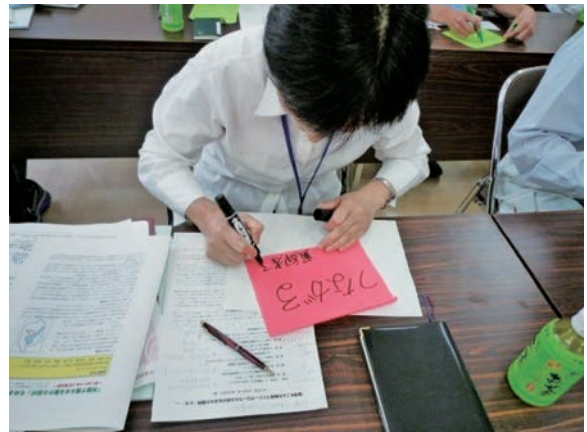
**小田**：阿武町役場経済課の小田と申します。阿武町地域グリーンツーリズム推進協議会の事務局を担当しています。私は「楽」という言葉を書かせていただきました。住民主体のまちづくりと言ってもいろいろと難しいことがあります。難しいことに住民が参加してくれるかなと常々考えておりました。山田さんの話を伺い、なにか絵を描いて、実際それを実現していくプロセスは、すごく楽しそうだなと思いました。やはり住民の方に実際に参加していただくにあたっては、楽しいということを前面に押し出していく必要があるのかなあと思いました。

**金田**：役場経済課長の金田です。「利他（愛）」という、あえて薄く、仏教用語を書きました。大事なことは人間にとって見えないものの中にあるのかなという感じがしております。阿武町の職員は50数人いるんですけども、やはり小さい町になるほど、職員個人の質がすごく成果を左右すると感じております。仕事に対する個人的なやる気で

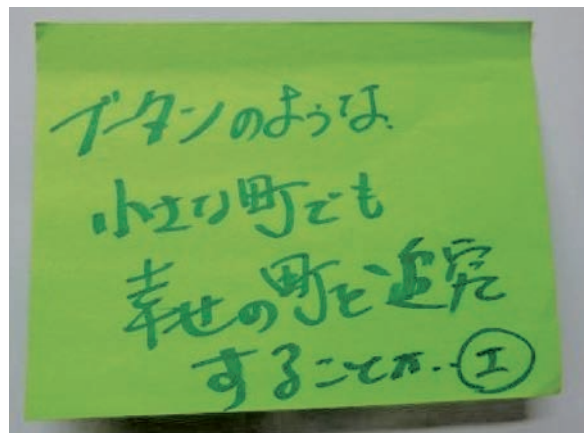
あるとか、センスであるとか、そういったものに非常に左右されるということで、3年やら5年のサイクルで変わっていきます。そのときに、先程、山田さん言われましたように、いかに自治会に力をつけてもらうかが使命であると思っております。まちづくりは個人の資質の向上に尽きるかなと思います。やはりこれは自分の努力で磨くものだと思いますが、仕事の成果を誰に向けるのか、自分が楽になることだけに向けるのか、それとも他人のことを思って仕事をするのかという主体によって全く変わってくると思います。経済はお金が回って初めて活性化するように、幸せなまちづくりをするためには人のことを思って、町民のことを思っていかに仕事ができるかだと思います。「利他」、言葉を変えると「愛」ということだと思いますけれども、いかに愛を持って仕事をするかに尽きると私は思っております。

**小野（道）**：僕は「前進」と書きました。60を超えて、これからも前進したいと思います。まだ私は、奈古に来て短いんですけども、僕は前進あるのみだと思っていますので、よろしく願いいたします。

**花田**：私は花田と申します。私が日頃考えていることは、「支援者と実践者」ということです。この前の日曜日にまちでジャズのコンサートを行った際に、おやっと思うことがありました。60代後半から70代の方たちが、さっきまで田植えをされて、指の爪の中に泥が入っているらっしゃる方がチケットを買っておられるんです。この方がジャズ？ええ～という、そういう驚きがあるわけです。何が言いたいかということ、支援者がどういう姿勢かということでもあります。今言ったようにそれぞれまちの人たちは、個人個人でいろんな趣味もあり、幸福観もあり、いろんな生き方をされていらっしゃるんですけどもなかなか見えてこない。見えてこないから、「まさかあの人が」という驚きがあるわけです。我々は行政の立場であるときにはその人たちの幸福観であるとか、それは地域の幸福であっても個人の幸福であってもいいんですけども、行政でやる時には行政そのもの使命も同じことなんですけれども、支援者であるべきだと思っております。もちろん私も個人として地域の中で生活する場面があるわけですから、そのときには実践者でありたいというふうに思って日常生活を送っております。



**原田**：山口大学国際・社会連携課長の原田でございます。国際と社会というグローバルとローカルをつなぐそのままにズバリ「グローカル」という役割を持っております。皆さんのお話を聞いて気付いたことがありました。「幸福の意味を世界の人々とともに考え足を地（地域）に付けて生きる」ということです。Think globally act locally（地球規模で考え、足元から行動せよ）、グローバルな思考とローカルなというのがグローカルの意味なんですけれども、そのThink globally act locallyの目的がそこには何も書かれていないのです。今日の話聞いて、幸福の意味を世界の人たちと一緒に考えて、その幸福を実現するために地域で活動するというようなことなんだなと思いました。だから、Think globally act locally for happiness（幸せのために、地球規模で考え、足元から行動せよ）だなと感じました。



**山田**：僕が書いたのは、「自己実現と自己成長」です。その資料の最後に、Think globally act locally と書いてありますが、そのための Think

globally act by myself、自分は何するのかを意識していきなさいと思います。

**木全**：この仕事をしていると、まさに Think globally act locally ということなのかもしれないですけども、私の立場ではそうですけども、私は皆さんの立場、地域に住まれている方にとってはむしろ逆だと思っていて、自分たちの地域を考えてグローバルな結びつきをするということもありなのではないかと思って、むしろ Think locally act globally を掲げたいと思います。自分たちの地域を変えるためにグローバルに手を結ぶのもありかなと思うので、目的はむらづくりで国際協力をするのもいいんじゃないかなと思います。畠中顧問もおっしゃったように、高齢化が進む中でなかなか難しいんですけども、甲良町の北落集落の方の 50 代、60 代の方が「若い人たちが地域から出ていてもいい。帰ってきたいと思うような地域にするために自分たちも頑張る」とおっしゃっていました。これはもう、すごいとしか言いようがない。私は「帰ってこれる地域づくり」と書かせていただきました。

**タッサニーヤー**：私のひと言は「人が好き」です。すごく単純なことなんですけれども、人と人の繋がりというのは、よっぽど人が好きでないと続けられません。そして相手を人間として認めることが大事だと思っています。

**白松**：「協働」と書かせていただきました。日本に村普請という言葉があるんですが、お互いに助け合う、そして地域をつくる「自らの地域は自らが」という思いは、人を支えることにもなります。お互いがお互いの顔を知っている、顔の見える関係だから、私は経済課によく行きますけれども、金田課長が頑張っておられるから彼をやはり支えてあげなくちゃとか、小田君が一生懸命グリーンツーリズム推進協議会を支えてくれているからそれを支えてあげなくちゃいけない。そういう思いがお互いを励ましていると思います。今日は、何がどう始まるんだろうと思っていたのですが、素晴らしいみなさんのお話を聞くことができました。よし、これで阿武町のグリーンツーリズムが、また 1 歩前進できるなと思いました。

**辰己**：今日はどうもありがとうございました。それぞれのひと言が重みのあるものだと思います。今日は、個人の自分で語り合おうと言いましたが、本当は、素の自分を出すなんてなかなか難

しいのです。私たちは、みんな、家族や組織等に所属し、いろんな顔をもっています。

たとえば私の場合、山口大学であり、一応研究者であり、おもしろい人であり、阿武町が好きな人であり、多少わがままであり、いろいろです。これら全てを含めて私なのです。ときどき私らしくない私もここにはあるかもしれない、それも私なんです。今日は「つながる」という言葉が出てきましたが、私自身のなかでもいろんな自分につながって、矛盾を抱えながら「私」を形成している。その過程には必ず誰かとつながっていて、私たちはアイデンティティを確立していきます。

ただし、1 日の間、それに携わっている時間が最も長い場所の影響は大きく受けます。農業や漁業、役場の仕事、山口大学の仕事など。仕事を通じて、私たちは何かのプロ、専門家になっていきます。今日は、役場の職員の方が多いのですが、役場の職員としてのプロフェッショナル。役場のなかでも、これについては自信がある、というものがあると思います。それは、資格だけを指すのではなく、人の話を聞くのが得意な方、人を癒すのが得意な方なども含みます。仲間が熱い思いを持って集まり、語り合い、そして、それぞれの得意分野で役割分担をして地域づくりにかかわっていく。それこそが、「協働」であるのだと思います。先程、畠中顧問から日本の援助の特徴として、現場で一緒に苦勞すると言われましたが、実はその原点が、阿武町、甲良町などの頑張っている地域の共通点なのかもしれません。もちろん、このような協働のプロセスは、同時に、個人がどう生きるかということにもつながってきます。今日は短い間でしたが一瞬みんながつながり合った時間ではなかったでしょうか、本当に素敵な時間だったと思います。どうもありがとうございました。





セミナーへの参加者

1	中村 秀明	阿武町(町長)
2	花田 憲彦	阿武町役場総務課(課長)
3	中野 貴夫	阿武町役場総務課
4	藤村 憲司	阿武町役場総務課
5	石田 雄一	阿武町役場総務課
6	中野 克美	阿武町役場住民課(課長)
7	國吉 洋佑	阿武町役場住民課
8	服部 孝子	阿武町役場民生課(課長)
9	藤田 康志	阿武町役場民生課
10	金田 浩祐	阿武町役場経済課(課長)
11	小田 慎也	阿武町役場経済課
12	小野 智彦	阿武町役場施設課
13	斎藤 徹	阿武町教育委員会(事務局長)
14	白松 博之	阿武地域グリーンツーリズム推進協議会(会長)
15	河原 一博	阿武地域グリーンツーリズム推進協議会(事務局長)
16	小野 道雄	阿武地域グリーンツーリズム推進協議会(会員)
17	河野 和祥	山口県地域振興部萩県民局
18	山田 禎夫	多文化共生サークル(事務局長)・滋賀県甲良町
19	タツタニヤ サエリ	多文化サークル(コーディネーター)・(葡)うさじャパン
20	森 友愛	国際協力機構<山口県 JICA デスク>
21	西村 佳徳	国際協力機構<元青年海外協力隊員>
22	木全 洋一郎	国際協力機構<JICA タンザニア事務所>(次長)
23	畠中 篤	山口大学(学外顧問)
24	原田 道雄	山口大学国際・社会連携課(課長)
25	辰己 佳寿子	山口大学エクステンションセンター(准教授)
26	菅田 奈緒美	山口大学経済学部4年(学生)

話題提供者①



山田 禎夫 (やまだ よしお)

多文化サークル 事務局長・甲良町役場

出身： 福井県

口癖： 無理せず、すてきに…

1980年滋賀県甲良町役場就職。1991年から19年間、まちづくり担当者として住民主体と人権尊重のせせらぎ遊園のまちづくりを推進。2011年に税務課に配属、現在は企画監理課所属。2002年から2004年には、JICAタイ基礎自治体開発計画策定能力向上プロジェクトに短期専門家としてかかわり、当時からのつながりをもとに、多文化サークルのY事務局長として活躍中。

話題提供者②



木全 洋一郎 (きまた よういちろう)

JICAタンザニア事務所 次長

出身： 大阪府

目標： “土” のにおいを運ぶ“風”になる！

途上国のガバナンス・地方行政を専門としつつ、日本の地域づくりと結び付けた協力を模索中。2007年10月より国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会主査を3年間務める。著書として『国境をこえた地域づくりーグローバルな絆が生まれた瞬間』（新評論、2012年）がある。阿武町、甲良町の方に「カミソリ」と揶揄されるも、本当はもっと「のほほん」としていたいと思う今日この頃。

話題提供者③



Tassaneeya Saelee (タッサニーヤー サェリー)

多文化サークル コーディネーター・(有)うさとジャパン

出身： タイ

口癖： タムブン (徳をつむ)

2008年から2010年まで滋賀県甲良町の国際交流企画員として活躍、現在は、外国料理教室、国際理解教育など任意団体多文化サークルで活躍中。

コメンテーター



畠中 篤 (はたけなか あつし)

山口大学 特別顧問

出身： 高知県

1965年外務省入省、1995年外務省経済協力局長、1997年駐南アフリカ大使、2001年駐オーストラリア大使、2003年JICA副理事長、2008年(財)交流協会(日本政府の台湾に対する窓口機関)理事長、2012年同協会顧問



## グローバルな取組・事例報告

～小さな国際交流からグローバルな阿武町へ～

中野 貴夫  
Nakano, Takao

(阿武町役場総務課)

### 1. はじめに

阿武町では26年前からALTを招聘し、中学校の授業においてネイティブな英語に触れる機会を提供し続けています。

時は流れ、現在は教育基本法等の改正により、小学校から英語の授業が行われるようになり、グローバル社会への対応と英語教育の低年齢化に伴い、日常的に英語の聞く力、話す力が養われていく環境が、これまで以上に必要とされる時代となってきました。

ALTの授業は週1程度。外国青年との学びの中で、英語に対する興味や外国人に対する接し方など、それなりの成果はあがってきていると思われませんが、やはり英語力については「習うより慣れろ」で、少しでも早い時期から英語に親しむ環境が必要だろうと前々から感じていました。

そんな折、たまたまテレビで、園内での会話はすべて英語で行っているという山梨県のマリア国際幼稚園の放送を目にして、衝撃を受けました。

翌日、この話しを職場の総務課内でしたところ、花田憲彦総務課長も「日本では費やした時間や労力、経費に見合うだけの英会話力が上がっていないのでは？日本人の多くは未だに欧米人と話しをするときに身構えるのではないか？」という思いがあったことから、中村秀明町長の了承のもと、町立保育園に常勤の外国人を招聘し、常に園児とふれあい、異文化やネイティブな英語の言語感覚を身につけるプロジェクトがスタートしました。

### 2. 目的

今回のプロジェクトは、なるべく幼い時期に日常的に英語と接し、日本語も英語も同じ感覚で覚えること。そして、日本人とか外国人とかいう垣根のない感覚で、子どもたちが異文化、国際交流



を自然な形で体験することを目的としています

また、幼児の段階でこのような体験ができる保育園が町に存在することは、定住対策を進めている阿武町の大きな魅力の1つになると、町長も総務課長も考えていました。

そして、単独事業として渡航費や宿泊先等の経費はすべて町が用意し、みどり保育園の補助員として常勤雇用し賃金を支払うなど、外国から来町しやすい環境を整えることなどを決めました。

### 3. 経緯

しかし、いざ実施となると何をどうしていいのやらさっぱりわからず、文科省をはじめ、国際交流協会やワーキングホリデー協会、留学を推進している高校や大学などに手当たり次第に電話をしましたが、「例がない」ということで、これといった解決策が見つからない状況が続きました。

そこで迎えた平成23年6月21日。総務課長から町役場の若手7人の職員に趣旨が説明され、どうすればこの政策が実現できるか、具体的な検討を加えるようミッションが出されました。

そして、このプロジェクトを成功させるために

最も重要なことは、

- ① その人が信頼のおける人であること。
- ② 打ち上げ花火ではなく、事業の継続性が担保されること。
- ③ 見た目が欧米系であること。

彼らはそれぞれのコネクションやネットワークを使って調査、研究し、実際にワーキングホリデー協会のHPにも求人広告を出し、フランス人からのワーキングホリデーを使った応募もありました。

彼らが出した最終的な結論が、「県内大学との連携が良いのでは」ということから、今度は業務として具体的な行動を開始。平成24年1月5日に県立大学国際化推進室長のシャルコフ・ロバート教授を訪問し、協議しました。

結果は、

- ① 県立大学の学生は、ほとんどアジア系である。
- ② 留学生の活用には、山口市と阿武町の距離がありすぎる。

など、留学生の活用はむずかしいとのことでしたが、室長から「2日後に、交換留学の提携をしているアメリカとカナダの大学を訪問するので話は上げてよ」とのお話をいただきました。

次に、山口大学エクステンションセンターの辰己佳寿子先生の紹介により、1月17日、山口大学の学生自主活動ルームを訪問し協議しました。

しかし、この時点では3つの条件である「①その人が信頼のおける人であること」、「②事業の継続性が担保されること」、「③見た目が欧米系であること」は難しい状況でした。

そして4カ月後、突然シャルコフ室長から「話がしてあるカナダのビショップス大学の外国語学部日本語科の日沢勝則主任講師が一時帰国されるので、この機会に阿武町に訪問してもよいか」という連絡が入り、快諾。再び歯車は回り始め、5月10日、縁あって日沢先生が来町されました。

日沢先生に直接このプロジェクトの趣旨を説明し、みどり保育園や町内の小・中学校、そして留学生が住む予定の住宅などを視察・見学いただきました。日沢先生は、既に我々のプロジェクトの意味を良く理解されており、大変好意的で個人的にも候補者を何人か考えているとのことでした。

先生が帰国後、具体的な話については先生とメールでのやり取りを進め、ワーキングホリデーの活用や就労ビザなどの検討をしながらも、難航状態で実現に至るには難しい状況でした。

そして迎えた5月31日。熟議キャラバン「グローバルなまちづくり」の国際セミナーが本庁で開催され、同席された山口大学特別顧問で元大使の畠中篤さんに、この機会を利用して外国青年招致事業のアイデアをお話したところ、面白い企画なので協力しようということになりました。

その後、畠中元大使から外務省の高橋首席事務官をご紹介いただき、稲村担当官のアドバイスにより、報酬を得ながら学業等の一環として企業や役所等において実習を行う活動となる「報酬を伴うインターンシップ」の方法が良いとの提案を受け、具体的な事務作業を進めました。



#### 4. 実施

実施にあたっては、日沢先生のご尽力により人選をはじめ、このインターンシップを終了すれば一定の単位(6単位)が取得できることにもなり、外務省担当官の適切なアドバイスにより、渡航手続きも順調に進めることが出来ました。

そして迎えた平成24年8月17日。阿武町とビショップス大学との間で「阿武町立みどり保育園外国青年招致事業に関する協定書」の仮調印を行い、9月27日にゾエ・パケットさんが来日。

10月1日からみどり保育園で保育士補助員として、小さな国際交流への実践的な取り組みがスタートしました。

そして、2カ月後の12月5日。ビショップス大学のマイケル・チャイルズ副学長をはじめ、日沢勝則先生、県立大教授のシャルコフ・ロバート室長、そしてゾエさんが出席して、阿武町とビショップス大学との外国青年招致事業における協定書への調印が正式に挙行されました。



## 5. 成果と課題

事業を実施する上で一番不安を抱えていたのは、当事者である現場の保育士でした。言葉の問題をはじめ、対応や業務内容、またメンタルな対応や日常生活における問題点など、考えればキリがありません。不安を抱えながらも、リーダーである松浦美栄子保育士の「やると決まったらやる」という姿勢が大きな力となり、「小さくても個性が光る自立した町づくり」を標榜する阿武町の「小さな国際交流」が本格的にスタートしました。

みどり保育園では、毎朝、遊戯室に全園児が集合し、今日の日付から曜日、天気、あいさつなど、自然な形で英語でのやり取りが毎日繰り返され、あつという間に園児たちはゾエ先生からの英語の問いに英語で応えることができるようになり、5感で英語を吸収しながら親しんでいます。

文化交流では、11月のハロウィンパーティをはじめ、12月の生活発表会での英語劇やクリスマス会での英語によるクリスマス・ソングの合唱、1月にはゾエ先生手作りのアルファベットかるたや英語の手遊びなど、子どもたちは何の抵抗もなく、外国の人・言葉・文化に親しんでいます。

現場の松浦保育士は、「子どもたちは、遊びや生活の中で、英語や異文化に触れることができ、教えられているという感覚ではなく、目で耳で肌で吸収しているように感じられます。幼少の頃から日常的に聞く力、話す力が養われる環境はとても大事だと感じています」と話しています。

今はまだ保育園のみの事業で、将来的にはALTとは別に、町独自で町立の小学校、中学校にも常勤できる外国青年を招致したい。また、町の事業として、中学生や高校生の交換留学や海外研修などの夢も広がっていきます。

しかし、課題はサポート体制の強化です。保育士は町の職員で、町の政策の1つとして外国青年の受け入れから対応まで、使命と責任をもって行っていますが、小学校・中学校の職場環境で常勤の外国青年（学生）を受け入れることが可能かどうかは、いささか疑問な点があります。

外国から単身でやって来る青年は感情のある生身の人間で、やはりそこには仕事を越えた個人的な“人”としてのつながりや関わりが受け入れる側の大きな要素として必要であり、継続するためには責任を持って対応や指導ができる人材が確保できなければ難しいようにも感じています。

## 6. おわりに

以前、同志といえる漁師の茂刈達美さんらと「世界をめざす会 NAFUTA」を結成し、「そうか！村塾」に名を変えても海の向こうの世界を意識しながら「シンク・グローバリー、アクト・ローカリー」をめざして活動していたら、いつの間にか世界の方が阿武町に近づいて来ました。こんな小さな町で、アメリカの一流ジャズ・プレイヤーによるコンサートが開催でき、JICAの事業などを通じて、いろいろな国の人が阿武町を訪れるようになってきました。そして、カナダ在住の日沢先生とはいつでもメールのやり取りができます。ゾエちゃんも家族や友人、日沢先生とも日々メール等で交信しながら状況報告やレポートの提出などを行っています。夢物語であったドラえものの漫画の世界が、当たり前のように日常化しています。

それでも、最後はやっぱり「人」です。人生はすべて人と人が出会うことから始まります。この事業の実現に際してもいろいろな人と人との出会いから始まり、一見何の関係もないように見える人と人とのつながりや縁というものが、大きな歯車を動かしたのだと感じています。そして、この歯車は、いずれもっと大きな歯車を動かして、新しい方向へと私たちを導いていくのではないかと感じています。種は蒔かれたのです。

まるで映画のようにある日突然、子どもたちの眼前に、「ゾエ・パケット」という異邦人が現れました。さあ、大変！でも映画の様に物語は面白い方向に流れて行きます。阿武町もグローバルな世界へと、また一步踏み出しました。の答えは数年後に彼らが出してくれるものと信じています。それが、どんな形になるのか、大いなる楽しみです。



中野 貴夫 (なかの たかお)

阿武町役場 総務課

出身：阿武町大字木与

趣味：バンド活動、バイク、読書、お茶

口癖：「大丈夫！大丈夫！」

多くのことに興味を持ち、絶えず空想にふけるあなたは、希望、野望、魅力に満ちた冒険心の持ち主。変化に富んだ波乱万丈の人生になる運命にあるといえるでしょう。支配星である木星の影響を受けて、機知に富み楽しい性格です。情熱的で楽観的な人が多く、率直ではっきりものを言うタイプ。(誕生日大全より)。ほほ〜う！こんな性格だったのか(^^)!

## 宇生賀地域からのご挨拶

～埋まっている希望を掘り起こす交流～

山本 勉生  
Yamamoto, Susumu

(宇生賀中央自治会 会長)

阿武町宇生賀地域で農業経営を行う「農事組合法人うもれ木の郷」は、農業者の高齢化が進む中、自分達の農地は自分達で守るという信念のもと農業経営の効率化を目的に設立されました。現在、原発事故の影響もあり、安心・安全な農産物を求める声が高まっています。うもれ木の郷では、早くから農薬・除草剤を全く使わないJAS米・エコ100米や、農薬などの使用を半分に抑えるエコ50米の栽培に取り組み、消費者への安心・安全な米の提供にこだわってきました。

2012年6月には、山口大学剣道部の学生さんがうもれ木の郷に来て草引きの手伝いをしてくださいました。学生さんは、地域住民と触れ合い、自然と向き合うことで、人と人とのつながりや、人の温かさを感じるとともに、何気なく食べている米の生産者側の大変さや農業の奥深さを痛感していただけたのではないのでしょうか。うもれ木の郷は、若い世代と交流することで活気がみなぎり、一瞬ではありますが高齢化率が減少しました。いつもは明かりがなく静かな集落に、家の明かりが遅くまで灯り、笑声が絶えない風景はまさに交流の効果であり、いつもは顔を出さない人も積極的に顔を出すなど集落のつながりの強さを改めて感じた

ところです。そして、2013年3月には、この交流事業をよりよくしていくための熟議を行い、6月の草引き事業を振り返り、これからの連携活動について本音で語り合いました。

この交流を通じて、学生さんたちに、うもれ木の郷のファンとなってもらい、農業の実態を伝える語り部となり、また、消費拡大への営業マンとなってもらえたらと期待しております。今回交流体験をした学生さんは、うもれ木の郷の家族という思いを持って、うもれ木の郷へ何度も足を運んでもらいたいものであります。農業経営は、単に農産物を栽培することだけではありません。このような交流が今後ビジネスにもつながっていけば、資金も循環していくと思っています。

最後に、うもれ木の郷は4集落を基盤に圃場整備を行い、4集落がひとつとなって地域の農業を推進してきました。この交流は、地域を守ろうとして、農業法人が立ち上がり、組合員一人一人の力が合わさってできたものと確信しています。「うもれ木の郷」の「木(き)」は、水田から出てきた「希望」であると思っています。今後も埋まっている希望をたくさん引き出していきたいと思います。



山本 勉生 (やまもと すすむ)

宇生賀中央自治会 会長・農事組合法人うもれ木の郷 組合長

出身：阿武町宇生賀

農事組合法人うもれ木の郷の3代目組合長であり、宇生賀中央自治会の初代会長である。山口大学との草引き事業の発端は、「どねえならんか！」という山本組合長からの一言であった。質実剛健、こうと決めたらまっしぐら、有言実行がモットー。一方で、四つ葉サークルの女性たちがつくる豆腐が売れなかった時期には、こっそりと店で豆腐を買い込んで食べていたという、やさしい側面ももっている。

## うもれ木の郷からのご挨拶

～努力しているところには、必ず応援をしてくれる人がいる～

田中 敏雄  
Tanaka, Toshio

(農事組合法人うもれ木の郷 事務局長)

うもれ木の郷は、平成9年に山口北部国営の内再編整備事業を契機に、山口県においては特定農業法人第1号として設立されました。農村社会は大きく変貌し、個人完結型農業から、4集落1農場1家族といった、これまででは考えられない取組を決断しました。決断への過程は、今考えても驚くほど、300以上の話し合いを行いました。しかし、法人化したからといって農村が抱える問題はそんなに簡単に解決できるものではありません。農村の問題は、後継者、担い手不足、若者の農業離れ等がありますので、まずは、農村を多くの人々に開放し交流を重ね、農業・農村の良さを理解していただくファンを作ることだと思います。

今、消費者のニーズにあった無農薬、無化学肥料栽培米（JAS米、エコ100米）作りが求められています。重労働の仕事、機械化の進まない除草作業において大変困っております。このことは農村に機械、農薬、化学肥料が無かった時代の米作りが求められていることです。除草作業においても人海作戦でいかなければなりません。高齢社会の農村では、農家の体力が弱り、また若い人は少なく、なかなか進みませんでした。

そんな時、体力、重労働にも耐える根性があり作業ができるといえばスポーツ選手ではないかと考えました。特に大学の体育会が適任ではないか

と思い、これまで交流のありました山口大学の辰己先生に話しかけ、剣道部顧問の辻先生を紹介していただき、剣道部学生、先生、うもれ木の郷の3者での話し合った結果、一気に話が進み、2012年6月には草引き交流事業が実現しました。体力と、根性のいる大変な除草作業は、剣道部の皆さんでクリアできました。今回は作業だけでなく交流にも力を入れました。地域の皆さんには負担になったかもしれませんが、学生・先生を含めた32名を4～5人に分かれて農家民泊をしてもらい、交流がより深まればと期待しました。人は愛情によって、自分たちも変わることができ、また人を変えることができると思うからです。うもれ木の郷の人々は、交流を通して若者の元気をいただきました。学生さんは、部活の支援を受けただけでなく、多くの人との会話の機会をもつことができたと思います。このような相互扶助の関係ができれば、長く続くのではないかと思います。

私は、努力しているところには、必ず応援をしてくれる人がいると信じています。今回は、山口県、阿武町、JAあぶらんど萩をはじめ多くの関係機関のご支援をいただきました。剣道部の皆さんとの出会いは、うもれ木の郷にとっても大きな宝物であり大切に守っていきたいと思います。一人ひとりの出会いを大切にしたいと思います。



田中 敏雄 (たなか としお)

農事組合法人うもれ木の郷 事務局長・阿武町議会 議長

出身：阿武町宇生賀

農事組合法人うもれ木の郷の初代組合長を経て現在は事務局長。いち早く地域の問題を把握し行動に出るタイプであるが、トップダウンではなく徹底的に熟議的な話し合いを行うボトムアップ手法をとってきた。女性たちからも信頼が厚く、豆腐作りでトラブルがあったときなど、夜中に呼び出されるのは決まって田中さんのようである…。

## 四つ葉サークルからのご挨拶

～案ずるより産むがやすしの草の根交流～

原 スミ子  
Hara, Sumiko

(四つ葉サークル 代表)

今だから言えることですが、私がこの企画を田中事務局長から聞いた時、正直、「時期尚早」と思いました。地域全体の意識がついてこないことがあるからです。世代の違う若者と交流ができるかなという不安もありました。さらに、学生さんたちの作業が、田植えや稲刈りではなく「草引き」とは…、一番きつい農作業ではないですか…。田中事務局長と議論になったこともありました。不安でいっぱいなのなかで当日を迎えましたが、案ずるより産むがやすし…、学生さんたちは、全ての不安を払しょくしてくれました。

学生さんが、草引きの話が聞かれた時はどう思われたのでしょうか。今流行りのグリーンツーリズムと思われたのではないのでしょうか。ところが「聞く」と「見る」、いえいえ「やる」とは大違い、エコ米の田の草取りは四つん這い…。草引きの初日は予報通りの雨、合羽に田靴で田んぼの中を這いつくばっての草取り、ぬかるみに足を取られ、日頃の生活にはない中腰状態の連続。しかもどれが稲でどれが稗かもわからない、一緒に作業する農家のお母さんたちはあつという間に先に進んでいる。少しは仕事が見えてきた 2 日目は前日とは打ってかわって背中が焼けつくような炎天、田の草取り雨でも晴れでも大変な作業でした。食事を担当した四つ葉サークルの私たちは、この地の野菜をふんだんに使い、思いっきりおふくろの味

を出そうと練りに練ったんです。「白いむずびがこんなに美味しいなんて」「米粒ひとつひとつが甘い」「この豆腐、醤油をかけなくても美味しい、しかも香りがある」、「こんな料理を私も作りたい」「おばあちゃんの味がする」気持ちがスカッとすほどの食欲と口々に発せられるほめ言葉は、私たちに最高の喜びを感じさせてくれました。さらに、懇親会や各家庭での民宿の会話を通して、学生さんたちは、農業・人生に感心と畏敬の気持ちを持ち始めていました。安心・安全の背後には、想像を絶する農家の人たちの黙々とやり続けるつらい労働があること、これからの日本の農業のあり方、法人化・ブランド力・TPP 参加のこと、また楽をせずこつこつと丁寧に生きる生き方、来年も後輩たちにこの活動を続けてほしいことなど…。たった 1 泊 2 日のこの体験が若者たちに何かを感じさせたとするなら、私たちはそれで大満足です。

6 月の草引きの後、美味しいお米を収穫し、うもれ木の郷には冬がやってきました。「学生さんたちはどうしているかしら…」と考えていると、梅のつぼみが開く 3 月、再度、学生さんたちが訪問してくれました。6 月の草引き事業を振り返り、これからの活動のための熟議を行いました。互いが感じたことを語り合うことができた貴重な時間でした。蛍が飛び交う頃、またお会いしましょう。



原 スミ子 (はら すみこ)

四つ葉サークル 代表

出身：むつみ村（現萩市、合併までは日本で唯一のひらがな名の村）

「うもれ木豆腐」の誕生物語の第一人者。地元の大豆で加工品をつくろうと四つ葉サークルが豆腐の商品開発に着手。試行錯誤であったが、女性たちの弛まぬ努力と男性たちの影のサポートで特産品が生まれた。2010 年冬には、近郊（萩市）の海の「にがり」を使い正真正銘の地産地消の豆腐として再デビュー。四つ葉サークルの姿勢は、徹底的に食の安心・安全にこだわること。

実践キャラバン in 阿武町・宇生賀「草引き交流」

うもれ木の郷と山口大学剣道部の交流活動

～互いに何かを感じ、何かを得、そして感謝しあう～

辻 多聞

Tsuji, Tamon

(山口大学 学生支援センター 講師)

1. はじめに

農事組合法人「うもれ木の郷」(以下うもれ木の郷)では、消費者のニーズにそった無農薬、無化学肥料栽培米 (JAS 米、エコ 100 米) づくりが行われてきました。しかしこの栽培法は機械、農薬、化学肥料が無かった時代の米作り、すなわち手作業 (重労働) でほとんどを行わなければなりません。高齢化が進んでいる農村であるうもれ木の郷では、この解決策を模索していました。そこで挙げた 1 つの案が大学生の体育会部活動との協働でした。

うもれ木の郷と山口大学エクステンションセンターの辰己佳寿子先生とは、2004 年から交流がありこの提案を辰己先生に持ちかけられました。辻は、学生支援 (キャリア教育) に携わっており、体育会剣道部の部長をしています。またこれまでに阿武町福賀大農業祭りに毎年度参加していました。こうした流れから辰己先生から紹介を受け、うもれ木の郷からの提案、すなわち水田の草引き作業 (除草作業) によるうもれ木の郷と山口大学剣道部の交流活動が実現に向け本格的に動きだしました。

2. 協働に向けて

本交流活動の実施に至るまでに、山口大学にて 3 回、うもれ木の郷にて 1 回の事前打ち合わせが行われました。打ち合わせの主なメンバーは、山本勉生氏 (うもれ木の郷代表)、田中敏雄氏 (うもれ木の郷理事)、原スミ子氏 (四つ葉サークル会長)、小田慎也氏 (阿武町役場)、および辻 (山口大学)、剣道部員 2~3 名でした。

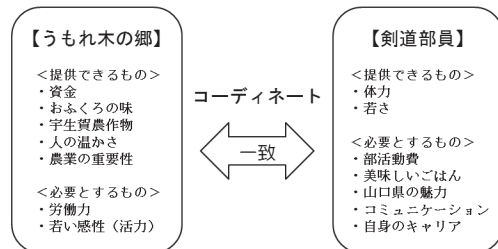
もともと大きな議題は、うもれ木の郷と剣道部との間での要望事項の摺合せでした。右図はその概念図です。この図より、両者の利害関係がよく



阿武町福賀大農業まつり

一致していることがわかれると思います。その他、実施に向けた問題点として、山口大学から阿武町宇生賀までの移動 (40 km 以上)、および活動にともなう学生の保険がありました。これらは、「中山間地域元気創出若者活動支援事業」からの助成金を利用することでクリアすることができました。

両者による事前打ち合わせ以外にも、うもれ木の郷が民泊先となる家庭への協力願いを行ったり、四つ葉サークルが当日の食事の献立を検討したり、



うもれ木の郷と剣道部の要望事項の摺合せ結果





交流活動事前打ち合わせの様子

役場が活動実施に関する連絡調整を行ったりもしました。また辻から剣道部員に対して、民泊に関わるマナーの事前指導を行い、剣道部は交流当日の出し物（剣道形の演武）の練習を行い、部内連絡体制を改めて整えました。

### 3. 実施概要

交流活動は2012年6月16・17日の2日間にわたって行われました。参加した剣道部員は、3年生以下の31名でした。交流会のスケジュールは以下のとおりです。

(6月16日)

- 08:00 山口大学よりバス出発
- 10:00 宇生賀到着
- 10:30 開会式
- 11:00 稲と稗の見分け方の研修
- 12:00 昼食
- 13:00 草引き作業①
- 16:30 作業終了・着替え
- 18:00 3つの会場に分かれて交流会  
剣道部による形（演武）披露
- 20:00 8家庭に分かれて団欒及び民泊

(6月17日)

- 08:00 草引き作業②
- 11:30 作業終了・着替え
- 12:00 昼食
- 13:00 閉会式
- 13:30 宇生賀よりバス出発
- 15:30 山口大学到着



開会式に整列するうもれ木の郷と剣道部



草引き作業風景



交流会の様子



交流会での剣道形の披露

4. 報道関連

この交流活動は、県議員、町長、萩農林事務所をはじめとした公的機関から高い関心がよせられ様々なHPに活動の様子が掲載されました。また阿武町の広報誌である「広報あぶ」にも掲載されました。テレビ局による取材もあり、山口朝日放送で6月19日に、萩ケーブルテレビネットワークで6月20日にそれぞれ活動内容が放映されました。交流活動は「熟議 in やまぐち うもれ木の郷と山口大学剣道部の交流活動報告書『知恩』』という書籍でまとめられました。



「広報あぶ」による掲載記事

5. うもれ木の郷ホストファミリーの感想

大学生を受け入れたホストファミリーは、当日まで大きな不安と緊張を抱えているようでした。しかし剣道部員の「礼儀正しさ」、「素直さ」、「明るさ」によってそれらが払しょくされ、より交流を深めたい、自分たちの思い（願い）を感じ取ってもらいたい、受け取ってもらいたいとなっていったようです。以下にホストファミリーの1つであった尾本雅・瞳夫妻の感想文を紹介します。

先日は学生の皆さんお疲れ様でした。お陰様で草取りもはかどり皆さんの元気をもらって稲も喜んでより生長してくれると思います。

受け入れる家の者は、うもれ木の郷の事務所に迎えに行く事になっていたの待っていたのですが、初対面は自分の子どもより10歳以上若い

で、すごくかわいい感じがしました。でも皆さんの挨拶や礼儀正しいのにびっくりしました。早々家に着いて、仕事をして、トラックの荷台に乗る事から喜んでもらって!!いざ田の草を取る時は初めてなのに愚痴も言わず、女の子は虫やヒル、カエルが居ても「キヤー」とも言わず良く頑張ってくれたと感心しています。私たちは仕事をしながら、皆さんと話しもできて、若いパワーをもらったし、「頑張れ!!」の掛け声で随分元気が出ました。若いって素晴らしいナ!!つくづく思いました。17日昼前の作業、皆疲れもピークの中、加藤君の「天城越え♪」で私たちも楽になりました(まだいろいろききたかったナ?)16日夜の懇親会では、いろいろな話も聞けて、将来の夢も聞かせてもらって楽しい時間でした。家に帰ってからも、もっとしっかり話してみたかったし、皆さん(4人)が「トランプ一緒にやりませんか?」と誘われたのに一緒にできなかったことが心残りです。朝食もしっかり食べてもらえたとし、挨拶、礼儀も気持ちの良いものでした。

1泊でしたが、どんな時も別れは淋しいものですネ。なんだかこみあげるものがありました。今後、皆さん就職活動などで大変でしょう。夢に向かってしっかり頑張って欲しいと思います。私も、うもれ木の郷の一員として、少しでも長く脇から助けられたらと思っています。でもこの農業体験で皆さんがお米の大切さ、無農薬の大変さがわかってもらえたら、お米を買う時に少しでも思い出してもらえそうですね。きつい仕事だったと思いますが、また、来年も若いパワーと元気を持って来てください。本当にお疲れ様でした。

最後に、16日の夜、宇生賀(黒川)のホテルを見せてあげたかった。



ホストファミリーと剣道部員との団らん

## 6. 剣道部員の感想

剣道部員の感想をみると、これまで気づかなかった農業の大変さ、食の大切さ、といった体験に直接的に関係することだけでなく、人とのふれあいの重要性や働く意味などにも学生達は考えていたようです。さらに物事をとらえる視点を広げる必要性など今後の生活とこの経験の接合にまで思考が深まっていたようです。以下にいくつかの剣道部員の感想文を紹介します。

今回の農業体験を終えて、改めて様々な貴重な経験ができたと思う。とにかく実際に農業の一環として草むしりを行う事で、改めて米は農家の方々が苦勞して大事に育てているからこそ、自分たちの手元に届き食すことができているのだと実感することができた。また、自分がかつて「八十八日苦勞のお米、一粒たりとも残しません」という言葉を教わりそれを実施してきたが、その言葉の意味をこの学習の中で見直すことができたと思う。

農業を通じて学んだことは農業の事のみでなく、農業を行う上に置いてはやはり町の中でのコミュニティがどれだけ密なものであるべきか、人と人のつながりの上に農業やこの農村の生活は成り立っているのだという事を学べたこともまた大きな財産だ。一言に農業といってもただ「米を育てる人」達だけでは「農業」は成り立たない。だからこそ地域内での「つながり」というものが何よりも大事なのだ気づかされた。人と人がつながることで「生み出されるもの」があるという事を学べた。これはなりよりも大きな経験だったと思う。これを今後の生活に生かしていきたいと思う。

(3年生男子)



今回の農業体験に参加して、最初、農業はどこでどんなことをするのか全く想像もできなかったです。それで1泊する現地に到着したときはまわりが本当に田んぼだらけで驚愕しました。田んぼばかりの風景は、自分自身田舎育ちだったからなれてはいたはずでしたが、まさか田んぼと家以外見当たらないような場所とは思いませんでした。こんなところで農家の人は一日中田んぼのなかで働くのかと考えたら、少しゾクツとなりました。さて、実際に農業をやってみて、沼(?)が深くて足をとられ、たくさん生えた雑草をひたすら抜くのにもものすごくこずりました。間違えて稲を抜いてしまいそうでなかなか草ぬきがうまくいきませんでした。こういうことを農家の方々は毎日やっていると考えたら、農家のこだわりをすごく感じました。実際に農家の人が作ってくれたおにぎりや豆腐はすごくおいしかったです。豆腐は麻婆豆腐に使いたくなるくらいでした。やっぱり、働いたあとのご飯はおいしかったです。結局は「働かざる者、食うべからず」ってことだと思いました。

(2年生男子)



初めてこのお手伝いのお話を伺ったときは、きちんと仕事をこなせるのかという不安の半面、嬉しさもありました。というのも、亡き祖父の小さな畑を幼い頃から手伝っていたので、懐かしさに似た思いもあり、今回のお手伝いに元気よく臨もうと思いました。

うもれ木の郷に着くと、私の地元である防府市よりも緑も空気も綺麗で草抜き作業も気持ちよく行うことができました。水を張った田んぼに入るのは小学校以来だったので進み慣れるまで苦勞しましたが、剣道部の仲間や、一緒に田んぼに入っ



て稲と草の見分けを教えてくださいましたうもれ木の郷の方々が存在があったからこそ、精神的にも体力的にも乗り越えられたと感じています。

昼休憩の際には、美味しい白ご飯やその日の朝作ったばかりの豆腐、うもれ木の郷で採れた野菜で作ったお昼ご飯は、他界した祖母の料理を思い出して思わず涙ぐみました。たくさん量のご飯は、それだけうもれ木の郷の方々の愛が感じられました。

うもれ木の郷に来る前は「単なる草抜き作業の手伝い」という程度の認識でしたが、地域の皆さんと実際に行動を共にして、人との交流の素晴らしさを改めて感じる事ができました。またこのような機会があれば、前回以上に貢献できたらなと思います。今回のような貴重な体験をする機会を与えてくださって本当にありがとうございました。(2年生女子)

農業に関して、実のある体験ができたとおもいます。1時間くらい集中して雑草を抜いても数メートルしか前に進んでいないので、気持ち的に辛いとを感じる事が何度もありました。その何度も辛さを感じる度に、農家の人達は普段少人数で、あの2日間で活動した面積の何倍何十倍の田畑の雑草を抜いていると思うと、ある種の畏敬の念が沸きました。雑草抜きをするうちに、一つの目的を積み重ねて行くことを無心でしていくことができました。雑念を除き、一つ一つを行っていくことは、普段の練習に繋がる部分があると思います。そういう意味で、あの体験は剣道の練習に活用できるのではないかと、思いました。夜での団らんで、人との触れ合いができて良かったです。今後将来の中で、新しい人と話し合う必要があります。社会に入れば尚更です。農家の人達はとても人当

たりよく接してくれたので、緊張したり、焦ったりせず、団らんすることができました。この体験は、これからの人格形成の肥やしの一つにさせていきたいと思いました。(1年生女子)

## 7. おわりに

あった事象は、うもれ木の郷において、うもれ木の郷と剣道部が協働で2日間の草引き作業を行うというものです。しかし同じ事象でも、この交流活動に参加したそれぞれが感じ取ること、得ることは違っています。上記の図に示した互いの要望事項の摺合せは表面的なものにすぎません。すべてが個人である以上、それぞれが抱く感情はそれぞれであるのが当たり前であり、何を感じ取ることが正しい、何を得心することが正しいという訳ではないと思います。それぞれが抱いた感想はコミュニケーションによって交わり、融合したり、化学反応をおこしたりしていきます。その結果、また新たな気づきが互いのなかで芽生えることとなるでしょう。こうした気づきの繰り返しのなかで、私達の根源である生きていること、いや生かさせてもらっていること、そこに人がいること、そこに地球があることに「改めて気づく」のではないのでしょうか(自覚していなくてもなんとなく心に灯がつく)。そしてこの気づきは感謝するという心を育成していくものと思われま

す。互いに感謝しあう心を培っていくことこそが、本当の意味での地域活性化であり、学生のキャリア形成だと思えます。少なくともこの交流活動は、そんな心を培うきっかけとなったのではないのでしょうか。ここに掲載された多くの写真における人の笑顔がそれを物語っているように感じます。



閉会式後に別れをおしむ  
ホストファミリーと剣道部員



熟議キャラバン in 阿武町・宇生賀「農村の再生」

## 農村への若者たちの労働力、元気の注入

～会場が一体となった熟議～

辻 多聞

Tsuji, Tamon

(山口大学剣道部 部長)

坂井 伸伍

Sakai, Shingo

(山口大学剣道部 主将)

### 1. はじめに

2012年3月17日の「熟議 in やまぐち」のグループ⑧では「農村の再生」をキーワードに、衰退していく農業・農村をどう再生していくのか、担い手問題にどう取り組んでいくのかという熟議が行われた。これらの議論を踏まえて、2012年6月には、阿武町福賀地区宇生賀地域において、農事組合法人「うもれ木の郷」と山口大学剣道部との連携による草引き交流事業が実施された。

学生たちは、1泊2日で、有機栽培米の圃場での草引きを行い、地域住民との交流会とホームステイを体験した。この事業の目的は、高齢化が進み労働力が不足する地域農業の担い手として、また剣道で必要となる精神修養・体力作りの一環として、剣道部の学生が農作業を手伝い、同時に地域住民との交流を図り、若者の柔軟な発想を宇生賀の地域づくりに活かすことである。事業の実施においては、四つ葉サークル、宇生賀中央自治会、阿武町役場、山口県萩農林事務所、JA あぶらんど萩などのバックアップだけでなく、山口県中山間地域元気創出若者活動支援事業の支援も受けた。

3月12日には、山口大学剣道部が、再度、阿武町福賀地区宇生賀地域に赴き「熟議キャラバン in 宇生賀」を開催した。目的は、本事業を今後も継続し有機的な展開を図るために、地域住民と学生、行政等で熟議を行い、参加者の合意形成のもとで、次回の草引きプログラムを具体化することである。本熟議は学生の主導によって進められた。

### 2. 熟議の概要

#### 2.1 熟議のスケジュール

日時：3月12日 13:00-17:00



真剣な面持ちの打ち合わせ



昼食時は笑顔に！

場所：阿武町宇生賀 伊豆公民館

司会進行：坂井伸伍（剣道部主将）

①昼食準備と打ち合わせ

②みんなで昼食

メニュー：うもれ木の郷の米でつくったおむすび、うもれ木の郷の豆乳が入ったシチュー、うもれ木の郷のほうれんそうと豆腐で作った白和え、生姜焼き、漬物

③開始式

はじめの言葉（主将 坂井伸伍）

うもれ木の郷の挨拶（組合長 山本勉生）

山口大学挨拶（剣道部部長 辻多聞）

スケジュールの説明（主将 坂井伸伍）

- ④山口大学剣道部活動報告（主将 坂井伸伍）
- ⑤うもれ木の郷活動報告（組合長 山本勉生）
- ⑥グループ熟議

4つのグループに分かれて「熟議」の形式を取り議論を行う。ファシリテーター1名、記録係1名を各グループに分け議論をまとめる。模造紙に意見や感想を書いたポストイットを張り付けていく。

- ⑦グループ発表、まとめ

各グループのファシリテーターが、グループの意見をまとめ発表する。質疑応答。

- ⑧終了式

地元からの講評（事務局長 田中敏雄）  
山口大学からの講評（監事 坂本紘二）  
山口大学挨拶（エクステンションセンター 辰己佳寿子）  
おわりの言葉（主将 坂井伸伍）

## 2.2 熟議のテーマ

- (1) 6月の草引きの交流を通して、学生の立場、うもれ木の郷の皆さんの立場から見た交流会の感想、意見を話し合う。

→ 意見のところは具体的に活動の中身などを言ってもらえるようにする。感想もどんどん出してもらえるとさらに良い。

- (2) では、このような交流会を剣道部以外の若者にどのような活動や宣伝を行えば興味を持ってもらえるか、また参加してもらえるか？について意見を出し合う。

→ 詳しい作業内容や方法などを考えてもらうようにする。（日帰りにする。や、夏休みに行く。など）。実現が急には難しそうな意見でも大切にするように。

- (3) では、(2)を達成するための前段階として、次回の剣道部との交流会の際にどのような活動をしたり、日程を組むとさらに良いか？について意見を出し合う。

→ 現実的に可能で、(2)の意見がもっと具体的になるようにする。

## 3. 熟議の内容

4つのグループに分かれて上記のテーマ

- (1)(2)(3)について熟議を行った。各グループの熟議の内容は以下のとおりである。

### 3.1 グループ①

- (1) 6月の草引きによって「農業の楽しさや喜びがわかる」「生産者の気持ちがわかる」「食材のありがたみがわかる」という意見が出された。さらに、若者と地域からは以下の意見があった。

<若者側>

- ・めったにできない経験ができる
- ・農業に対する考え方が変わる
- ・年齢の離れた人と交流ができる

<地域側>

- ・うもれ木の郷のことを知ってもらえる
- ・地域の広告塔になってほしい
- ・後継者や新規住人を増やせるかも…



- (2) 交流事業を第三者へ広げる際の障害として「スケジュールが空かない」「農業への先入観」「初めて体験する農作業への不安感」「引き受け側の不安」などがあげられた。そのためには、まず、地域から学生に対して「うもれ木の郷の農産物を提供して、興味をもってもらおう」という提案があがった。そのほか、学生たちが「うもれ木の郷で感動したこと、面白かったことを伝える」「剣道部がうもれ木の郷で経験したことを新聞やホームページなどで公に発表する」「うもれ木の郷での体験をレポートに書いて単位がもらえるようにする」という意見があった。



- (3) これからの剣道部交流においては、「6月中旬は草が伸びているのもう少し早い時期なら草引きも楽になるのでは」「田植えから稲刈りまで一貫して農業にかかわりたい」という意見があったが、農作業の日程と剣道部のスケジュール（大学の授業や試合の日程等）とをかみ合わせることの難しさという現実的な課題も明確となった。そのほか、「懇親会では準備不足だったので今回は芸を磨いて挑みたい」「多くの人に参加してもらいたいという気持ちはあるが、小グループで交流を図ることが親密性を高める」という意見があった。

### 3.2 グループ②

- (1) 6月の草引きによって「世代の離れた人々が同じ作業をすることでお互いの刺激になる」「みんなで一緒に作業をすることで見えないつながりができる」「農作業は長い時間続いてきた作業である。今の世代には、特にインターバルをとりつつやると継承できるのではないか」という意見が出された。



- (2) 交流事業を第三者へ広げるためには、「経験した者（剣道部）から他の人々へ発信していくことが重要」であり、CMをつくってはどうかという提案が出された。学生がプロデューサー、俳優、音楽、撮影、編集の全てを担当し、短い時間でうめ木の郷の良さをアピールするようなCMを意味しており、地元からは近いうちに試写会ができることを期待するという声があがった。

そのほか、「常に厳しい練習などをこなしている人々を連れてくることは農家の人々にもメリットがあるのではないか」「個人への打診よりも、組織やグループに対しての方が募集をかけやすい」「第1週目、第3週目などという2部制をとってみる」という意見が出された。



逍遥歌に挑戦したが歌詞を最後まで覚えていない…

- (3) 今後の剣道部の地域での活動としては「剣道部の田んぼをつくってオーナー制を導入してはどうか」「1泊2日を2泊3日にしてはどうか」「食べ物飲み物はこれまで同様で…農作業を20分早く切り上げているんなお手伝いをしてはどうか」という意見が出された。また、声を出すことでさらに元気になる効果を狙って、「掛け声などをつくってはどうか」という提案があり、「次の草引き交流会までに山口大学の逍遥歌を覚えてきて地域の皆さんに披露する」という約束をする場面もあった。

### 3.3 グループ③

- (1) 6月の草引きを実際にやってみて、地域からは「学生さんたちは、思ったより、礼儀正しくて真面目で真剣だった」という感想があった。学生たちからは「最初はイメージが湧かなかった」「来てみて農業の大変さがわかったが、農作業がきついでだけでなく農業の楽しさも感じることができた」「収穫までやってみたい」「料理がおいしかった」「草が多いのに驚いた」「草の見分けがつかなかったので事前の勉強が必要ではないか」という感想や意見が出された。





(2) 次に若者から農家への接触が少ないことや将来の後継者不足についての問題が指摘され、「最初の取っ掛かりが難しい」「学生だけでは難しい」「体験を提示すれば果たして人は来るのか」「体験を説明するだけでなく、人間味があるということ、人間関係が良いこと、農家の元気さも伝えるべき」「大学の授業の一環として単位を出せば参加者が増えるのではないか」という意見があった。伝えるために、アンケート調査を行うという提案もあったが、間接的なアンケートでこういう活動への参加者への増加が見込めるかという意見もあり、直接的な顔の見える関係のなかでどうつなげていくかを再認識する場面もあった。



(3) 次回からの交流事業においては、6月に1泊2日で3会場に分かれて実施してはどうかという提案があった。また、「食事づくりなどは常識の範囲内で手伝う程度にし、草引きという仕事に集中してほしい」「ボランティア活動ではなく、労働の対価を受け取っていることを認識してもらいたい」との意見もあった。互いが負担にならない範囲で、互いがメリットを受けるかたちで継続していくことが重要であるとの発言もあった。

### 3.4 グループ④

(1) 6月の草引きにおいて、学生たちは、自分たちの草引きの作業は半人前であったにもかかわらず、地域の方々から食事や宿泊、交流会の時間、労働の対価などいろいろと支援してもらってばかりで、Give & Takeになっていないのではないかとの危惧をもったという。地域からは、地域にとってみれば、農作業と同時に交流という側面をもっているのでは、目に見える等価交換を期待しているわけではない、元気や活気をもたらしたり、見えない効果もあるのだという回答

があった。また、宿泊施設に泊まるのではなく、農家にホームステイをさせてもらったことで、一体感が生まれたし、「家族」の一員であるような気持ちになれたとの感想もあった。



(2) 実際に来てみてからわかることが多かったので、事前に講習会を開催し、うもれ木の郷の歴史や農業のこと、特産品などについての事前知識を身につけ、雑草の見分け方などを学習していく必要があるとの意見がだされた。事前学習によって達成感が違ってくる可能性があるとの指摘があった。土日のみの少人数体制はどうかとの意見もあった。



(3) 草引き以降、互いがどうしているかなと思う場面が多々あったが、連絡をとるすべがなかった。ホームページやブログなど連絡窓口をつくって、常に剣道部とうもれ木の郷がコミュニケーションが図れるようになればという提案もあった。草引きだけでなく、来たいときに来られる環境づくりが必要なのではないかとの意見も出された。

## 4. おわりに

各グループにおいて、6月の草引き交流にてすでに知っている間柄であるために、スムーズに熟議に入れるとともに活発な意見交換を行っていた

ように思われる。また熟議のテーマは互いに内容（次年度の草引き交流活動）を十分に把握していたことも議論を活発にする要因であった。テーマ設定およびその順序は学生の提案によるものを用いたわけであるが、熟議の活性度から判断するに、大きな問題（例えば参加者の発言がなくなってしまうなど）はなかったように思われる。また学生によるファシリテートや記録、および発表に関しても十分に機能するとともに、不十分な箇所は参加者の発言や和やかな雰囲気によってカバーされていた。各グループによる発表では、必ず質問やコメントが入っていた。発表者が質問の回答に困っていると、場内の誰かが適切な助け舟をだし

たり、笑いをもたらす発言をしたりするなど、グループ熟議だけでなく、会場が一体となって熟議およびその分かち合いが持たれたことが、この会の最も大きな特徴であったように思われる。

余談かもしれないが、会の終了後にうもれ木の郷の数名と山口大学の辰己・辻による反省会では、学生の礼儀正しさ、真面目さに関して、うもれ木の郷より賞賛の声を頂いた。最も基本的なことかもしれないが、熟議をはじめ学生が地域社会と接するときは、敬意をもって接し、真摯にそれに取り組む事が交流（コミュニケーション）を深めていくように思われる。

参加者 グループ①

1	永田 隆浩	JA あぶらんど萩
2	西村 文孝	農事組合法人うもれ木の郷
3	藤村 和重	農事組合法人うもれ木の郷
4	友廣 多賀枝	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
5	堀 次子	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
6	西村 静江	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
7	原 スミ子	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
8	島内 勝矢	山口大学 剣道部人文学部 2年
9	小林 普輔	山口大学 剣道部経済学部 1年
10	坂本 紘二	山口大学 監事

参加者 グループ②

1	石橋 博幸	JA あぶらんど萩
2	阿字雄 稔	萩農林事務所
3	小田 慎也	阿武町役場 経済課
4	山本 勉生	農事組合法人うもれ木の郷
5	尾本 瞳	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
6	鈴川 はつみ	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
7	石底 大海	山口大学 剣道部理学部 2年
8	安平 賢太郎	山口大学 剣道部経済学部 1年
9	辻 多聞	山口大学 剣道部部长・学生支援センター 講師



参加者 グループ③

1	西山	隆明	萩農林事務所
2	中原	徹也	防災指導員・安全協会 副分会長
3	原	哲郎	農事組合法人うもれ木の郷
4	田中	敏雄	農事組合法人うもれ木の郷
5	中野	洋子	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
6	黒川	慶子	四つ葉サークル
7	坂井	伸伍	山口大学 剣道部主将人文学部 2年 (企画・司会進行役)
8	加藤	明孝	山口大学 剣道部教育学部 1年

参加者 グループ④

1	古谷	普悟	JA あぶらんど萩
2	野崎	匠	萩農林事務所
3	原	勝志	農事組合法人うもれ木の郷
4	池田	誠	農事組合法人うもれ木の郷
5	池田	悦子	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
6	原	啓子	農事組合法人うもれ木の郷・四つ葉サークル
7	佐古	千尋	山口大学 剣道部女子主将人文学部 2年
8	石橋	かれん	山口大学 剣道部マネージャー人文学部 2年

オブザーバー

1	石田	雄一	阿武町役場 総務課
2	矢次	麻由子	萩ケーブルネットワーク
3	辰己	佳寿子	山口大学 エクステンションセンター 准教授





←阿武町役場総務課広報担当、石田雄一が写真を撮りました。

## 周防大島町からのご挨拶

～浮島の魅力と課題を浮き彫りに～

椎木 巧

Shiiki, Takumi

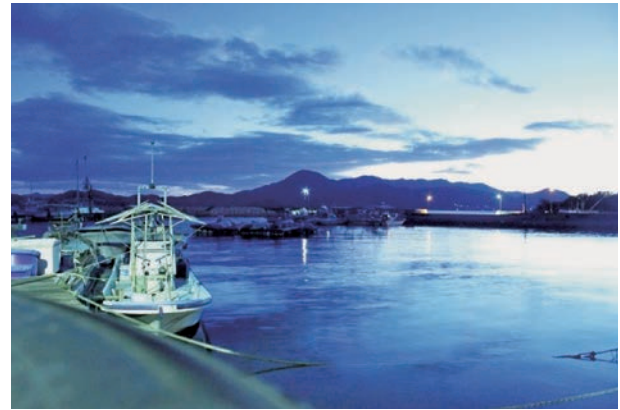
(周防大島町 町長)

昨年夏に周防大島町浮島で「浮島型 U ターン現象の謎を探る・2012 熟議 in やまぐち周防大島・浮島編」が開催され、大変興味深く見守らせていただきました。

農山漁村の一次産業の担い手については社会問題となっており、特に過疎地、離島では深刻な状況であります。その原因のひとつは3K（キツイ 汚い 危険）労働と言われ敬遠されております。しかしながらその一次産業で経済的自立が可能であれば話は別です。若しかしたら浮島はそんな島かも？です。

浮島地区の基盤整備に長く関わってきた私とし

ては、島の方々は非常に進取の気性に富んでいると感じます。漁港整備や加工場の用地造成、更に上下水道、島を巡る周回道路等、町と一緒に積極的に取り組んできました。特に下水道は町内で一番早く 100%整備されています。漁業においても漁法の改良や最新鋭の加工場など常に一步先に向かって取り組み、土曜日の休漁日も徹底しています。これらの現状に加え今回の熟議では島の子供たちの教育問題や漁業者としての悩み、更には島の高齢者福祉等、正に生活に密着した問題を現役大学生と掘り下げ、島の魅力と課題を浮き彫りにする試みに大きな期待を寄せています。



椎木 巧 (しいき たくみ)

周防大島町 町長

出身：大島郡周防大島町（旧橋町）、昭和23年生まれ

昭和40年4月 旧橋町役場 奉職

橋町役場 総務課長、

平成16年10月 大島郡が合併し周防大島町では

周防大島町 副町長 を経て平成20年11月 より現職（2期目）

## 周防大島町の紹介

～ひと・まち☆キラリ 周防大島町～

中尾 豊樹  
Nakao, Toyoki

(周防大島町役場議会事務局 事務局長)

### 1. 周防大島町のマスコット・キャラクター

山口県東南部に位置し、瀬戸内海に浮かぶ島では3番目の面積を有し、島と本土とは大島瀬戸を渡る大島大橋によって連結しています。金魚のかたちをしているとよく言われます。地勢は全般的に山岳起伏の斜地で600m級の山々が連なり、海岸部に狭隘な丘陵地が広がる程度で、大半を山地が占めており、年間平均気温15.5℃と比較的温暖的な、青く澄みわたる瀬戸内の海と四季の彩り豊かな美しい自然を有する町です。2012年3月1日現在で周防大島町の人口は18,854人、世帯数は10,139、高齢化率は48.21%です。



周防大島町のマスコット・キャラクターは、「みかトト」と「みかキン」です。周防大島の特産品である「みかん」と「さかな(トト)」が合体した



『みかトト』。そして「みかん」と「金魚」が合体した『みかキン』です。デザインは浮島出身で、東京でご活躍中のグラフィックデザイナー新村則人さんです。

### 2. 高齢化を嘆くよりも現状認識を…

2004年に、大島町、久賀町、橘町、東和町の島内4町が合併し「周防大島町」となりました。島が1つの行政区となり町がひとつの方向に向かって進んでいます。周防大島町が、新聞などの話題にのぼるとき、高齢化率が国内で上位から第〇位や、限界集落など寂しい町のイメージが多いようです。確かに、町内の高齢化と過疎化は現実の社会状況です。しかしながら、限界集落を嘆くよりも、現状を再認識することが重要ではないでしょうか。住民が、島の資源、島の生活の質の高さなどを、外からの視点を通して改めて体感(実感)できれば新しい展開が可能となるのではないのでしょうか。

どのような地域づくりが必要なのかを考えた際、「集落で子供の声が響き、地元で生活できる産業が創造される地域づくり」と要約することができ、以下の4つが重要であると思います。

1. 現在の生活の素晴らしさを地域外からの交流を通して周防大島を見てもらうことにより、質の高さを再認識してもらう。
2. 地域に誇れる何かがある。
3. 地域に歴史ある産業がある。
4. 地域から産出される産品は素材産品でなく加工産品である。

これらを視点に周防大島町を紹介していきます。

### 3. 地域資源の活用

#### 3-1) 交流事業

周防大島町では、2011年度から本格的に中学校高等学校の修学旅行の受け入れを始めました。昨年までの3年間で62校9800人余りの生徒が周防大島町を訪問し、農業・漁業体験等を行いました。日ごろ、私たちが忘れかけていた島のすばらしさを中学生、高校生が教えてくれました。



修学旅行だけでなく、「島の暮らしをおすそわけ」という理念で、周防大島町の四季が体験できる交流活動も行っています。年4回募集される「春・夏・秋・冬」の各々のコースでは、大島特産のミカンを使ったみかん缶詰やおばあちゃんの知恵袋から引き出された料理づくりやしめ縄づくりなど周防大島の生活の一部が体験できます。



## 2.2) 自然資源を守る

周防大島町の地域資源としては、明治維新での

地域が果たした史実、地域が排出した人材、地域の自然環境の良好さ、生育する植物などがあげられます。

なかでも、今、最も注目されているのが、ニホンアワサンゴです。環境省は2013年2月28日、周防大島町の旧東和町の一部の海域を大規模なニホンアワサンゴ群生が広がる海域を海域公園地区に指定しました。この地域では、指定された5種類の生き物の採取が規制されます。

周防大島町は、2年前に国に要請し、とんとん拍子で実現したのは、海洋に保護区を設け、生き物たちを守るのは世界全体の課題であること、環境省の生物多様性保全戦略のひとつとして海域公園の拡大は重要な手だてであることが背景にあります。同時に、こうした潮流と住民の熱意がうまくマッチしたという点も看過することはできません。「アワサンゴの海を守りたい」と住民がひとつになった活動も周防大島の特徴であるといえます。



アワサンゴは「海の花束」とも呼ばれます

## 3.3) 農業・漁業の基幹産業と加工品

規模は縮小されたが第1次産業は現在も名産として市場性は残っており、生果実、鮮魚として市場出荷を続けています。地域で採れる農産物や魚介類を加工し、地域内で販売する6次産業化の兆しが見えてきたところです。

これまで、生活改善グループ、農協婦人部など地域の女性グループが加工品開発を行ってきました。数多くの特産加工品が開発されましたが、みかん缶詰などごく一部しか商品化されていません。最近になって、周防大島町にUターンやIターンしてきた方などが加工品開発を行い独自の流通経路を開拓し販売を行っています。消費者の購買意欲をくすぐる製品をいくつか紹介しましょう。



←「骨から愛して」  
浮島の別荘管理人の  
杉鶴彦さんの味付けイリコ



↑「オイルサーディン」  
「ひじっ子」  
オイシーフーズ  
浮島の新村一成さん



↑「イチジクジャム」など、  
瀬戸内ジャムズガーデン 松嶋さんのジャム

地域資源とは、自然資源のほか、特定の地域に存在する特徴的なものを資源として、人的・人文的な資源をも含みます。周防大島町に住む人々や組織的な活動、そして、その背景にある人々の想いは、周防大島が誇れるものです。

#### 4. なぜ、浮島なのか

浮島は、周防大島町の日前港から北約5kmの瀬戸内海に浮かぶ島です。本土との間には1日4往復の定期船が運航されています。浮島内には、島の南側に江ノ浦、北側に樽見の2集落があり、それぞれ漁港や集会所が整備されています。浮島の人口は230人、世帯数100、高齢化率42.17%（2012年3月1日現在）です。

浮島周辺は、好漁場で初夏から初冬までカタクチイワシ漁で島は賑わいます。沖で取れたカタクチイワシは、高速船で島内にある加工場へ持ち帰

ります。すぐさま、熱湯に潜らせ乾燥させると、イリコとなります。浮島産イリコは県漁連を通して全国の販売店で売られています。

周防大島町の特産である温州ミカンは昭和30年～40年代にかけ農業政策により水田から柑橘園に転換されました。同様に、浮島でも斜面の多くが柑橘園地に転換されました。しかし、昭和40年代後半から50年代初頭のミカン価格下落により農業から漁業に軸足が移っております。自然食品が評価されはじめた時期やイリコの消費量が増加した時流もあり価格の下落に遭遇することはありませんでした。昭和50年代は、現在の浮島漁業を担っている漁業者がUターンしてきた時期でもあります。地域に第1次産業、第2次産業が存在し、イワシ網漁と片ロイワシ加工が浮島の産業の柱となっています。現在も、若者が漁業に就業しており、離島という立地不利地域でありながら島内にある小学校は健在で現在7名の児童は4月から11名（転校見込みの児童2名を含む）になります。浮島は小さいながらも、地域づくりの4つの条件を満たしていると思います。この小さな島の地域づくりが、農山漁村復興のモデルとなるのではないかと考えています。



#### 中尾 豊樹（なかお とよき）

周防大島町役場 議会事務局 事務局長（2013年3月末で定年）

出身：周防大島町

1952年7月生まれ。大学卒業後2年間民間企業に勤務し、1978年に旧橘町役場奉職。2013年3月には、34年間の役場へのおつとめを終え、第二の人生をスタートさせる。現在、山口大学経済学研究科修士課程に在籍中で、周防大島町（特に浮島）の地域づくりについて修士論文を執筆する予定。2012年3月の「熟議 in やまぐち」ではグループ⑧「安心・安全」に参加し、「熟議キャラバン in 周防大島町・浮島」では影のプロデューサーとなる。



# 山口大学 ミニ熟議キャラバン 浮島

## 浮島型Uターン現象の謎を探る

農山漁村の担い手問題が大きな問題となっており、各地でUIターン取り組みが行われています。Uターンといえば、定年退職後に地元に戻る傾向が強いのですが、浮島では比較的若い時期に戻ってくる傾向が強いのです。浮島には、この不思議な現象はどのように起こっているのでしょうか。浮島には、人々を惹き付ける磁場があるのでしょうか。そこで、浮島の魅力や悩みについて「熟議」を行いたいと思います。いつも顔を合わせている島民と浮島が初めてという山口大学の教職員や学生とのグループで、ウチ側とソト側の目線を交差させてみませんか。

### <プログラム>

- 14:30～14:40 **ご挨拶** 平野和生（周防大島町・浮島住民代表）  
富平美波（山口大学エクステンションセンター長）
- 14:40～14:50 **解題「何が謎なのか」**（周防大島町民 中尾豊樹）
- 14:50～15:00 **発表「浮島再発見」**（浮島小学校教員 河島洋光）
- 15:00～17:00 **グループ熟議**（各グループに分かれて意見を出し合います）  
（休憩含む） **テーマ「①子供の教育」「②漁の魅力と悩み」「③高齢者福祉」**
- 17:00～17:30 **各グループの発表、講評**  
※お子様連れも歓迎いたします。なお、終了後に交流会を予定しています。

熟議とは、協働を目指した対話のことをいいます。多くの当事者が集まって、課題について学習・熟慮し、議論をすることにより、互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、解決策が洗練され、施策が決定されたり、個々人が納得して自分の役割を果たすようになるプロセスです。

日時：2012年**8月26日**(日)14:30～

場所：江ノ浦公民館

主催：山口大学エクステンションセンター 後援：周防大島町

## 浮島住民代表からのご挨拶

～「熟議キャラバン in 浮島」開催にあたって～

平野 和生  
Hirano, Kazuo

(周防大島町浮島 漁師)

皆さん、こんにちは。お暑い中、お集まりいただき、ありがとうございます。御苦労さんです。

僕がこの企画を聞いたのは、中尾議会事務局長を通じて2カ月前です。僕の最大の欠点ではありますが、話をいただいたら、よお、断わらんですよね。

山口大生と話しをすることも、めったにないことでありますし、特に、「浮島型Uターン現象の謎を探る」というテーマに興味をひかれました。

浮島は、島の斜面が多いことから、かつては柑橘園地がたくさんありました。しかし、昭和40年代後半から50年代初頭のミカン価格下落により農業から漁業に軸足を移したという歴史もっております。今では、イワシ網漁と片ロイワシ加工が浮島の産業の柱となっています。

浮島は、古くから周辺が片ロイワシの好漁場であり、沖で捕ったイワシは、すぐに島内にある加工場に搬入されイリコに加工されます。自然食品が評価され初めた時期に、イリコの消費量が増加し、価格の下落に遭遇することはありませんでした。ただ、今、一番の不安な点は、資源の減少・枯渇です。

昭和50年代は、現在の浮島漁業を担っている漁業者がUターンをしてきた時期でもあります。この私も、Uターンをしてきたひとりです。現在

も、若者が漁業に就業しており、離島という条件不利地でありながら、浮島内にある小学校は健在で、現在7名の児童は4月から11名になります。

特に、今、保育園児が増えています。この前は、ひろし君のところにも4番目のお子さんが生まれましたから、保育園児以下が11人ほどおられるわけですね。山口県下では萩の見島と萩の大島以外で、こんなに子どもがいるところはありません。

そういう意味で、今回、浮島が山口大学の目に留まったのではないかと思います。

今日はざっくばらんに話しをして、有意義な会にしたいと思います。よろしくお願いします。



平野 和生 (ひらの かずお)

漁師、周防大島町 町会議員

出身： 周防大島町浮島

大学卒業後、2年間大阪で会社勤めの後昭和58年に浮島へUターン

平成15年 橘町議会議員

平成16年 周防大島町議会議員

平成16年から浮島漁協組合長 山口県漁協浮島支店運営委員長を歴任

## 浮島小学校からのご挨拶

～よそ者からみた浮島の魅力～

河島 洋光  
Kawashima, hiromitsu

(周防大島町立浮島小学校 教員)

浮島小学校の河島です。いつも学校に協力していただきありがとうございます。

私は、浮島に住んでいるのは酒を飲んだ時ぐらいで、いつもは平生町から通っています。

出身は鹿児島県の徳之島というところです。18歳まで徳之島にいて、高校卒業後下関の水産大学校に入学して水産加工や食品加工を学びました。大学を卒業して徳之島に帰り12年ぐらいサトウキビから砂糖を作る製糖工場でクレーンを操作したり、溶接や旋盤をしたりしていました。また、畑を借りてサトウキビやジャガイモを作っていました。

36歳の時、通信教育で免許を取って山口県の教員になりました。これまでに平生小学校に5年間、椋野小学校に3年間、鳴門小学校に3年間勤務し、この春浮島小学校に来ました。

島嶼部出身という点で共通した部分や大学が水産関係だったと経歴から、椋野小に勤務していた頃からいつかは浮島に行ってみたいと思っていました。島嶼部で生まれ育ったとはいえ、地理的環境や伝統文化がかなり違う島の出身なので、そのような観点から浮島について語らせていただきます。もし、間違っていたらすみません。私の考え方や浮島の現状が違うかもしれませんがよろしくお願いします。

まず、海がきれいですね。空もきれいだし、空気もおいしいですね。ただ、広い海でつながっている分海岸にゴミが沢山打ち上げられてあるのはしょうがないですね。私の故郷もそうでした。それと、とっても静かですね。大きなトラックが走ることはないし、暴走族がいるわけでもない。たまにマフラーの壊れた車が走ってきてうるさいことがあります。

私の出身地の徳之島は周りが太平洋と東シナ海の外海に囲まれた島です。サトウキビやジャガイモ、肉用牛の生産が盛んな農業中心の島ですが、漁師さんもいます。しかし、夏は台風の接近、冬は季節風の影響で波が高くなり漁に出られない日が多いようです。今、ちょうど、台風が直撃しそうなので心配でたまりません。

地理的な環境からみると、浮島は静かな瀬戸内海に位置するので、よっぽどの事がない限り漁を休むことはないでしょうから計画的な漁業が出来るのではないのでしょうか。市場にも近いですしとっても恵まれていますね。

また、子どもたちと話していたら、土曜日に宮島に行ったとか、動物園に行ったとか、水族館に行ったとかという話を聞きます。柳井市や広島市、岩国市、下松市などに近くて、レジャーや医療施設の面でも恵まれたところにあると思います。私の故郷徳之島から鹿児島市に行くには、飛行機を使っても2時間、船だと約16時間もかかります。同じ島嶼部でも浮島は条件的には素晴らしいところだと思います。

浮島は、車を持っている家庭が多いですね。それに大島の方にもう一台置いている家庭もあるようです。また、船を持っている家庭もありますから交通の便はとても良いと思います。

浮島のみなさんは買い物でもたぶん大きな街に行かれると思います。私が思うには、交通の面では、支障がないような気がします。広島市や岩国市に行ったり柳井市や下松市に行ったりと、どんどん出て行けますよね。

一方で、よその人が浮島に来るのはちょっと来づらいのではないかという気がします。浮島の人以外には出て行くのは簡単だけど、島の外の人がかっちに入ってくるのにはちょっと壁があるよう

なそんな気がします。それがまた、良いところだと思います。島の生活様式や文化がいつまでも守られていますよね。

次に、浮島では子どもがたくさん産まれているという話を平野さんがされていました。私の故郷徳之島もそうです。徳之島はなかなか合併出来ない小さな町が3つあります。合計特殊出生率、つまり、赤ちゃんが産まれる割合は全国でいつもワン・ツー・スリー、トップですよ。すごいことです。子どもがよく産まれます。なぜかという、じじ・ばばが近くにいて子供を預けやすい、ご近所さんに頼みやすい。こんな環境なので子どもを育てやすいんですね。浮島とよく似ていると思います。おじいちゃん、おばあちゃんも近くに子ども夫婦や孫がいたら生活に張りがあると思うのでいいのではないかなと思います。

それから、田舎なので、ネオン街もないし、パチンコ屋もないし、競馬もありません。寂しい面もありますが、今の世の中は誘惑が多いので、真っ直ぐに生きていくのがむずかしい時代です。そういう誘惑が無いから真っ直ぐに生きていきやすいのではないかと私は思います。

次は、子どもについてです。じじ・ばばをはじめ、地域のみなさんの温かい目で見守られているので、子どもたちはのびのびしているのではないかなと思います。それから、サラリーマンと違って親が汗を流して働いている背中を見て育っていますし、お手伝いもよくしているようです。とても良いことだと思います。

それから、私は浮島の漁を体験したことはないですが、魚を殺してという言い方はおかしいですけど、魚の命をいただいて皆さん生活していますよね。子どもたちもそういうことを見て育っているので、命の大切さも自然に身に付いているのではないかなと思います。

それから、ちょっと恥ずかしいのですが私の故郷徳之島は、選挙が激しい時代がありました。今はそうでもないのですが。全国的に選挙で有名になってしまったものですから、私は大学時代には徳之島出身者と名乗ることはできませんでした。恥ずかしくて…。今は、新聞等で世間の煩わしい事や、国会議員のずるいところなどをたくさん見たり聞いたりしているので、どこも一緒だなと思っています。

自分の故郷の良いところは、外に出て気づいたところもあるので、自分の故郷を紹介しながら語らせていただきました。浮島の詳しい事はわかりませんが仲が良いのではないのでしょうか。私の故郷の徳之島は選挙の時、つまり四年に一回は大げんかをして大変な島だったので浮島の皆さんがうらやましく思います。

これで浮島についての発表を終わります。ありがとうございました。



## 河島 洋光 (かわしま ひろみつ)

周防大島町立 浮島小学校教員

出身： 鹿児島県徳之島

高校卒業後、下関の水産大学校に入学して水産加工や食品加工を学ぶ。大学卒業後、徳之島に帰るものの、36歳の時、通信教育で免許を取って山口県の教員になる。これまでに平生小学校、椋野小学校、鳴門小学校に勤務し、この春、浮島小学校に赴任してきた。

## グループ① 子供の教育

## 親の目からみた浮島の子供たちの成長

～浮島を担う子供たち、浮島から旅立つ子供たち～

辻 多聞

Tsuji, Tamon

(山口大学 大学教育機構学生支援センター 講師)

## 1. はじめに

浮島のような小さな離島は人口がそれほど多くなく、それにともなって子供の人数も少ない。よって小学校で1学年に100人からいるような都会と比べると、同学年とのつながり（情報の交換や共有）が小さくなってしまふことが予想される。そのような状況のなか、島の子供たちが幸せに成長していけるのか、より子供たちが幸せになるための教育法とは何か、また成長した子供たちに島として何を望むのかを熟議することにした。

## 2. 熟議の内容

## (1)教育の現状

- ・ 共働きをする必要性があり、子供は1歳から保育園に通わせる。保育園は島外にある平井保育園となる。
- ・ 島内唯一ある学校は小学校であり、現在、先生4人、子供7人である。校長先生はよろずやのようで、事務仕事もしている。
- ・ 中学校以降は島外に通うことになる。

## (2)子供の様子

- ・ 小学校では、いじめがない。
- ・ 島民以外と会うことが少ないから小学生の子供たちは、人見知りぎみ。
- ・ 島で、通信教育を受けている子もいる。
- ・ 一般に島外の子供と比べると流行に鈍感な傾向にあるようだが、島のほうが性情報(下ネタ)の取得に関しては早いかもしれない。

## (3)子供の教育に関する親としての懸念事項

- ・ 島内ではほぼ全軒と家族付き合いがあり、みんなを知っている状態である。よって子供たちは中学からいきなり人付き合いが始まるようなものである。
- ・ 野球やサッカーといった集団スポーツに関し

て、子供の人数が少なく、また指導者もないことから学ぶことがあまりない。このことは集団生活への不適應につながる可能性がある。また個人スポーツに関しても、あまり活性化することがなく、スポーツによってもたらされることが期待できる精神育成の機会が失われている感が否めない。

- ・ 中学を出てすぐに働く子がいるが、お金の使い方をおかたがわかっていないように思われる。
- ・ 島外の場合、保育園、小学校（私立）、中学校（私立）、高校と選択していくことが普通であるが、浮島では高校からはじめて選択できるようなものである。また仕事に関しては、島で見られる仕事は、役場、農耕、学校、漁と限られており取捨選択するという意識がつきにくいかもしれない。この状況は裏返すと、都会の子供の傾向としてよく耳にする、どこに就職したいか、何をしたいか分からないという子供が少ないという捉え方もできる。
- ・ ず～っと島、都会を知らない、という状況は少し不憫にも思う。

## (4)子供たちへの願い

- ・ 人生には様々な人と出会っていくことが大切



だと思ふ。島の生活だけでは仕事に関する出会いしかないと思われる。様々なシーンの様々な人との出会いを是非大事にしてもらいたい。

- ・ 1回は島外に出て見聞をひろげて帰ってきて欲しい。一方で子供が情報を知ること、他の地に住み過疎化している例を聞いたことがあり、浮島がそうならないことを望む。
- ・ 私は大学に行きたかったが家の事情でいけなかった。子供には行かせてあげたいと思っている。
- ・ 船で10分あれば広島に到着でき、実際街までがそれほど離れているわけではない。本島に車をおいておき、すぐに街まで出られる。昔は身内との結婚が多かったが、こうした都市との交流（都市での出会い）を通じて結婚してくれることも望ましい。仮に子供が島をでたいというのならば、さみしいことではあるが、それは子供の人生なのでかまわないと思う。

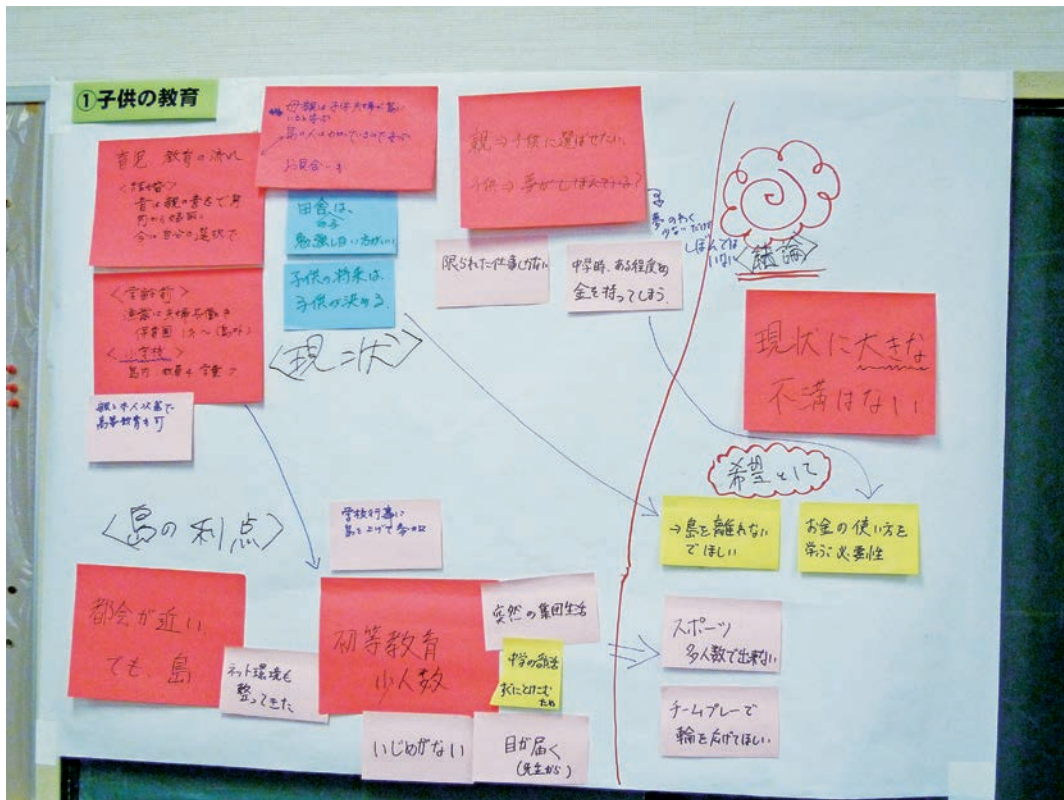
### 3. おわりに

基本的には、島民は子供の教育に関して、教員の目がよく行き届いていることもあり、大きな問題や悩みを抱えている様子はなく、現状に満足しているようだった。しいて言うならば、子ども達

の高校からの集団生活への適用に関して不安、小学校でのスポーツ教育（集団競技等）の不足があげられ、この改善策の検討が必要かもしれない。

子供が都会に出ることを嫌がってはいないようだが、島民が減少していくこと、高齢化につながることは辛いように思われた。

今回の話し合いでは、子供自身からの意見は反映されていないため、子供目線での島での教育の良さ、悪さをあげてもらうことは必要であるように思われる。また現在の子供たちが将来困ってくるであろう問題への対処能力等は、現在推し量れない。それを予想していく話し合いもあっていいかもしれない。



グループ② 漁の魅力と悩み

## 漁を通じて生まれるやりがい

～漁の魅力と島の魅力～

清水谷 卓  
Shimizutani, Takashi

(山口大学 大学研究推進機構研究推進戦略部  
リサーチ・アドミニストレーター (URA) )

### 1. はじめに

各地の農山漁村で UJI ターンが推進されているが、その地に住んで生活していくだけの収入があるかという現実的な課題が浮上してきている。本グループでは、浮島の基幹産業である漁業について 10 歳代の漁師も参加し、幅広い年齢層、漁業に携わる人とそうでない人々の間で熟議を行った。主に、漁の現状、漁の魅力と悩み、課題について意見を出しあった。



### 2. 熟議の内容

#### <漁の現状>

- ・ 昔は 4 分の 3 が農業だった。オレンジの自由化でみかん農家が打撃を受けた。
- ・ 20 年ほど前まではそれほど魚が取れなかった（当時、毎日、昼にも漁に出ていた）。
- ・ 漁の時間を決めた。毎週土曜は休み。
- ・ 魚群探知機を取り入れた。
- ・ 最近、熱帯性の魚が増えた。
- ・ フグが安くなった。海外での養殖が影響？
- ・ タチウオの売り方が変わった。容器にラップ、上に魚をおいてさらにラップ。
- ・ 瀬戸内での養殖は赤潮、台風被害、育つのも遅いという問題がある（カキを除く）。
- ・ 需要供給バランスをうまく取れるかが大事。

#### <漁の魅力>

- ・ 集団漁業（6 名一組のイワシ網漁）のため先輩が手取り足取り教えてくれる。他の地域には見られない。漁業の基盤がある。
- ・ 漁協組合は絶対的存在。
- ・ 漁業以外に仕事がない、他で働く魅力がない。
- ・ 若者にとっては、農業は魅力がない。漁業は魅力がある。給与に関して 30 年経験者と 1 年生経験者は同額である。
- ・ 農業だと収入が入るのが年に 1、2 回であるが、漁業は直接的な収入を得ることができる。
- ・ 一人がいくつも船を持っている。
- ・ 自分次第で頑張れば頑張るほど儲けは上がる。
- ・ なかでも、タチウオは、やればやるほど売り上げにつながり、やりがいがある。
- ・ 浮島のいりこはブランド力がある（銀座でも高く売られている）。
- ・ サンマ、サケ、イカもおいしい。
- ・ U ターン者はほぼ漁業の従事。

#### <漁の悩み>

- ・ 漁は能力が問われる→周りのやっかみもある。
- ・ 取りすぎないように制限をかけられる。網目の大きさなどの制限が厳しくなっている。
- ・ 瀬戸内海だけではとれる魚に限られる。
- ・ 魚の単価が安定しない。
- ・ 20 年前の単価と変わらない（低値安定）。
- ・ 離島だと市場に持って行くまで手間がかかる。
- ・ 燃料が高騰して懐に入るものが少なくなった。
- ・ タチウオはやりがいがあるが、冬の時期は赤字が多くリスクも高い。イワシとタチウオの時期が重なる。
- ・ 規制緩和で外国からの商品があまりに多く安く入ってきている。TPP の問題が心配だ。

- ・ 1次産業の収益少。商品価格が低い。
  - ・ 複合的な原因→地球温暖化、市場の状況など。
- <対策案>
- ・ 無添加のいりこを売りとした販売戦略。
  - ・ 若者へのアピール（いりこを使ってもらう）。
  - ・ 情報収集。宣伝。ブランド力。宣伝用の歌。

### 3. おわりに

浮島の主力となっているイワシ漁はチーム制となっており、相互扶助的な社会関係を基盤に漁業の技術を学ぶことができる。一員になれば若者でも高収入が得ることができ、漁の魅力のひとつとなっている。Uターン者の多くは漁業に携わっており、Uターンしても余裕をもって生活していくだけの収入があることが大きな要因の一つである可能性が高いことがわかった。ただし、収入だけではなく、浮島の家族や地域社会の相互扶助や生活環境などの不可視的な側面も大きく影響していると思われる。祭りや小学校の運動会等は地域社会全体をあげて行われるとの情報もあったので今後、経済的側面と社会文化的側面からUターンしやすい環境とは何かを考える必要があるだろう。

Uターンの議論だけでなく、島外に出ていない

10代の若者たちからは「漁師になったのは選択肢がなかったから」という発言もあった。Uターンしてきた漁師とそうでない漁師、このギャップをどう捉えるべきなのかという課題も残った。

その他の課題としては、海洋資源の枯渇と需給バランスである。かつて養殖業に取り組む時代もあったが失敗したため、海洋資源に依存せざるを得ない状況になっており、「今はイワシが獲れるからよいが、イワシがいなくなったら…」という声も聞かれた。さらに、一般的に消費者の食生活の変化から魚介類を食べる機会が減っているため、販売戦略の必要性、今後に向けて市場変動に敏感に対応する漁・養殖業の必要性が議論された。



### ファシリテーター



清水谷 卓（しみずたに たかし）

山口大学 大学研究推進機構研究推進戦略部 リサーチ・アドミニストレーター(URA)

出身：鳥取県米子市出身

2010年9月より山口大学産学公連携・イノベーション推進機構産学連携コーディネーターとして山口大学に着任。2012年6月より現職。「熟議 in やまぐち」では、グループ②「地域連携型研究」の学内ファシリテーターを担当。



グループ③ 高齢者福祉

## 相互扶助と福祉システムとの両機能の必要性

～幸せとはなにか～

辰己 佳寿子

Tatsumi, Kazuko

(山口大学 エクステンションセンター 准教授)

### 1. はじめに

浮島は、Uターンする人が多い、他地域に比べて子どもが多いといっても、浮島が超高齢社会であることは間違いない。高齢者福祉の問題は切実であり、一般的な福祉の問題と離島ならではの問題が存在している。本土と浮島の連絡船は、一日4便のみである。また、緊急の場合、所有している漁船で移動するにしても、悪天候であれば船は出せない。本グループでは、高齢者福祉について、まずはそれぞれの立場から、身近な問題を出し合うことから始め、その後、何ができるかという対応策を話し合った。



### 2. 熟議の内容

<村：島の社会の特徴>

- ・ 村の長 大年寄の存在。
- ・ 19年前は浮島で火葬していた。  
(火葬場のプロがいて、穴があって藁で焼く)  
(葬式の段取りする人がいた)
- ・ 農協はきついが漁協はゆるい(農協漁協の差)。
- ・ 組織のおそろしさ
- ・ イワシは半年だけ。
- ・ イワシ加工には高齢者も参加できる。

- ・ 12年前イワシが不漁(継続性への不安)。
- ・ 漁業から農業へのシフト(引退後)
- ・ 島の魅力：島外へ出た時から帰ってくると決めていた。

<介護の問題>

- ・ ひきこもりの高齢者の存在(男性引きこもり傾向 女性は比較のお出かけをする)。
- ・ 高齢者の食事の問題。食べなくなる。
- ・ 病院に行かない高齢者。
- ・ 一人暮らしの方の病気などに気づけない。
- ・ 高齢者自身の自己認識も必要。
- ・ 寝たきり老人の介護。
- ・ 施設に預けることに関しての罪悪感。
- ・ 家族介護 24時間で見られない(自宅介護)。
- ・ 介護の役割は誰が負うのか。
- ・ 家族介護の限界。
- ・ 介護は主婦が主となってくる。
- ・ 介護者の高齢化。
- ・ 介護は島全体としての課題。
- ・ 島内にグループホームが必要。
- ・ 浮島だけで整っていたら過保護？
- ・ 島内に介護のセミプロが必要。
- ・ 島内にショートステイ施設があればよい。
- ・ リハビリ日常的なケア。
- ・ 緊急船で島外へ(悪天候に左右される)。
- ・ 島内の介護機能と島外の施設の利用の両立。
- ・ 共同介護センター要員確保
- ・ 将来、介護保険料が増え年金がほとんどとられてしまうのでは

<対策>

- ・ 島内の介護業の設立(若者の就業の場)。
- ・ NPOの島内への誘致。
- ・ お弁当配給システムの構築。
- ・ 子どもも高齢者も給食システムの構築。

- ・ 地産地消の儲かるシステムの構築。  
→ビジネスとしてどう結び付けるか。

<幸せとはなにか>

- ・ 病院は生きる上の最低限しか与えない。
- ・ 地域に住んでいることが幸せ、お金じゃない。
- ・ 今は幸せだが 10～30 年後が幸せかどうか。
- ・ 複合的な生き方が必要ではないか。
- ・ 今どきの若者の幸せとはなにか。

### 3. まとめ

高齢者の介護の多くの問題が存在していることがわかった。現在はよいが将来的に不安という声もあり、一般的な高齢者の抱える問題と離島ゆえの問題に分けられる。まずは、誰が介護をするかという問題があがり、相互扶助的に家族や地域社会で介護することは基本であるが、そこにも限界があるため、福祉システムに頼らざるを得ない状況であることがわかった。島内でできる限りのことは行っていくが、島内での対応と島外の施設利用とをうまく両立させることが重要との意見があった。

では、島内で何ができるのか。高齢者の対応策も様々であるが、ここでは、特に「食」の対応策に焦点があてられた。なぜなら、高齢者がひとり暮らしになると食事をするのが面倒になり、食べなくなる傾向が強く、そこから心身の衰弱が始まる確率が高いからである。介護の段階に至る前の健康管理や日常的なケアは島内で取り組むべきこととして共通見解をもつことができた。

島内にどのようなシステムが必要かという点では、セミプロ（たとえば引退した看護師等）の方々を中心としたケアのシステムをつくるであるとか、お弁当配給システムをつくるという意見がでた。

かつては島内唯一の商店がお弁当をつくっていたこともあったが、現在はそのサービスは休止している。たとえば、地産地消弁当をつくる組織（NPO など）を誘致したり、島内組織化してはどうかという提案もあった。その他に、給食（子供も高齢者も含めて）との連携する提案もあった。ただし、これらを実現していくためには、システムを実施していくための体制づくりであり、まずは熟議のようなかたちで意見交換をする場が必要なのではないかという見解に至った。

これらの議論は、「幸せとはなにか」という普遍的なテーマが背景にあるため、後半はこれらの点についても話し合いが行われた。結局、福祉を考えるということは、人間がどう生きるかという点と乖離できないため福祉サービスという機能的な側面をこえた熟議になった。浮島の住民からは、「浮島で住んでいること自体が幸せ」という発言があり、浮島の魅力を改めて考える機会をもつことができたといえる。





阿部 啓からのメッセージ (経済学部2年)

島の高齢者福祉についての熟議に参加した。抱えている問題は本土と同じなのに、それを解決するための策がやはり”島”という環境の中では難しくなる。施設の設置であったり、本土への送り迎えなどまだまだ課題は残ったままである。途中、幸せについてなどで議論が脱線したようにみえたが、誰にとつての幸せが高齢者福祉につながるということが垣間見えた気がした。

私はこの浮島での熟議に参加前、浮島に何か与えることができるのだろうか、また自分がどんなことを得られるだろうかと不安と期待が交差していた。けれども参加してみて、気になることを聞き、聞かれたことに答える、互いの持っている情報を交換してじっくり考え議論するというもので全く小難しいことは無かった。むしろ楽しい経験となった。

実際に島を巡って発見したのものたくさんあって、熟議後はより深く仲良くなって夜は語り明かしたりして、学内では決してできなかったであろう、貴重な体験をすることができた。



## 「熟議キャラバン in 周防大島町・浮島」に参加して

～不思議な空間・浮島～

寺本 明広

Teramoto, Akihiro

(山口大学大学院 農学研究科 2年)

8月27日午前8時、浮島を出る船に乗る前にもっと島内を堪能しようと思い、徒歩で一周に出かけました。夏の暑さもこの島だとさわやかに感じられて、空と海の青色に太陽光に映える島ののどかな風景に魅了されていたら歩いていて疲れることもありませんでした。大学では決して味わえない世界観に時間もすっかり忘れてしまいました。小さな島だと思っていたけど一周してみたら結局2時間もかかっていたようです。まるで別次元を歩いて来たようなそんな不思議な気分。

8月26日に開催された熟議 in 浮島に参加しました。1泊2日の中でたくさんのお会いがあり、たくさん話をしたのですが、その中で個人的に発見したことを書いていきます。

まず、島の皆さんは気さくな方々でした。過疎化が進み、地方ならではの問題が散在しているようでしたが、そんな暗いイメージとは違って島に住む方々の口調は陽気でした。人口密度が小さい分、人のありがたさを常に意識しているのでしょうか。人間関係の中に競争があるわけではなく、年輩の方も若い方もお互いに尊重し合って暮らしていて、外部から来た人間でも受け入れてくれる、そんなあたたかさがこの島にはありました。

熟議では私はグループ②「漁の魅力と悩み」に加わりました。私は漁について何も知らないのですが、どういった話し合いになるのか予想がつかせませんでした。自由にグループを分かれるのですが、漁の

ことしかわからんから…という私の思いとは真逆の参加者もいました。私よりも若い参加者もいて年齢層は幅広く、いろんな意見が飛び交いました。しかし、交流会後に感じたことかもしれませんが、交流会でお酒を交えながらざっくばらんに話すことが今回の熟議の真骨頂だったように思います。親の仕事を継ぐために帰って来た、稼ぎが安定しない、周辺の同業者との関係づくりのこと、女性との出会い、など漁村にまつわる話が明るい口調で語られていました。仕事に悩みはあるけれど皆さん漁にやりがいを持っている、そんな様子を見ることができたのが私にとっての漁の魅力に感じました。私も仕事をするにしろ、学業にしろ、取り組む姿が魅力的であればいいな、としみじみ思いました。大学に戻ってもまた頑張ろうじゃないか、浮島が背中を押してくれているのかな、そんなことを考えさせられるなんて不思議な気分です。とにかく今回の熟議に来てよかったです。

交流会も終わり午前4時、私はすっかり寝ていたのですが、山口大学からいっしょに来ていた方が漁に出る様子を見ていたそうです。漁港に人が集まり大声を掛け合うあわただしい様子、漁船に乗り込み、それを見送る人もいて、何やら戦場に出るような迫力があつたと話してくれました。昨晚の交流会と今朝の島内一周の間にそんなことがあつたとは…。

この島はまだ奥深いです。また行きましよう、不思議な気分を味わいに…。



寺本 明広 (てらもと あきひろ)

山口大学大学院 農学研究科 2年

出身：兵庫県

熟議では学生のリーダー・カメラマンとして活躍。浮島の子供達の心を一瞬にして掴み「山大のお兄ちゃん」と慕われる。卒業後は、山口市のきらら浜自然観察公園にてレンジャーとして飛躍する予定。カメラの腕は超一流。

参加者名簿

1	升田	和史	浮島漁師
2	升田	一生	浮島漁師
3	熱田	聡汰	浮島漁師
4	中村	孝弘	浮島漁師
5	石寄	益夫	浮島漁師
6	石寄	明美	
7	吉村	雄二	浮島漁師
8	桑原	一吉	浮島漁師
9	新村	光之	浮島漁師
10	田中	保彦	浮島漁師
11	砂田	優輝	浮島漁師
12	山根	浩己	浮島漁師
13	村田	嘉之	浮島漁師
14	村田	千春	
15	橋本	直美	浮島漁協
16	橋本	明日香	
17	西川	輝彦	浮島漁師
18	平野	和生	浮島漁師
19	河島	洋光	周防大島町立浮島小学校 教員
20	中尾	豊樹	周防大島町役場議会事務局 事務局長
21	杉田	与博	周防大島町日前港近郊出身、ミカン農園に携わる。
22	富平	美波	山口大学エクステンションセンター センター長
23	辰己	佳寿子	山口大学エクステンションセンター 准教授
24	辻	多聞	山口大学大学教育機構学生支援センター 講師
25	清水谷	卓	山口大学大学研究推進機構研究推進戦略部 リサーチ・アドミニストレーター (URA)
26	原田	道雄	学長戦略部国際・社会連携課 課長
27	渡邊	早苗	学長戦略部国際・社会連携課 副課長
28	寺本	明広	山口大学大学院 農学研究科 2年
29	佐藤	和生	山口大学経済学部 3年
30	阿部	啓	山口大学経済学部 2年

## もう一つの熟議キャラバン in 浮島

～雄大な自然と人の温かさ、そして強い心のふるさと～

編集 辻 多聞

Tsuji, Tamon

撮影 寺本 明広・辰己佳寿子

Teramoto Akihiro・Tatsumi, Kazuko

(山口大学)



周防大島日良居港から出発



熟議荷物を持ち込みます



船に乗り込みます 魚が泳いでる？



1日4便の町営定期船です



風が気持ちいい



チーム YJ (山大熟議)、浮島上陸



まずは腹ごしらえです（笑）



会場の漁村センターで準備



交代で浮島ツアーに行ってみま〜す



瀬戸内ですが、なぜか南国っぽい？



エメラルドグリーンの海



青空とのマッチが素晴らしい



あ！足元にカニ発見！



山から見る風景も絶景です



こじんまりした集落



海沿いの道がどこか懐かしい



浮島といえば漁港でしょ



のんびりと釣りもできます



磐尾神社（江の浦明神）



唯一の学校、浮島小学校



小学校の滑り台、童心に還ります



グローブジャングル！懐かしい！





ゲストハウス「惣吉」がお出迎え



島内唯一の浜本商店でお買い物



浮島のマンホールデザインです



釣り堀？（鰯の排液に群がる魚）



昼間は静かな漁港ですが早朝は（驚）



カタクチイワシ干物製造所



浮島男の背中（シブいっす）



働く浮島女性（凛とした背筋です）



熟議懇親会、まあ一杯どうぞ



みなさんお酒強いです（汗）



カタクチイワシがさらにお酒を進めます



みなさん飲んでますか～？  
こいばなく恋愛話あり



元気な浮島キッズ



お兄ちゃん、見て見て！



起きろお！もっと遊ぶう



飲み会は早朝まで続き…  
漁師はそのまま漁に出掛けて行くのであった



なんだか帰るのがさみしいなあ



お迎いの船が来ました



あ！昨日の浮島キッズ！  
公共の連絡船なのにキッズで貸し切り状態



私たち保育園に行くね！また来てね！



元気を一杯もらった気がします ありがとう、浮島 そして益々の発展を



## 熟議の背景

～根底にあるのは「愛」かもしれない～

原田 道雄  
Harada, Michio

(山口大学 国際・社会連携課 課長)

熟議に携わり始めたとき、どうしてもひとつ引っ掛かる疑問があった。それは、「熟議になると、なぜ、みんなが笑顔になるのだろうか？」ということである。

その原因をいろいろ考えてみると、ミックスジェネレーションなのではないかという結論にいきついた。つまり、世代の違う人たちが、お互いを尊重し合いながら熟議する、そういう知の広場だからなのだ。世代の違う人々と話すことはあるけども、表面的なことが多いように思える。熟議のように、自分の問題意識をさらけ出して老若男女の多様な人々と触れ合うことは、思ったより少ないのではないだろうか。そう、多くの人にとっては、未経験部門ではないのか…。

人を尊重するということは、他人に自分も尊重されるということであり、それが「はぐくみあう」喜びへとつながるのではないだろうか。熟議の目的は、利己的なものではなく、利他的なものである。人々と本音で語り合うと、自分を含めた社会がよくなることが、ひいては自分にもかえってくるという循環のなかに自分がいることに気付くこ

とがある。

極論かもしれないが、熟議の根底には、「愛」があるからではないか。きれいごとかもしれないが、家族愛、隣人愛、郷土愛、愛校心のような、「愛」(変な意味ではない…)をもった人々が織りなす知の広場の仕掛け人として、携わらせていただいたことは、この上ない喜びである。愛があふれる熟議…、その愛をはぐくみ、かたちにしていきたい。



原田 道雄 (はらだ みちお)

山口大学 学長戦略部国際・社会連携課 課長

出身：熊本県

この世に生を受けてから現在まで、日本全国を転々とするジプシー。これまでに暮らした場所は14箇所。山口大学に赴任して国際・社会連携課長に。国際社会であろうと、地域社会であろうと、人間の根本的なものは共通していると「グローバル」を掲げて、山口大学の国際社会戦略に携わる。

「酒に弱い九州男児」であるが、夜の熟議にはちょくちょく顔を出している。2012年3月の「熟議 in やまぐち」では、グループ⑩の「まちづくり～グローバル」に参加。全体の事務総括を担当。

## 熟議の黒子たち

～非日常の背景にある日常の地道な活動～

辰己 佳寿子  
Tatsumi, Kazuko

(山口大学 エクステンションセンター 准教授)

いうまでもなく、熟議は非日常である。非日常の背景には、日常の地道な活動がある。このたび、山口市平川地区、阿武町、周防大島町で、熟議キャラバンを実施させてもらったが、それらが実現することができたのは、地味な仕事をコツコツと進めている事務局があったからである。

熟議を実施するにはさまざまな準備が必要である。関係者間の調整（電話、メール、打ち合わせなどの多様な手段でのやりとり）、会場確保・設営、印刷物の準備、茶菓子（なかには昼食や宿泊も）等の用意、住民への周知、そして、なによりも大事なのは住民の理解を促すための働き掛けである。

熟議だけでなく、まちづくりやむらづくりにおいて、行政や行政的な役割をもつ組織と住民の信頼関係は最も重要となってくる。これまで、地域と山口大学の信頼関係に言及することが多かったが、実は、熟議が実現できたのは、地域のコアとなる事務局と地域住民の間に日頃から信頼関係が構築されていたからである。熟議を開催するには多種多様な主体（個人の場合と組織の場合）が交差するため、一対一の信頼関係では不十分であり、複合的で中長期的な信頼関係がなければ実りある熟議を実現することはできない。



平川地域コミュニティ推進協議会  
(いつもこのテーブルで事務局内の熟議が開催されている)



阿武町役場経済課  
(少人数体制だが機動力は抜群)



周防大島町議会事務局  
(議会議務局長自らが山口大学の大学院生?!)

まさに、各地域の事務局は黒子的存在である。事務局の存在およびノウハウを看過してはならない。非日常である行事では楽しい思い出になることが多いが、日常では、しかめっ面をしながらもやらなければならないことがある。

今回は、熟議の開催だけでホッとされているところに、さらに報告書作成の負担を強いてしまった。原稿の執筆依頼だけでなく、名簿リストの作成や写真や統計情報の提供など、無理な

注文ばかり申し上げては、日常業務をさらに増やしてしまった。「切羽詰まったお願い」「これで最後だから」と言い訳をしながら、五月雨式に依頼をしてくる私の要望にも、笑顔で、さわやかな声で接して下さった（心の中ではムッとされていたかもしれないが…）。「発見し・はぐくみ・かたちにする」なかの、報告書という「かたちにする」にこだわり続けた作業にも最後の最後までお付き合いいただいた。

山口大学内でも社会連携室という事務局が教員の勝手な構想を具現化する役割を果たしてくれていた。学内の熟議は、「ああしたい」「こうしたい」と話しているうちに、突拍子もない方向に進むときがあった。「それが本質的な目的でしたかね?」「予算内では無理ですね」と、クールな笑顔での反応があり、軌道修正してくれるのが社会連携室であった。逆に、停滞しているときには「これならできますよ」「やってみましょうか」と背中を押す役割も果たしてくれた。軸のぶれない、硬派な事務局の存在が、熟議成功の秘訣のひとつであった。

山口大学の使命は、教育と研究であったが、法人化とともに、社会連携が加わった。ゆえに、社会連携は、教育と研究に比べて試行錯誤であるといってもよい。前例がないため、なかなか機能することが難しいのであるが、社会連携室は地に足をつけて、ひとつひとつの実を、大事に大事に信念をこめてはぐくむ姿勢を崩さず突き進んでいる。その姿勢が熟議にも反映され、各地域との連携が実現したといえるのではないだろうか。



山口大学社会連携室の様子  
(軸のぶれない硬派な組織であるらしい)

とかく、私たちは日常を軽視しがちである。あまりにも当たり前すぎて、そのありがたさを見過ごすことがある。日常がなければ、非日常は存在しないはずなのに…。熟議キャラバン 2012 を通して、地域の方々の真摯な姿勢に触れることで、「日常」を改めて考える機会を得た。日常の業務、日常の積み重ね、日常の熟議を意識的に大事にしていくことこそが、それぞれが抱えている課題にアプローチする道筋をつくってくれるような気がする。遠回りのように見えて一番の近道なのかもしれない…。

最後に、「熟議キャラバン 2012 in やまぐち」の開催および報告書の作成においては、多くの方々のご協力によって成し遂げることができた。計画的で論理的な展開で進めてきたわけではなく、困惑されたこともあったと思うが、これまでのつきあいから「まあ、やってみるか」「だまれされてみるか」ということで、乗り切っていたいただいた場面も多々あったと思う。

学生や教職員が日常の暮らしのなかでもお世話になっている平川地区のみなさま、「農村の再生」に長い間住民主体で取り組まれてきた阿武町のみなさま、「漁村の再生」と掲げなくてもあたり前に漁村づくりの当事者としてかかわられている浮島のみなさま、山口大学という突風のような非日常を受け入れていただいたことに改めて深謝の意を表したい。本当は、日常に、そよそよと吹く、心地よい、そよ風になればらと思っているのだが…。

また、熟議に飛び込んでくれた学生諸君、「なんだか楽しそう」「しかたないけどやってみるか」と、どういう動機だったかはわからないが、ふつふつと生まれ始めていた小さな風を「さわやかな風」にしてくれてありがとう。

いつもの夕陽に感謝を込めて、この報告書の幕を閉じたいと思う。







## エクステンションセンター関係者

富平 美波	エクステンションセンター	センター長	(人文学部教授)
長畑 実	エクステンションセンター	教授	
辰己 佳寿子	エクステンションセンター	准教授	
鍋山 祥子	エクステンションセンター	主事	(経済学部教授)
瀧本 浩一	エクステンションセンター	主事	(理工学研究科准教授)
高橋 肇	エクステンションセンター	主事	(農学部教授)
上田 真寿美	エクステンションセンター	主事	(医学系研究科准教授)
原田 道雄	学長戦略部国際・社会連携課	課長	
渡邊 早苗	学長戦略部国際・社会連携課	副課長	
平岡 朋子	学長戦略部国際・社会連携課	社会連携係	係長
河村 有梨	学長戦略部国際・社会連携課	社会連携係	係員
藪 達己	地域連携室	室長	
小室 和輝	地域連携室	室員	

## 熟議 in キャラバン協力者

吉村 誠	大学教育機構	学生支援センター	センター長	(教育学部教授)
辻 多聞	大学教育機構	学生支援センター	講師	
清水谷 卓	大学研究推進機構	研究推進戦略部	リサーチ・アドミニストレーター	(URA)

## 編集後記

編集を行い、改めて「熟議キャラバン 2012 in やまぐち」は、熱い心と行動力をもった多くの方々が出会い融和した「知の広場」であることを実感いたしました。国際セミナーで山田禎夫さんが「3人いれば地域が動く」と言われましたが、まさに、その言葉どおり、各地で熱意をもった方々が、それぞれの地域の特色を生かしながら、生き抜いている背中を見せてもらったように思います。地域を動かすことは、人の心を動かすことなのだという発見がありました。そういう渦のなかに、山口大学の学生も参加させていただきました。学生の個人個人のなかにある何かが動かされているという変化が手にとるようにわかりました。

最後になりましたが、「熟議キャラバン 2012 in やまぐち」では、山口大学を優しく、そして、厳しく受け入れてくださった平川地区、阿武町、周防大島のみなさまに厚く御礼申し上げます。(渡邊)

## 熟議 キャラバン 2012 in やまぐち 報告書

平成 25 年 3 月 31 日 発行

編 者	編集委員 辰己 佳寿子・辻 多聞
発 行 所	国立大学法人 山口大学 エクステンションセンター 〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1
印 刷 所	有限会社 いづみプリンティング

ISBN 978-4-9906598-2-0

「熟議 in やまぐち」は、山口大学  
創基 200 周年記念事業の一つです



氣